畑ヶ迫遺跡

２００９

津和野町教育委員会

畑ヶ迫遺跡

2009

津和野町教育委員会

序

山陰の小京都として知られる津和野町には、恵まれた自然環境の中で先人たちが生活していた証である貴重な文化財が数多く残されています。今回、邑輝地区の畑ヶ迫遺跡で県道津和野田万川線建設工事に先だって発掘調査をおこなった結果、近代の銅山師であった堀氏関連の遺跡が良好な状況で地下に残されていることが明らかとなりました。

米蔵跡では類例の少ない煉瓦(れんが)敷きの床面遺構を検出し、その床下は割石が埋められた入念な造りであることを確認しました。また、営繕場跡からは排水用の暗渠、掘立柱跡、礎石などの遺構を検出しました。出土遺物には漆喰・鉄製のカスガイ・銅の溶融物である銅滴などもあり、左官・大工・鍛冶屋など堀氏お抱え職人の存在がうかがえます。これら堀氏直営の施設であった米蔵跡・営繕場跡は保存状態が良好で、かつて堀氏が繁栄していたことをしのばせる文化財として重要であることから、国指定名勝「旧堀氏庭園」の一部として盛土保存することにしました。

堀氏家作(かさく)跡からは、池庭跡・導水施設・排水施設などの遺構を検出しました。導水施設は、燻瓦の丸瓦を合わせ口にしたものを連続して利用しており、特徴的な構造をしています。燻瓦には生産地を示す刻印があり、関西地方産の瓦が運搬されて来ていた事実も明らかとなりました。また、同様の燻瓦は堀氏本家の「楽山荘」庭園一帯でも使用されています。このことから、堀氏本家の「楽山荘」庭園と、堀氏が建て親族に貸すこともあった家作は、使用していた瓦に関連性があったことが指摘できました。

本書はこのような内容を掲載した発掘調査の記録です。この記録が今後における学術研究の基礎資料となり、その成果が学校教育・社会教育などで活用され、広く教育文化の向上に寄与できれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご理解・ご協力をいただきました島根県益田県土整備事務所津和野土木事業所、大谷一生氏、及び関係各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成 21 年 8 月 28 日

津和野町教育委員会
教育長　斎藤　　誠

例　　言

1．本書は、津和野町教育委員会が 2004・2005（平成 16・17）年度に島根県益田県土整備事務所から委託を受けて実施した、島根県鹿足郡津和野町邑輝、畑ヶ迫地区に所在する畑ヶ迫遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査地は以下のとおりである。

「旧堀氏庭園」（国名勝指定地内）島根県鹿足郡津和野町邑輝８０２番１

「畑ヶ迫遺跡」（国名勝指定地外）　〃　７９４番５

3．国名勝指定地内をＡ区、国名勝指定地外をＢ区と呼称した。当初「畑ヶ迫遺跡」として発掘調査に着手し、途中でＡ区が国名勝指定を受け「旧堀氏庭園」の一部となったが、発掘調査報告書である本書での名称は「畑ヶ迫遺跡」とした。

4．聞取調査により、調査地には堀氏の「米蔵」「営繕場」「家作」が存在していたことを確認している。「家作」は現在ではあまり用いられる言葉ではないが、辞書（広辞苑第４版）に「②貸すために作った家。貸家。」の用例があり、かつ当時使用されていた歴史的用語でもあることから本書では使用した。

5．調査体制

調査主体　津和野町教育委員会	教育長	斎藤	誠
事務局	教育次長	廣石	修
	文化財係長	中井	將胤
調査員	文化財係	宮田	健一
調査補助員	嘱託	永田	茂美
整理作業員	嘱託	椋木	牧子

発掘作業員

前田貢、村上茂子、岩本和子、岩本トヨ子、青木正充、楠靖久、鈴木貴史、波田好恵

6．調査にあたっては、下記の方々にご指導いただいた。記して謝意を表します。（敬称略）

本中眞（文化庁記念物課）、
丹羽野裕（島根県教育庁文化財課）、
松島弘（津和野町文化財保護審議会会長）、
渡辺一雄（梅光学院大学）

7．調査にあたっては、下記の方々にご協力いただいた。記して謝意を表します。（敬称略）

大谷一生、杉内祥廷、堀純一、青木正充、山内嘉夫、仲隆裕、矢ヶ崎善太郎、岩崎仁志、有馬啓介、濱浦健太、勝部智明、澤田正明

8．表土等除去復旧工事については、佐伯建設株式会社に委託した。

9．測量業務については、株式会社ワールドに委託した。

10．発掘遺構（Ａ区米蔵北西隅・Ｂ区池庭ＳＧ１）移設復元工事については、水舟造園に委託した。

11．本書に用いた方位は、第１図が真北、その他の図が国土調査法第Ⅲ座標系（世界測地系）に基づく座標北である。

12．遺物注記等に用いた今回の調査番号は、次のとおりである。

畑ヶ迫遺跡１次調査（HGS-1）、同２次調査（HGS-２）

13．遺構等の記号は次の略号をもちいた。また、遺構番号は遺構種別ごとの番号とし、Ａ・Ｂ区での通し番号とした。

ＳＡ：柱穴列、ＳＰ：ピット・柱穴、ＳＤ：溝（暗渠、土管等を含む）、ＳＧ：池、
ＳＶ：石列・石積、ＳＸ：その他の遺構、ＴＲ：トレンチ

14．瓦の刻印に見られる漢字の旧字体については、新字体で表記した。

15．紙幅の関係から調査地に関する聞取調査の詳細は割愛した。

16．調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

17．本書は永田・椋木の協力のもと、宮田が編集にあたった。

本文目次

第１章　発掘調査の経緯…… 1
第１節　調査の経緯…… 1
第２節　調査の方法…… 1

第２章　遺跡の位置と環境…… 2
第１節　地理的環境…… 2
第２節　歴史的環境…… 2

第３章　調査の結果……11
第１節　Ａ区（名勝指定地内）の調査……11
第２節　Ｂ区（名勝指定地外）の調査……25
第３節　Ａ・Ｂ区境の石組水路……32
第４節　遺物……35

第４章　総括……68

挿図目次

第１図　関連遺跡位置図（1/50,000）…… 3
第２図　畑ヶ迫遺跡発掘調査地位置図…… 4
第３図　発掘調査区全図（1/250）…… 5
第４図　Ａ区平面図（1/80）…… 7
第５図　Ｂ区平面図（1/80）…… 9
第６図　ＴＲ１土層断面図（1/30）……12
第７図　ＴＲ２土層断面図（1/30）……12
第８図　Ａ区南壁（1/50）……13
第９図　Ａ区米蔵跡北西隅平面図（1/30）……15
第 10 図　御米蔵跡南北土層断面（1/20）……16
第 11 図　御米蔵跡東西土層断面（1/30）……17
第 12 図　御米蔵跡南北横断面（1/20）……18
第 13 図　御米蔵跡東西縦断面（1/20）……19
第 14 図　Ａ区ＳＶ１(石列)・ＳＤ７(土管)実測図（1/20）……20
第 15 図　Ａ区ＳＶ１(石列)石①拓本（1/10）……20
第 16 図　Ａ区ＳＡ１（1/30）……20
第 17 図　Ａ区ＳＸ断面図（1/20）……21
第 18 図　Ａ区　ＳＤ１縦断面（1/30）……22
第 19 図　Ａ区　ＳＤ２断面（1/30）……23
第 20 図　Ａ区　ＳＤ３断面（1/30）……23
第 21 図　Ａ区西半遺構断面図（1/30）……24
第 22 図　Ｂ区東西土層断面（1/50）……25

第 23 図　B区南北土層断面（1/50）……26
第 24 図　B区南北土層断面（1/50）……26
第 25 図　B区　ＳＧ１・ＳＤ４（1/40）……27
第 26 図　B区　ＳＧ１断面・立面図（1/30）……28
第 27 図　B区ＳＤ４縦断面（1/30）……29
第 28 図　B区　ＳＤ５（1/40）……30
第 29 図　B区　ＳＸ 25・ＳＤ４土層断面図（1/10）……31
第 30 図　石組水路実測図（1/60）……33
第 31 図　A区米蔵跡出土遺物（１～３：1/3、４：1/4）……35
第 32 図　A区ＳＤ１出土遺物（５～６：1/3、７：1/4）……36
第 33 図　A区ＳＤ２出土遺物（８：1/3）……36
第 34 図　A区ＳＤ３出土遺物①（９～ 14：1/3）……37
第 35 図　A区ＳＤ３出土遺物②（15 ～ 17：1/3、刻印のみ 1/1）……38
第 36 図　A区ＳＤ３出土遺物③（18 ～ 21：1/4、22・23：1/3）……39
第 37 図　B区ＳＧ１出土遺物（24：1/2、25・26：1/4・刻印のみ 1/1）……40
第 38 図　B区築山盛土出土遺物（27 ～ 29：1/3、30：1/4）……41
第 39 図　B区ＳＤ４出土遺物①（31：1/4、刻印のみ 1/1）……42
第 40 図　B区ＳＤ４出土遺物②（32：1/4、刻印のみ 1/1）……43
第 41 図　B区ＳＤ４出土遺物③（33：1/4、刻印のみ 1/1）……44
第 42 図　B区ＳＤ４出土遺物④（34：1/4、刻印のみ 1/1）……45
第 43 図　B区ＳＤ４出土遺物⑤（35：1/4、36：1/6）……46
第 44 図　B区ＳＤ５出土遺物（37：1/6）……47
第 45 図　B区ＳＤ６出土遺物（38：1/6）……47
第 46 図　A区遺構に伴わない遺物①（39 ～ 45：1/3）……48
第 47 図　A区遺構に伴わない遺物②（46 ～ 48：1/4）……49
第 48 図　A区遺構に伴わない遺物③（49：1/4、50・51：1/3）……50
第 49 図　A区遺構に伴わない遺物④（52 ～ 56：1/4）……51
第 50 図　A区遺構に伴わない遺物⑤（57 ～ 59：1/4）……52
第 51 図　A区遺構に伴わない遺物⑥（60 ～ 64：1/4、刻印のみ 1/1）……53
第 52 図　A区遺構に伴わない遺物⑦（65 ～ 71：1/4、刻印のみ 1/1）……54
第 53 図　A区遺構に伴わない遺物⑧（72 ～ 74：1/4）……55
第 54 図　A区遺構に伴わない遺物⑨（75 ～ 78：1/4、刻印のみ 1/1）……56
第 55 図　A区遺構に伴わない遺物⑩（79 ～ 81：1/4、刻印のみ 1/1）……57
第 56 図　A区遺構に伴わない遺物⑪（82 ～ 87：1/4、刻印のみ 1/1）……58
第 57 図　A区遺構に伴わない遺物⑫（88・89：1/4）……59
第 58 図　A区遺構に伴わない遺物⑬（90 ～ 98：1/3）……60
第 59 図　A区遺構に伴わない遺物⑭（99 ～ 104・106：1/3、105：1/2、107:1/4）……61
第 60 図　B区遺構に伴わない遺物①（108 ～ 116：1/3、117 ～ 119：1/4）……62
第 61 図　B区遺構に伴わない遺物②（120 ～ 123：1/4、124：1/3）……63
第 62 図　A・B区境石組水路の表採遺物（125：1/3、126：1/4）……64

表目次

第１表　遺物観察表①…… 65
第２表　遺物観察表②…… 66
第３表　遺物観察表③…… 67
第４表　燻瓦・赤瓦集計表…… 69
第５表　燻瓦刻印分類表…… 70
第６表　刻印瓦集計表（丸瓦類（Ｂ区ＳＤ４を除く））…… 71
第７表　刻印瓦集計表（丸瓦類（Ｂ区ＳＤ４））…… 71
第８表　刻印瓦集計表（丸瓦類合計）…… 72
第９表　刻印瓦集計表（平瓦類合計）…… 72
第 10 表　刻印瓦集計表（総計）…… 72

図版目次

調査地航空写真…… 1
発掘調査地航空写真…… 1
米蔵跡全景…… 2
米蔵跡土層断面…… 2
米蔵跡西辺基礎石上の黒色付着物…… 3
米蔵跡南北ライン北端部の土層断面…… 3
米蔵跡北西隅の復元工事状況…… 3
米蔵跡北西隅の復元工事状況…… 3
復元工事終了後の米蔵跡…… 3
Ａ区土管（ＳＤ７）と石列 …… 4
Ａ区石列ドリル痕のある石材…… 4
Ａ区東半の遺構面と御米蔵跡…… 5
Ａ区東半遺構と堀氏本家…… 6
Ａ区東半検出遺構…… 6
タタキと柱穴列…… 7
Ａ区ＳＰ１半掘状況…… 7
Ａ区ＳＰ３半掘状況…… 7
Ａ区ＳＰ２半掘状況…… 7
Ａ区ＳＰ４半掘状況…… 7
Ａ区ＳＸ１検出状況…… 8
Ａ区ＳＸ４（左）・３（右）検出状況 …… 8
Ａ区拡張部ＳＤ９検出状況…… 8
漆喰の断面…… 8
Ａ区ＳＸ２検出状況…… 8
Ａ区礎石ほか検出状況…… 8
暗渠…… 8
鍛煉瓦…… 8
Ｂ区ＳＧ１・ＳＤ４発掘状況…… 9
Ｂ区ＳＧ１発掘状況……10
Ｂ区ＳＧ１・ＳＤ４発掘状況……10

Ｂ区ＳＤ４内部の堆積状況…… 11
Ｂ区ＳＧ１モルタル下から検出のＳＤ４…… 11
Ｂ区ＳＧ１下から検出されたＢ区ＳＤ４…… 11
Ｂ区ＳＤ４西端…… 11
Ｂ区ＳＤ４新 (左) ・旧 (右) 接合状況 …… 11
Ｂ区ＳＧ１赤瓦使用状況…… 12
池庭遺構移築復元工事状況…… 12
Ｂ区トレンチ全景…… 12
埋め戻し工事風景…… 12
Ｂ区ＳＸ 25 土層断面 …… 12
移築復元工事後の池庭遺構…… 12
Ｂ区ＳＤ５と石積Ｂ面中の排水口②…… 13
Ｂ区石敷遺構とＳＤ５…… 13
Ｂ区ＳＤ５部分…… 13
Ｂ区ＳＤ６検出状況…… 13
石組水路Ａ面全景…… 14
Ａ面暗渠① (ＳＤ９) 付近 …… 14
Ａ面開渠①左付近…… 14
Ａ面暗渠②付近…… 14
Ａ面開渠①右付近…… 14
石組水路Ｂ面全景…… 15
Ｂ面左端隅角部付近…… 15
Ｂ面排水口② (ＳＤ５) 付近 …… 15
Ｂ面排水口① (ＳＤ４) 付近の現況 …… 15
Ｂ面排水口① (ＳＤ４) 詰石除去後 …… 15
燻瓦が多用された楽山荘庭園…… 16
楽山荘庭園裏の土塀…… 16
土塀の刻印瓦①…… 16
刻印①…… 16
楽山荘庭園裏門…… 16
裏門の刻印瓦…… 16
土塀の刻印瓦②…… 16
刻印②…… 16

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査の経緯

津和野町内において県道津和野田万川線邑輝Ⅱ工区新世紀道路（改良）工事が計画され、事業主体である島根県益田県土整備事務所津和野事業所と津和野町教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきた。工事計画地内は畑ヶ迫遺跡の一部である可能性があったため、事前に遺構・遺物の有無を確認するための試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は国庫補助事業としておこなった。その結果、テストピット３（ＴＰ３）からは、近代の石組暗渠が検出された。ＴＰ３地点は、堀氏の営繕場が存在していた場所と伝えられており、その南東側には米蔵跡の煉瓦敷きの床面が残されていることも明らかとなった。これらの遺構は、堀氏が経営した一連の施設に関連した遺構であり、堀氏の建物・庭園とともに重要な遺構であると考えられた。このため、これらの遺構を保護するための新たな文化財指定について検討を加えるとともに、道路拡幅の是非についても検討を加える必要が生じた。島根県益田県土整備事務所、文化庁、島根県教委、津和野町教委とで協議を重ねた結果、畑ヶ迫地区に残る旧堀氏関連の庭園・建物を中心とした遺構の一部を国の名勝「旧堀氏庭園」として指定した上で、県道拡幅はこれまでの工事箇所に接続するための必要最小限の工事にとどめることとなった。

止むを得ず新たに道路敷地となるとなる範囲をＡ区（名勝指定地内）、Ｂ区（名勝指定地外）と呼称し、遺構の遺存状況を確認するため、平成 16（2004）年度に第１次本発掘調査を、翌平成 17（2005）年度に第２次本発掘調査を受託事業として実施した。その結果、米蔵・営繕場関連の地下遺構等が良好に残されていることが明らかとなった。Ａ区においては、これらの残された遺構を保護する盛土層が確保できることを確認した上で、道路建設をおこなうこととなった。Ａ・Ｂ区境に存在していた石組水路遺構については、Ｂ区側に新たな別の水路を設けることで、大半の石組水路遺構を道路下に埋設保存することとした。これにより、Ｂ区側の石積については一部が掘削されることとなったが、Ａ区側については現代の積み足しと考えられる上辺の一部の石積を除き、当初の石積の大半は後世に残されることとなった。一方、Ｂ区は堀氏の「家作」があり、堀氏第 15 代藤十郎の娘であった千代子が住んでいた場所と伝えられており、その南端には池庭遺構が残されていることも明らかとなった。Ｂ区については、この池庭遺構を中心に発掘調査をおこない、記録を残すこととした。

また、埋め戻し工事に合わせて米蔵跡の北西隅部については、他所に集積されていた基礎石および撹乱土中出土の踏石・煉瓦を復元した。国名勝指定地外であるＢ区の池庭遺構については、他所に集積されていた庭石を補ったうえで、庭木であるモッコクも含めて、南西側の敷地残地に移設保存をおこなった。これらの復元・移設保存に当っては、現土地所有者である大谷一生氏にご協力をいただいた。

平成 18 ～ 20（2006 ～ 2008）年度には遺物の整理等、平成 21（2009）年度には報告書刊行を受託事業としておこなった。

第２節　調査の方法

平成 16 年度調査は、発掘作業に先立って調査区を覆う表土・盛土層を重機によって除去した。その後、調査区全体を 10 ｍグリッドで区画し、土層の堆積状況および遺構・遺物の広がりを確認しながら、人力による発掘作業を進めた。出土遺物は２ｍの小グリッドごとに取り上げた。調査区の一部では、遺物包含層発掘後に遺構検出をおこない、写真撮影・遺構発掘・図面実測などをおこなった。

平成 17 年度調査は、昨年度実施した１次調査の継続調査であり、１次調査で確認された遺構面の一部断ち割り等の後に、写真撮影・図面実測などをおこなった。

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境

旧堀氏庭園は島根県鹿足郡津和野町大字邑輝、畑迫地区に位置する。津和野町中心部から約６km 上流、津和野川の支流である白石川沿いの長さ約１ｋｍ、幅約 70 ｍの狭長な谷間にあり、標高は約 220 ｍである。堀氏が経営に関わった笹ヶ谷銅山は、堀氏本家から北約４ｋｍの山中にあった。

第２節　歴史的環境

畑迫地区は古くから交通の要衝の地であり、津和野中心部から杉ヶ峠を越えて日本海に面した港町である須佐（山口県須佐町）、江崎（同県田万川町）に至る道筋に当たる。また、白石川上流の木曽野峠を越えた北西山麓には、中世津和野の領主吉見氏が弘安５年（1282）に元寇再防備のため能登国から最初に入部した場所と伝えられる吉見氏居館跡（木蘭遺跡）が存在している。文献では吉見氏以外の記録はほとんど残されていないが、「白石」という中世のムラが畑迫地区周辺にあったことが、これまでの文献調査で明らかになっている（沖本常吉編『津和野町史』第１巻、1970 年）。また、畑迫地区周辺には畑迫城跡・トウノウ城跡等の中世山城、堀家宝篋印塔・伝山大将の墓・和楽園宝篋印塔・堀氏墓所脇石塔群、六十六部廻国塔等の中世から近世にかけての石造物が存在している。これまでの発掘調査では、畑迫遺跡で中世以降の遺物が出土している外、隣接する西谷出合地区にある出合的場遺跡・殿河内遺跡・寺ヶ台前田遺跡で中世後半から近世にかけての遺物遺構が確認されている。特に寺ヶ台前田遺跡から出土した精錬鍛冶滓には銅を含んでいることから、中世末から近世初頭に非鉄金属生産をおこなっていたことが明らかであり、近世以降に盛況となる周辺の鉱山との関係が注目される。

近世に入ると吉見氏に替わって、坂崎氏１代 16 年間・亀井氏 11 代 225 年間にわたった津和野藩が成立する。その津和野藩領に囲まれる形で、堀氏本家周辺は畑ヶ迫村として周辺の十王堂村・石ヶ谷村・中木屋村・日原村とともに大森代官所（島根県大田市大森町）の支配下にあるいわゆる天領となる。これら天領とされた村にはいずれも鉱山があり、畑ヶ迫村では堀氏本家裏の緑山・山内に鉱山跡が確認できる。

近代に至り、明治７年（1874）には堀氏本家周辺は邑輝村となる。明治 22 年（1883）町村制実施により、周辺６村と合して新たに畑ヶ迫村（のちに畑迫村）が誕生し、それまでの邑輝村は大字邑輝となった。畑ヶ迫村の名称は「天領であった畑ヶ迫村に富豪堀家あり県下は勿論中国地方にも知られて居るから」という理由で決定したという（後藤政兵衛『畑迫』1953 年）。畑迫村は昭和 30 年（1955）に周辺の３町村と合併し、津和野町の一部となった。これにより堀氏本家周辺は、津和野町大字邑輝、畑迫地区として現在に至っている。

畑迫地区には堀氏本家の他に、通称「上堀」「和堀」「中堀」「新堀」と呼称される４つの分家があり、津和野城下町には通称「津堀」、十王堂村には通称「十堀」と呼称された分家があった（沖本常吉編『堀家史料目録一』堀幸清発行、1968 年）。このほか畑迫地区には鉱山跡、石切丁場跡、御米蔵跡、営繕場跡、堀氏本家および分家の祖先が葬られた堀氏墓所、畑迫病院・氷室跡などの堀氏関連遺構が残る。また、戸長役場、小学校、郵便局、宿屋、酒蔵、多くの借家、山神様などもあった。

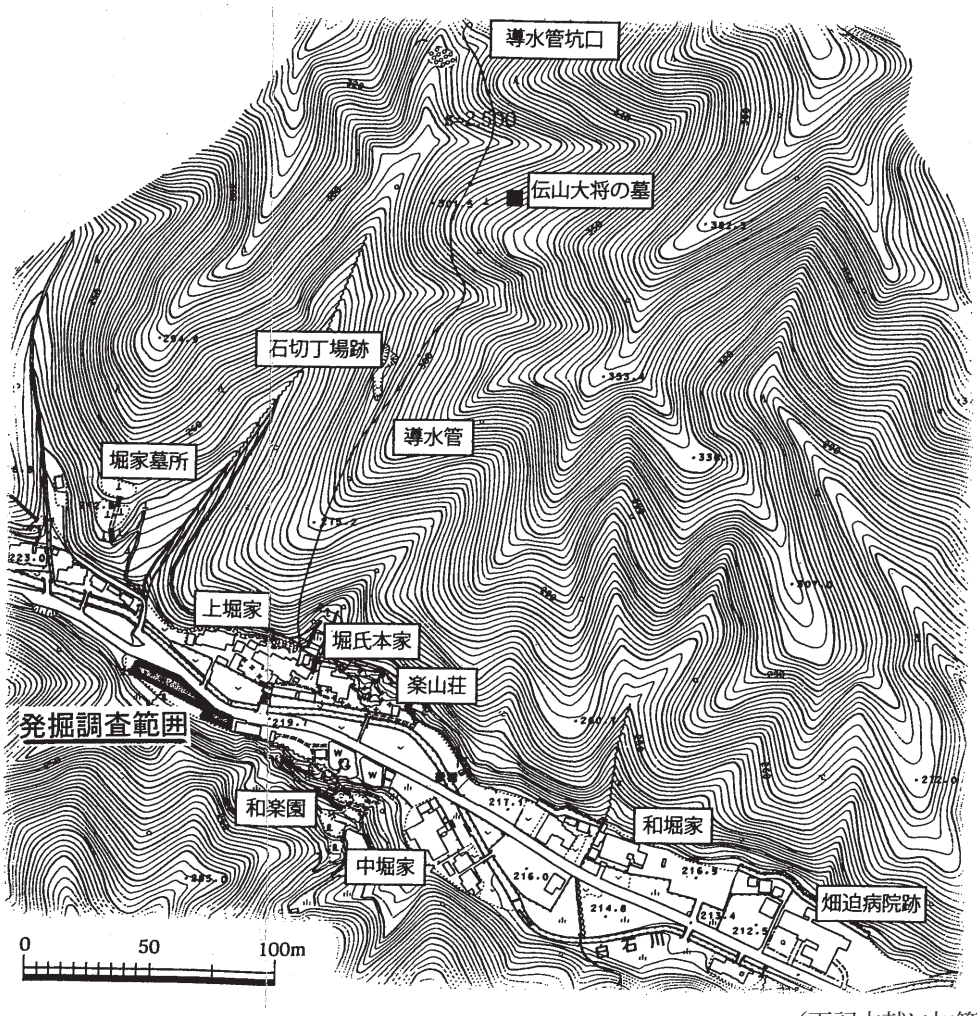
1 出合的場遺跡　2 殿河内遺跡　3 寺ヶ台前田遺跡　4 トウノウ城跡　5 畑ヶ迫城跡

6 畑ヶ迫遺跡　7 堀家宝篋印塔　8 伝山大将の墓　9 笹ヶ谷銅山跡

10 津和野城跡　11 木蘭遺跡（吉見氏居館跡）　12 高田遺跡　13 喜時雨遺跡

14 横瀬遺跡　15 大原遺跡　16 土井原遺跡

第１図　関連遺跡位置図（1/50,000）



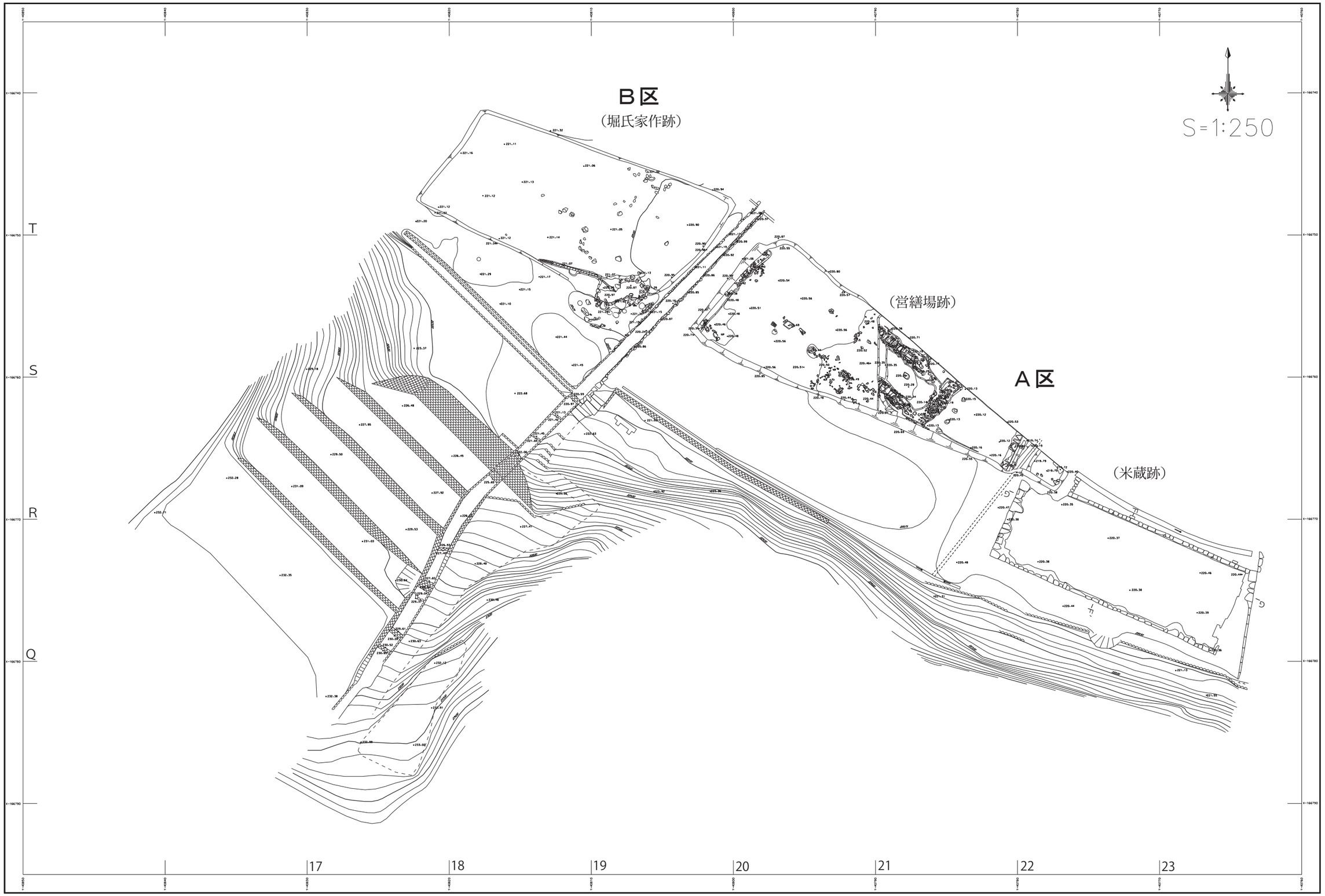
（下記文献に加筆）

第２図　畑ヶ迫遺跡発掘調査地位置図

堀氏の菩提寺は曹洞宗西光寺であり、本家から約２ｋｍ南東の大字部栄、市尾地区にある。その境内には昭和５年（1930）建立の第 15 代堀藤十郎の彰徳碑が建てられている。同じ市尾地区には、堀氏の資金によって昭和 11 年（1936）に建設された火葬場があった。また、堀氏本家より約３ｋｍ南東の大字部栄、横瀬地区には、明治 36･37 年に築造された池庭である旧川園が残っている。

（参考文献）

津和野町教育委員会 2005『旧堀氏庭園調査報告書』第２章「旧堀氏庭園周辺の歴史的環境」を転載（宮田執筆）。



第３図　発掘調査区全図（1/250）

第４図　Ａ区平面図（1/80）

第５図　Ｂ区平面図（1/80）

第３章　調査の結果

調査の経過によって、記録保存としての緊急調査から、保存を前提とした調査へ変更となったこともあり、遺構面以下の調査が不十分な部分もある。以下、記録の得られた限りにおいて、説明を加えることとしたい。

第１節　Ａ区（名勝指定地内）の調査

米蔵跡の北西隅については、煉瓦・基礎石が欠落しており撹乱を受けていることが明らかとなった。欠落した北東辺の基礎石の一部は県道に隣接した土留石等に転用され、一部は他所へ集積されたと考えられる。米蔵の地下には礫が埋め込まれており、その上を黄褐色系の土で造成した後、薄く敷いたモルタルの上に煉瓦が置かれていることが判明した。

道路工事によって掘削される部分を発掘したところ、大部分は後世の盛土であることが明らかとなった。盛土層より下には石組暗渠が検出され、営繕場の遺構の一部であると考えられる。暗渠内部は土砂が流入しておらず空洞が残っており、比較的良好な保存状況であった。盛土層より下の遺構については、掘削が及ばず道路下に保存された。

発掘終了後には米蔵跡北西隅の復元工事をおこなった。土地所有者より以前に掘削した状況を聞取り、他所に集積されていた石のうち米蔵基礎石と推定される石を選別した。選別は石の形状、加工状況、石材などを目安として行なった。石の上面に黒色付着物が残存している石材も多く、選別の際に有力な手がかりとなった。隅石については推定位置がほぼ確実と考えられる。その他の基礎石については、石の相場を合わせるように努めたが、その位置・順序についての確証は得られず、再検討が必要であるかもしれない。

基本層序

土層の時期・遺構面から大別をおこない、第１～１０層とした。さらに土層の詳細な特徴から、細別をおこないアルファベットの小文字を付した。

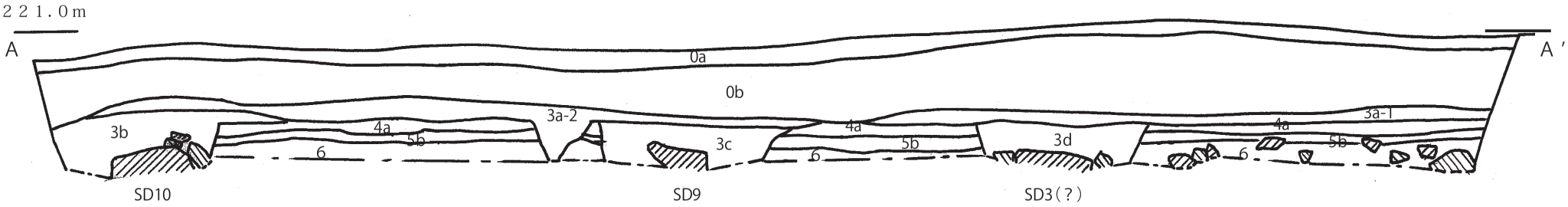
第０層は現代の土層で、一部に撹乱を含む。第１層は遺構面の覆土のうち上半を中心とした土層である。第２層は遺構面の覆土のうち、遺構面直上の土層である。第３層は遺構面を形成する土で、遺構面下にある暗渠埋土等を含む土層である。第４～６層は暗渠の構築より前の基盤となる土層である。第７層は御米蔵構築の土層である。第８～１０層は御米蔵構築より前の基盤となる土層である。

ＴＲ１

Ａ区北西辺に設置したトレンチである。現代の造成土である０層以下の土層断面が確認された。３ａ－１・３ａ－２層がＳＤ３(？)・９・10を覆っており、ＳＤ３(？)・９・10の暗渠は埋められた状態で遺構面が形成されていたことが確認された。ＳＤ３(？)・９・10の内部にはいずれも石組の暗渠が埋められていた。ＳＤ３(？)・９・10より前の土層としては、４ａ～６層を確認しているが、トレンチ内では明瞭な遺構面の存在を確認することはできなかった。

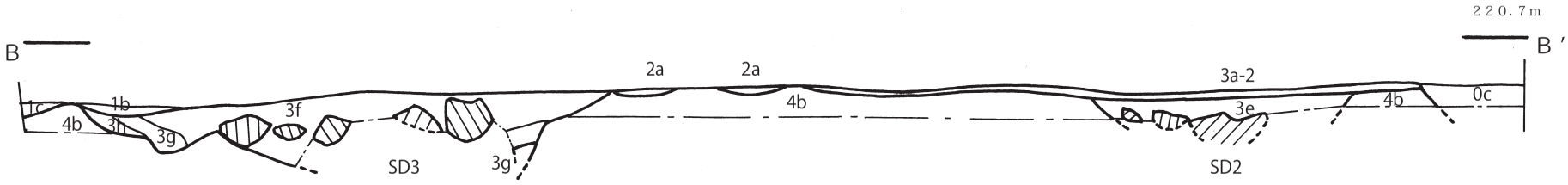
ＴＲ２

２１ライン上に設置したため、主要な遺構であるＳＤ２・３に斜行するラインとなった。よって、ＳＤ２・３の断面は直交する横断図ではない。また、遺構を保護する必要から完掘はしてい



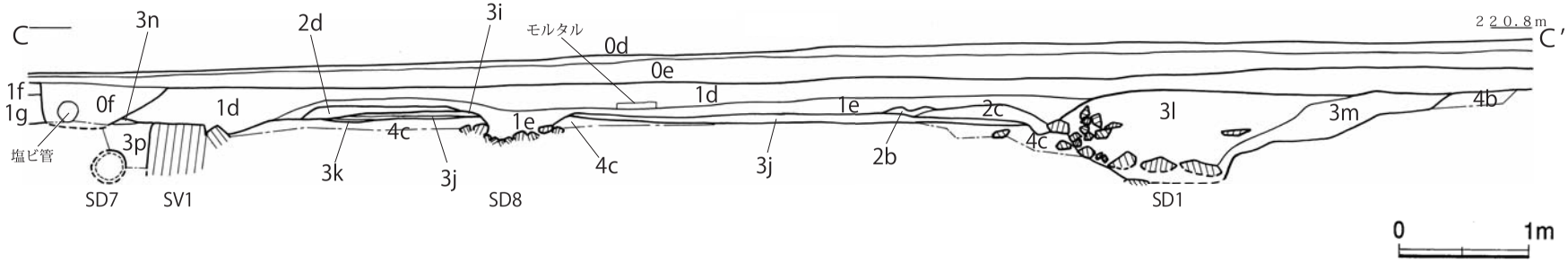
0a. 黒褐色粘質土（10YR3/1）
　　礫を多く含む。
0b. にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
1a. 暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
3a. 黒褐色粘質土（10YR3/2）
3b. 灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3c. 褐灰色粘質土（10YR4/1）
3d. 〃　（〃）
4a. 褐灰色粘質土（10YR4/2）
5a. 灰白色砂質土（5GY8/1）
5b. にぶい赤褐色粘質土（5YR4/4）
6．灰色粘質土（5Y4/1）

第６図　ＴＲ１土層断面図（1/30）



1c. 灰褐色粘質土（7.5YR4/2）
0c. 灰褐色粘質土（10YR4/2）【撹乱】
1b. 黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
3f. 暗褐色粘質土（10YR3/3）
3e. 暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
2a. 黒褐色粘質土（10YR2/3）焼土を含む。
4b. 褐色粘質土（10YR4/4）
3g. 暗赤褐色土（5YR3/2）【焼土】
3h. 褐色粘質土（10YR4/4）

第７図　ＴＲ２土層断面図（1/30）



0d　バラス
0e　にぶい褐色砂礫土　7.5YR5/4
0f　撹乱　塩ビ管あり
0g　褐灰色土　10YR4/1　1 ～ 10cm の石を多く含む
0h　撹乱
1c　褐灰色土　7.5YR4/1
1e　にぶい黄褐色土　10YR4/3
1f　にぶい黄橙色砂　10YR6/3
1g　にぶい黄褐色土　10YR5/3　漆喰を少量含む
1h　灰黄褐色土　10YR6/2
2b　粗砂　径 2mm 程度
2c　漆喰
2d　灰黄褐色土　10YR4/2　2 ～ 4 mm の粗砂・小石を多く含む
3i　にぶい黄褐色土　10YR5/4
3j　にぶい黄橙色土　10YR7/4　漆喰が約 2 ～ 5mm で層状に堆積
3k　褐灰色土　10YR4/1　炭を多く含む
3l　にぶい褐色土　7.5YR5/3
3m　黒褐色土　10YR3/1　焼土・炭を多く含む
3n　にぶい黄橙色粘質土　10YR6/4
3o　灰黄色コンクリート　2.5Y7/2　1 ～ 2 mm の粗砂を多く含む。やや脆く、硬化悪い。
3p　灰黄褐色土　10YR4/2　漆喰・瓦 (赤・燻) を多く含む
4b　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/4
4c　灰黄褐色土　10YR4/2
7a　にぶい黄橙色粘質土　10YR6/4
7b　灰褐色土　7.5YR4/2
7c　灰白色コンクリート　2.5Y7/1　1cm の石を多く含む
7d　灰白色コンクリート　2.5Y7/1　0.5mm の砂を多く含む
7e　にぶい黄橙色砂質土　10YR6/4　0.5 ～ 3 cm の石を多く含む
7f　灰黄褐色砂質土　10YR4/2　5 ～ 35cm の石を多く含む
8　灰黄褐色土　10YR5/2　一部下面に鉄分沈着あり
9　褐灰色土　10YR4/1
10　灰オリーブ色土　5Y6/2

第８図　Ａ区南壁（1/50）

ないため、暗渠上面の石までの図化となっている。３ａ－２層がＳＤ２・３を覆っており、ＳＤ２・３の暗渠は埋められた状態で遺構面が形成されていたことが確認された。ＳＤ３の断面南西側の埋土には焼土を含んだ３ｈ層があり、他の溝埋土とは異なっている。また、ＳＤ３の３ｇ層には煉瓦を含んでおり、ＳＤ３は明らかに近代以降の構築と考えられる。ＳＤ２・３の間の遺構面上には浅い焼土遺構も検出された（ＳＸ３・４）。

米蔵跡

概要

本発掘調査前から既に基礎石および煉瓦敷遺構の大半が露出しており、上面を覆う土を取り除く清掃調査をおこなった。調査前には駐車場の一部として使用されていたこともあり、煉瓦敷遺構上面は乱れ、一部に凹凸があった。また、撹乱の及んでいた米蔵跡北西隅については、米蔵の構築状況を確認するため、一部でトレンチ調査をおこなった。

米蔵跡の南東辺および北西隅は撹乱を受けており、基礎石および煉瓦敷遺構の一部が失われていた。残存部から推定される米蔵跡の規模は、基礎石部分を含めて長軸約１７．５ｍ以上、短軸約６．４ｍである。

土層断面

基盤層となる８～１０層を掘り込んだ後に、約５０ｃｍの厚さで７ｆ層を埋め、その後に基礎石列を並べ、さらに約１５ｃｍの厚さで７ｅ層を埋めていることが明らかとなった。下半の７ｆ層は、５～３５ｃｍの石を多く含む灰黄褐色砂質土であるのに対して、上半の７ｅ層は０．５～３cm の石を多く含んだにぶい黄橙色砂質土である。色調からいずれも明らかに外部から持ち込んだ客土と思われるが、含有している石の大きさが異なっている。ちなみに発掘調査前には、米蔵の床下には空隙があり、そのために乾燥しているという地元の伝承があった。発掘調査の結果、現状では空隙は確認できず、大石を多量に含む７ｆ層の存在が確認された。伝承は７ｆ層の大石を埋める際にできる空隙のことを伝えていたのかとも思われる。７ｅ層の上には厚さ約１．５～２．５ｃｍのモルタルである７ｄ層があり、その上に煉瓦が並べられている。よって、煉瓦は基礎石に接していない。

基礎石の外側下辺にはモルタルである７ｃ層が確認され、その上部には厚さ約３～５ｃｍで７ａ層が敷かれていた。７ａ層はにぶい黄橙色粘質土であり、米蔵周辺は貼土（タタキ？）仕上げであったと考えられる。

床面

煉瓦敷遺構に用いられた煉瓦は、御米蔵の短軸方向に平行して並べられている。使用された煉瓦の数は、御米蔵跡の長軸方向で１３９個以上、同短軸方向で２４．５個であり、総数で３４００個以上が使用されたと考えられる。御米蔵の短軸方向で０．５個の端数が生じる理由は、煉瓦の平面配置がいわゆる煉瓦積みの配置で並べられており、１列ごとに南辺・北辺いずれかの端部でおよそ半裁された煉瓦を用いられていることによる。およそ半裁された煉瓦ではあるが、厳密に半分ではなく、打ち欠いた約半分の煉瓦が用いられており、南辺と北辺で様相が異なっている。南辺では、煉瓦の打ち欠きは南端の煉瓦１ヶ所である。北辺では、煉瓦の打ち欠きは北端の煉瓦とその内側の煉瓦の２ヶ所となっている列がある。このことから、煉瓦敷き遺構は南辺側から並

第９図　Ａ区米蔵跡北西隅平面図（1/30）

べ始められ、北辺側の煉瓦の打ち欠きによって最終的な全長の調整をおこなったと推定される。

なお、床面の煉瓦敷遺構で使用されている煉瓦の大きさは同一ではなく、長さ約２２．０～２３．０ｃｍ、幅約１０．５～１１．５ｃｍ、厚さ約５．０～５．５ｃｍとバラツキがある。一部には長さ２１．５ｃｍのものも存在しており、未だ厳密な規格品ではなかったと思われる。

煉瓦間の目地にはコンクリートがあり、その幅は約０．７～１．０ｃｍである。煉瓦下にもコンクリートはあり、その厚さは約１．５～２．５ｃｍである。

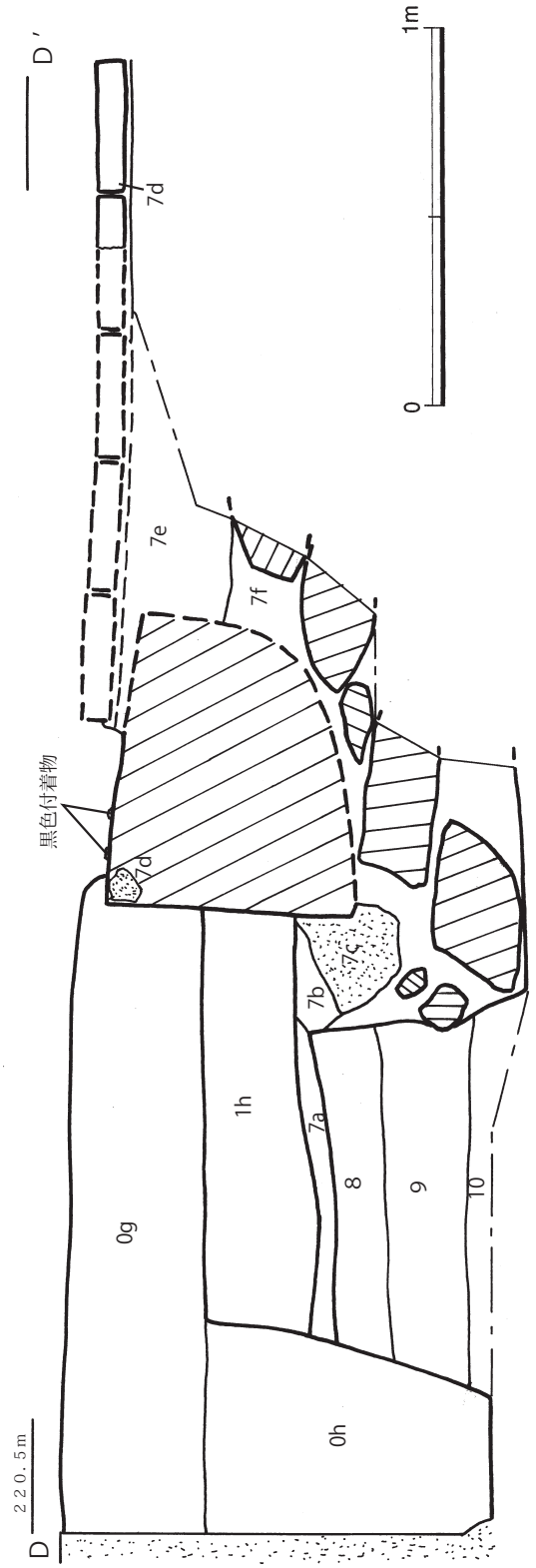
基礎石

発掘により断面が確認できる基礎石を見ると、その規模は奥行約５０～８０ｃｍ、高さ約４５ｃｍと大型の石が用いられている。幅については約２５～１００ｃｍと様々な大きさの石が用いられている。基礎石側面が埋められていない北面を見る限りでは、基礎石は基本的に上下に積まれておらず、一石を縦に使用して並べている。

石材は全て堀氏本家裏の緑山で産出する輝緑岩の割石を用いている。外から見える上面および側面については、ハツリ仕上げがされている。

基礎石上の煉瓦積み

西辺の基礎石西端部の一部には、煉瓦が２段以上積まれていた痕跡が残っていた。この積まれた煉瓦は、長さ１１ｃｍまたは１７ｃｍ、幅１１ｃｍ、厚さ３．５ｃｍであり、床面に用いられている煉瓦より小さい。このことから、煉瓦の大きさには少なくとも大小があり、床面で大型品、



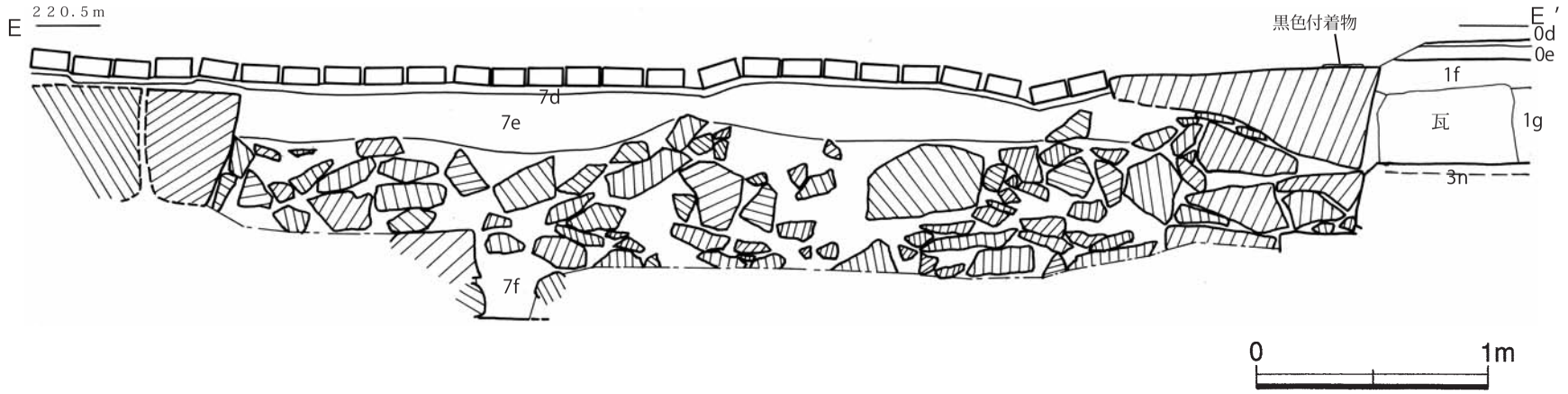
0g　褐灰色土　10YR4/1　1 ～ 10cm の石を多く含む
0h　撹乱
1h　灰黄褐色土　10YR6/2
7a　にぶい黄橙色粘質土　10YR6/4
7b　灰褐色土　7.5YR4/2
7c　灰白色コンクリート　2.5Y7/1　1cm の石を多く含む
7d　灰白色コンクリート　2.5Y7/1　0.5mm の砂を多く含む
7e　にぶい黄橙色砂質土　10YR6/4　0.5 ～ 3cm の石を多く含む
7f　灰黄褐色砂質土　10YR4/2　5 ～ 35cm の石を多く含む
8　灰黄褐色土　10YR5/2　一部下面に鉄分沈着あり
9　褐灰色土　10YR4/1
10　灰オリーブ色土　5Y6/2

第 10 図　御米蔵跡南北土層断面（1/20）

一部の積面で小型品というふうに、場所によって使い分けられていたことが分かる。

黒色付着物

多くの基礎石上面で、コールタール状の黒色付着物が確認された。厚さは約１～２ｍｍ程度残っていた。この状況から、煉瓦と黒色付着物の間には壁があり、その壁面外側に黒色のコールタール状のものが塗られていたことが推定される。



0d　バラス
0e　にぶい褐色砂礫土　7.5YR5/4
0f　撹乱　塩ビ管あり
0g　褐灰色土　10YR4/1　1 ～ 10cm の石を多く含む
0h　撹乱
1c　褐灰色土　7.5YR4/1
1e　にぶい黄褐色土　10YR4/3
1f　にぶい黄橙色砂　10YR6/3
1g　にぶい黄褐色土　10YR5/3　漆喰を少量含む
1h　灰黄褐色土　10YR6/2
2b　粗砂　径 2mm 程度
2c　漆喰
2d　灰黄褐色土　10YR4/2　2 ～ 4 mm の粗砂・小石を多く含む
3i　にぶい黄褐色土　10YR5/4
3j　にぶい黄橙色土　10YR7/4　漆喰が約 2 ～ 5mm で層状に堆積
3k　褐灰色土　10YR4/1　炭を多く含む
3l　にぶい褐色土　7.5YR5/3
3m　黒褐色土　10YR3/1　焼土・炭を多く含む
3n　にぶい黄橙色粘質土　10YR6/4
3o　灰黄色コンクリート　2.5Y7/2　1 ～ 2 mm の粗砂を多く含む。やや脆く、硬化悪い。
3p　灰黄褐色土　10YR4/2　漆喰・瓦 (赤・燻) を多く含む
4b　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/4
4c　灰黄褐色土　10YR4/2
7a　にぶい黄橙色粘質土　10YR6/4
7b　灰褐色土　7.5YR4/2
7c　灰白色コンクリート　2.5Y7/1　1cm の石を多く含む
7d　灰白色コンクリート　2.5Y7/1　0.5mm の砂を多く含む
7e　にぶい黄橙色砂質土　10YR6/4　0.5 ～ 3 cm の石を多く含む
7f　灰黄褐色砂質土　10YR4/2　5 ～ 35cm の石を多く含む
8　灰黄褐色土　10YR5/2　一部下面に鉄分沈着あり
9　褐灰色土　10YR4/1
10　灰オリーブ色土　5Y6/2

第 11 図　御米蔵跡東西土層断面（1/30）

踏石

北辺の基礎石北側には、踏石が２ヶ所残っていた。別の踏石１個が撹乱土の中から出土しており、米蔵跡北西隅に本来設置されていたものが撹乱を受けたものと推定される。この踏石１個については、復元工事の際に、他の踏石とのバランスを考慮して再設置した。

Ａ区営繕場跡

東側から西側への順で説明を加える。

ＳＶ１（石列）

Ａ区東端で検出した。調査区内で検出した規模は、長さ約２．７ｍ以上、幅約５０ｃｍである。石列はさらに調査区外の北東および南西方向に続いている。石列の西側にある平坦面を形成するために、構築された石列と考えられる。石材の規模は、幅約３０～９０ｃｍ、奥行約２０～５０ｃｍである。石①の側面には、径約３ｃｍの円形ドリル痕が２穴残っていた。東側下には土管があり、同じ主軸を有する。

ＳＤ７（土管）

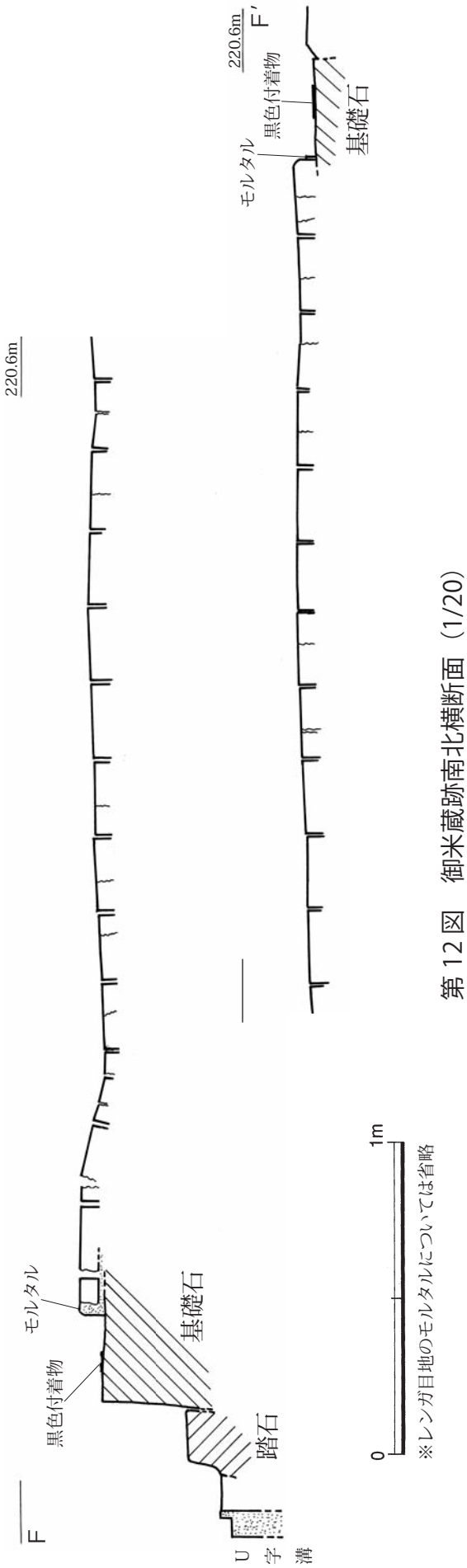
Ａ区東端で検出した。調査区内で検出した規模は、長さ約２．４ｍ以上である。土管はさらに調査区外の北東および南西方向に続いている。長さ約５５ｃｍ、幅約２０ｃｍの土管をつないでおり、接合部にはモルタルが巻かれている。モルタルは土管接合部以外にも巻かれており、破損による補修痕の可能性が考えられる。西側上方には石列があり、同じ主軸を有する。

ＳＤ８（溝）

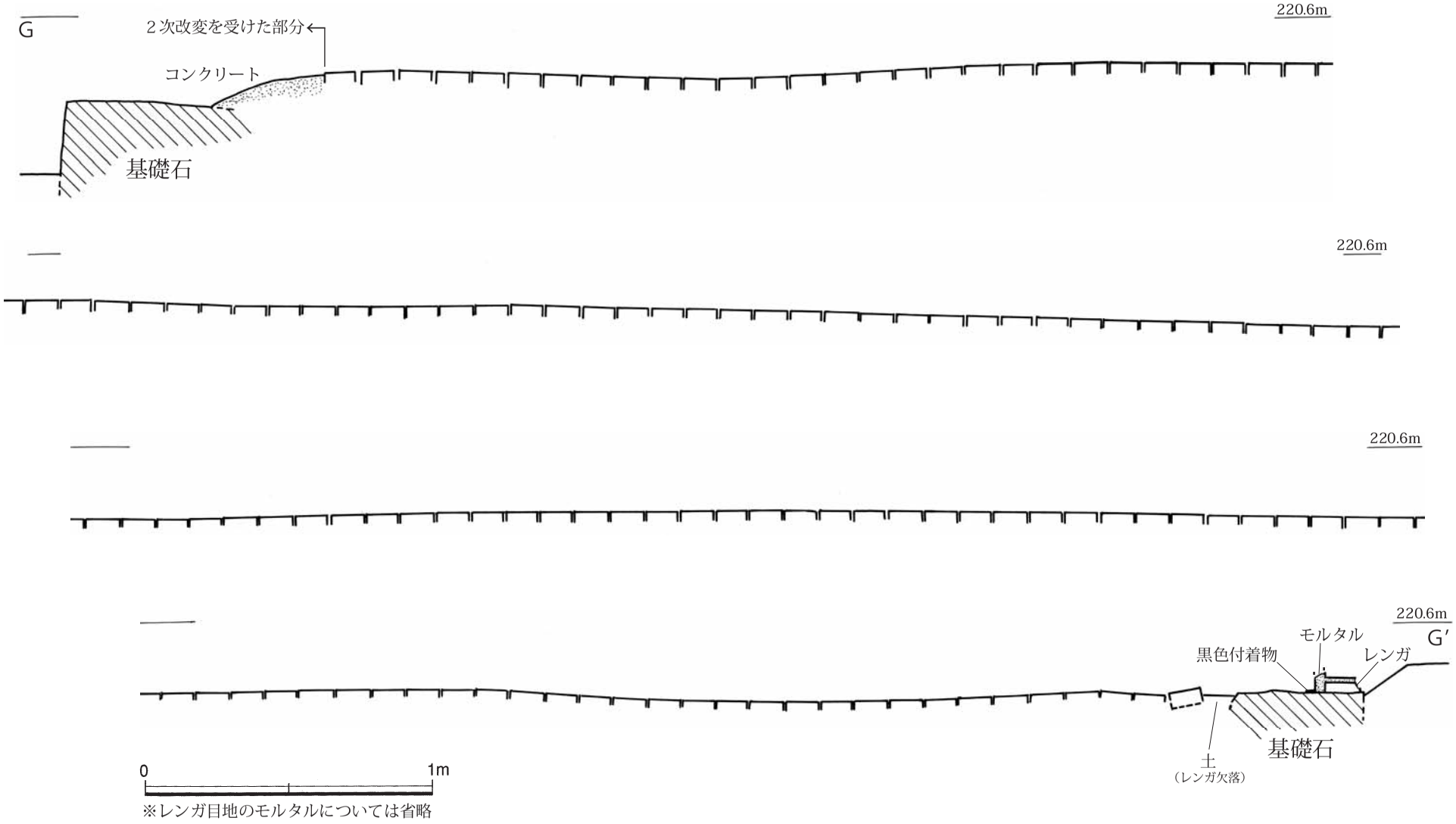
Ａ区南壁で確認したのみで、完掘はしていない。壁面から幅５０ｃｍ、約２０ｃｍと推定される。主軸はＳＡ１等と同じと推定される。

ＳＡ１（柱穴列）

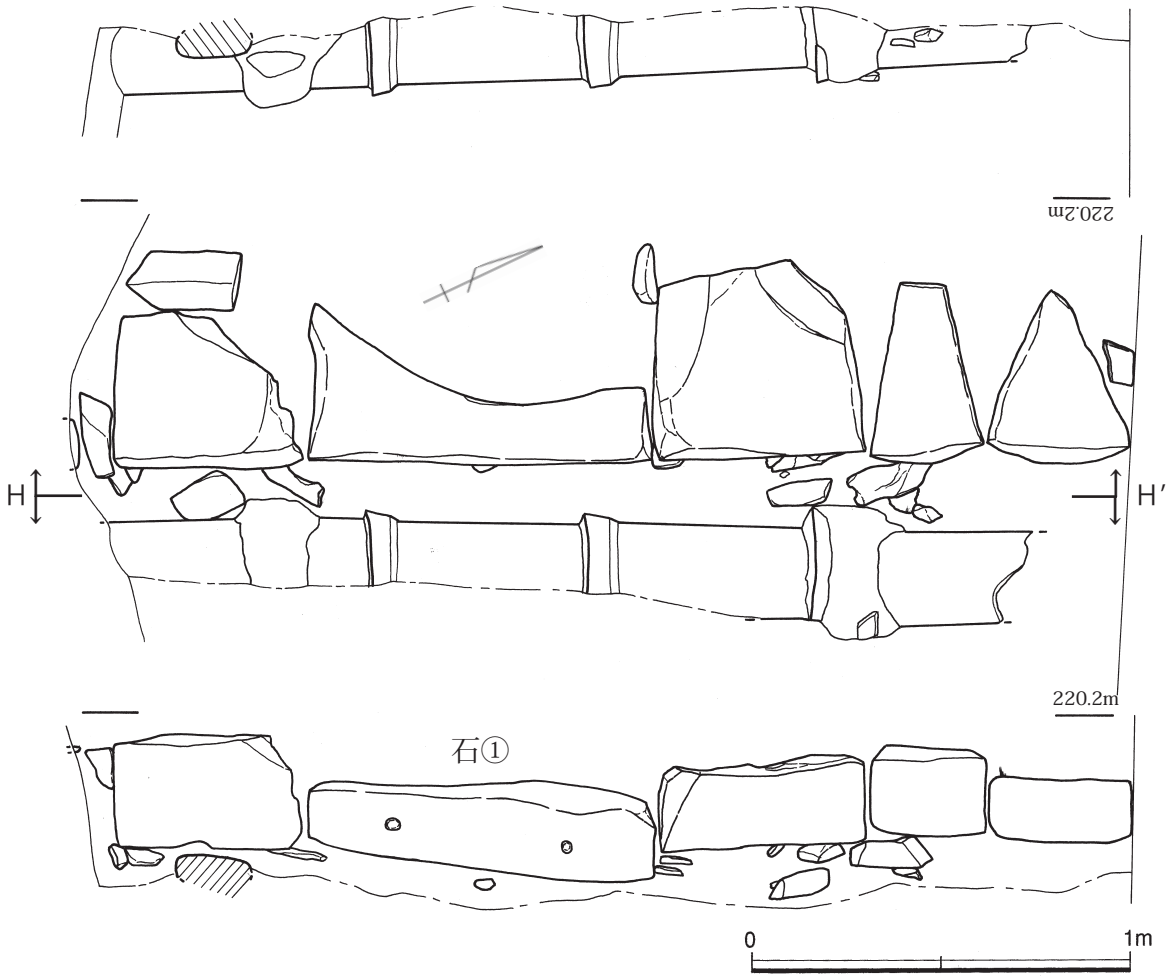
Ａ区東半で検出した。調査区内で検出した規模は、３間分の長さ約２．９ｍである。柱間は約９７ｃｍとなり、３尺２寸かと推定される。柱



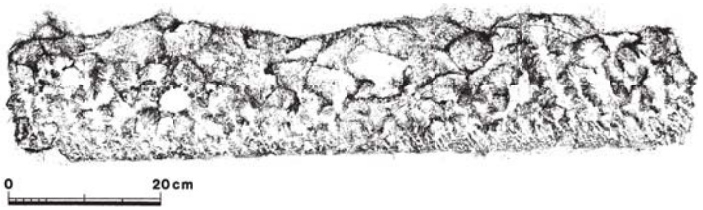
第12図　御米蔵跡南北横断面（1/20）



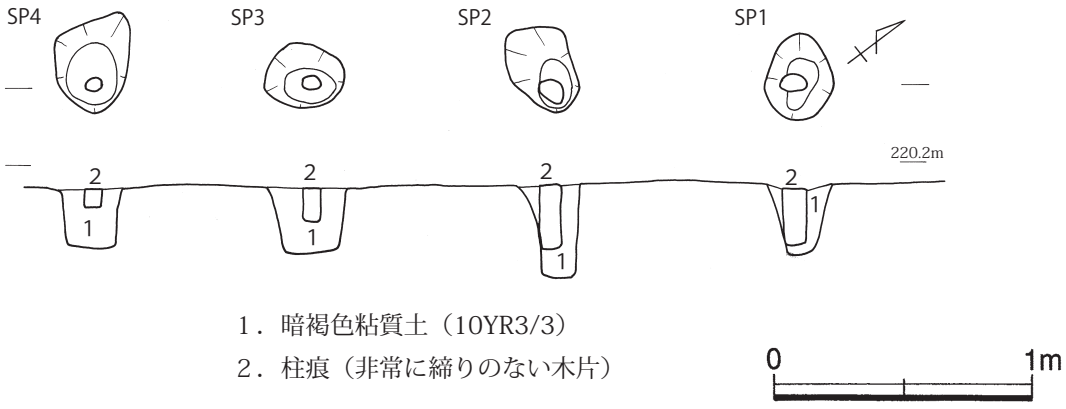
第 13 図　御米蔵跡東西縦断面（1/20）



第 14 図　A区ＳＶ１(石列)・ＳＤ７(土管) 実測図（1/20）

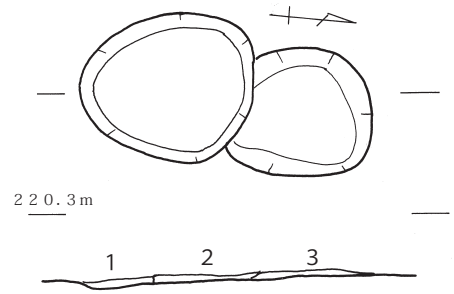


第 15 図　A区ＳＶ１(石列) 石①拓本（1/10）



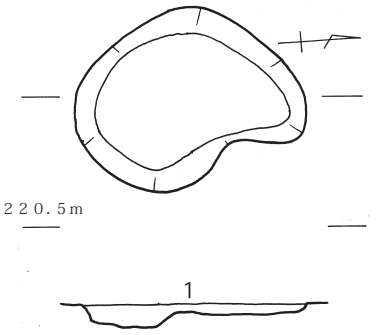
１．暗褐色粘質土（10YR3/3）
２．柱痕（非常に締りのない木片）

第 16 図　A区ＳＡ１（1/30）



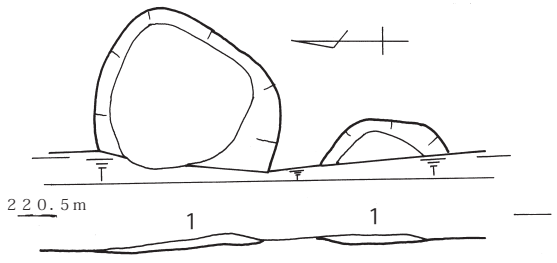
ＳＸ１

1．褐色砂質土（10YR4/4）
2．にぶい黄色砂質土（2.5Y6/4）【タタキ】
　炭が混じる。
3．赤褐色土（2.5YR4/6）【焼土】



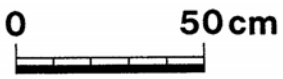
ＳＸ２

1．暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　焼土・炭が混じる。



ＳＸ３・４

1．暗褐色土（10YR3/3）【焼土】



第 17 図　Ａ区ＳＸ断面図（1/20）

穴内では径約６～１０ｃｍの柱痕が確認され、腐食がかなり進み土化する前のグスグスの木材片が残っていた。

このＳＡ１南端付近で漆喰などの堆積を確認した。また、ＳＡ１南半からＳＸ１にかけて貼土（タタキ？）を検出した。貼土上には薄い漆喰が互層状に堆積している部分があることを、Ａ区南壁で確認した。

ＳＸ１

Ａ区東半で検出した。埋土は３層からなり、厚さは約２ｃｍである。第１層は褐色砂質土、第２層は炭が混じるにぶい黄色砂質土、第３層は赤褐色をした焼土である。

ＳＸ２

Ａ区東半で検出した。埋土の厚さは約２～６ｃｍで、焼土・炭の混じる暗灰黄色粘質土の単一層である。

ＳＸ３

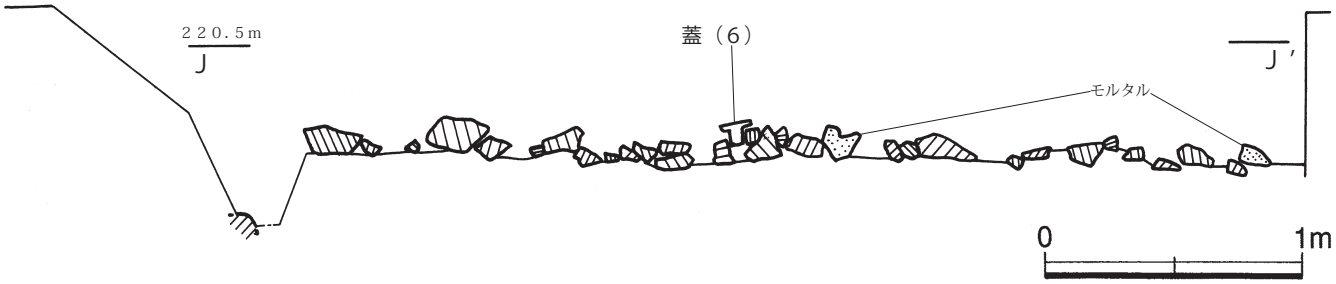
Ａ区東半で検出した。埋土の厚さは約２～３ｃｍで、暗褐色をした弱い焼土のみである。

ＳＸ４

Ａ区東半で検出した。埋土の厚さは約３ｃｍで、暗褐色をした弱い焼土のみである。

（ＳＸ５）　ＳＤ３中の焼土混じり土となったため、欠番。

（ＳＸ６～24）　Ａ区西半発掘時に炭等を含む土を検出したが、わずかの厚みで遺構ではないと判



第18図　A区　ＳＤ１縦断面（1/30）

断したため、欠番。

ＳＤ１

A区東半で検出した。調査区内で検出した規模は、長さ約４．３m以上、幅約１．１～１．４mである。溝はさらに調査区外の北東および南西方向に続いている。ＳＤ１の西辺にはＳＤ２・３が接しているが､検出時に切り合いは確認できず､同一時期と推定される。ＳＤ１の主軸はＳＤ２・３と直交し、北東側にあるＳＡ１（柱穴列）と平行する。溝中には約５～２５ｃmの石が多く含まれていたが、特に規則的な並び等は確認できなかった。南壁土層を見ると、この溝から西側の遺構面が１段高くなっており（３１層上面)、段に埋め込まれた集石列の溝であったと言える。石に混じって、コンクリート塊片・石州赤瓦・陶磁器・硫酸瓶の蓋などが出土している。

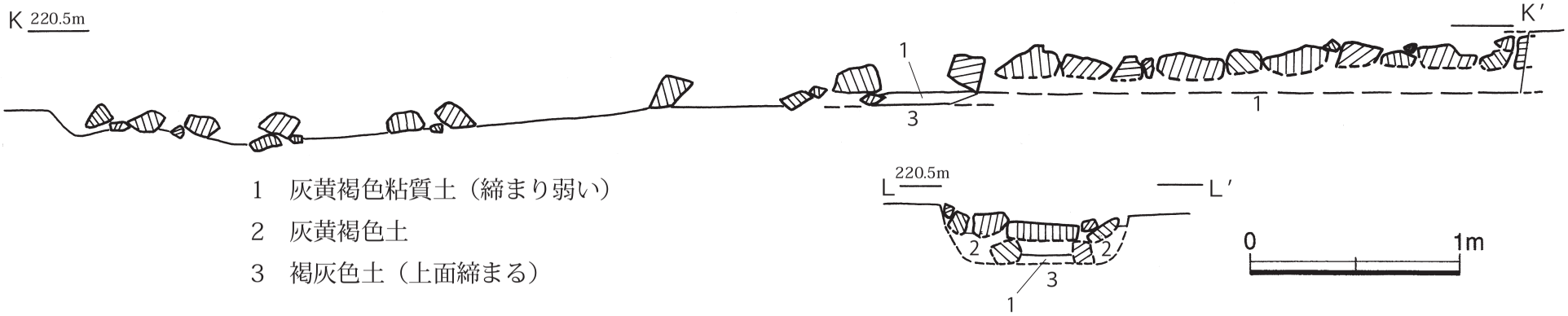
ＳＤ２

A区東半で検出した。遺構面を掘り下げて検出した掘方の規模は、長さ約６．３m以上、幅約０．５～１．２５mである。南東側で接しているＳＤ１まで含めると、長さ７．５m以上となる。溝はさらに北西側に続いており、本来は遺構面の下に暗渠として存在していたと考えられる。ＳＤ２の主軸はＳＤ１および柱穴列と直交し、ＳＤ３とは平行する。

検出した溝の北西半には暗渠が残っており、内部は幅約２５ｃm、高さ約６ｃmの空間があった。暗渠内には、厚さ約４ｃmのしまりの悪い堆積土（１層）があり、その下には固く締まった土があるため、本来の暗渠は高さ約１０ｃmであったと推定される。暗渠底は固く締まった土があり、底石は存在していないと推定される。なお、念のため暗渠底にピンポールを差し込んだところ、さらに１１～１４ｃm下でピンポールが止まる面があるため、石の多い面が暗渠下に存在している可能性がある。暗渠に用いられた蓋石の規模は、幅約３５～５０ｃm、奥行約１５～３５ｃm、厚さ約１０ｃmである。側石については、観察可能な部分のうち比較的残存状況が良好な部分を参考にすると、扁平な石材と小型の塊状石材が用いられていた。扁平な石材は、長さ約３０～５０ｃm、幅約１５ｃm、高さ約１０ｃm程度であり、暗渠主軸に平行して用いられている。小型の塊状石材は、約１５～３０ｃm程度の大きさであり、面を暗渠内部に向ける以外は特に規則性はないと思われる。暗渠の背後には、約５～２０ｃm程度の裏込石があった。

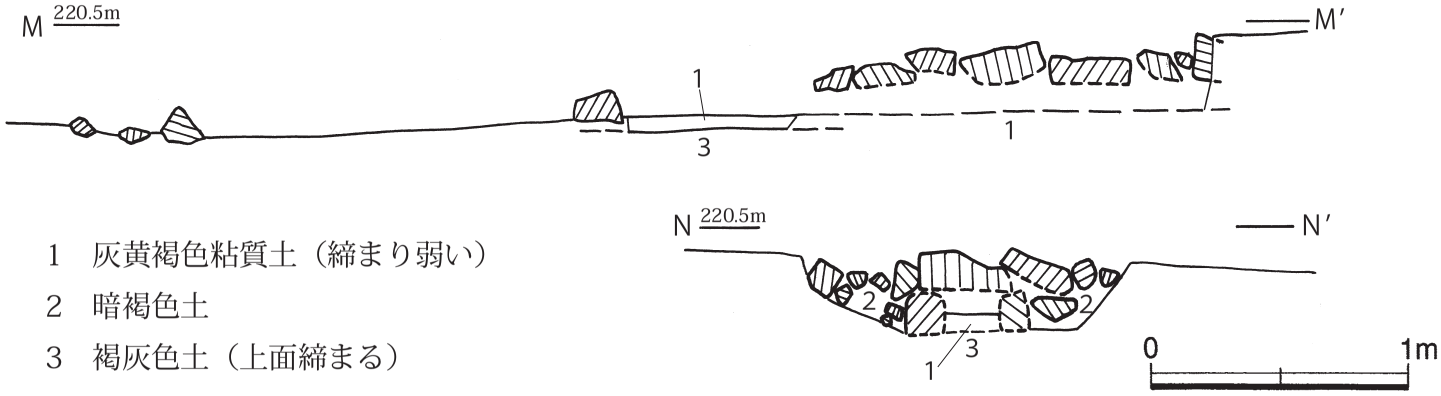
ＳＤ３

A区東半で検出した。遺構面を掘り下げて検出した掘方の規模は、長さ約３．５m以上、幅約０．７～１．０mである。南東側で接しているＳＤ１まで含めると、長さ４．８m以上となる。溝はさらに北西側に続いており、本来は遺構面の下に暗渠として存在していたと考えられる。ＳＤ３の主軸はＳＤ１および柱穴列と直交し、ＳＤ２とは平行する。



1　灰黄褐色粘質土（締まり弱い）
2　灰黄褐色土
3　褐灰色土（上面締まる）

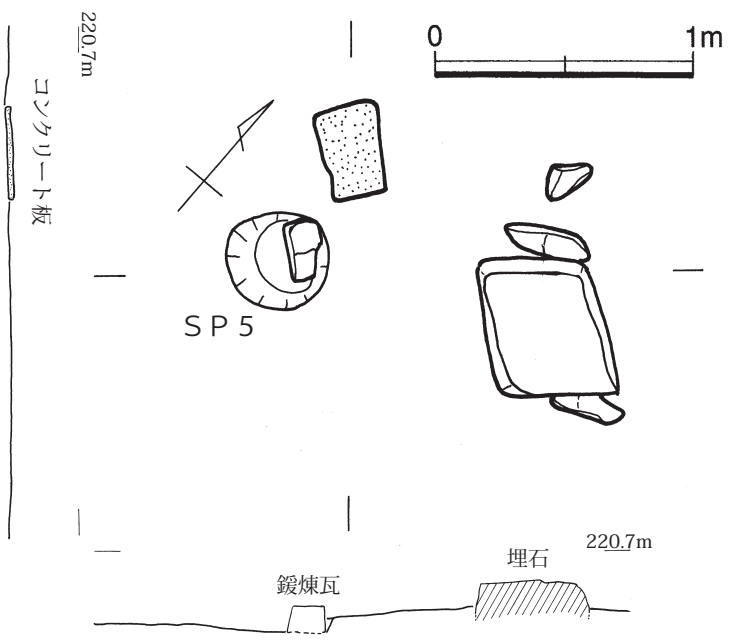
第19図　A区　ＳＤ２断面（1/30）



1　灰黄褐色粘質土（締まり弱い）
2　暗褐色土
3　褐灰色土（上面締まる）

第20図　A区　ＳＤ３断面（1/30）

検出した溝の北西半には暗渠が残っており、内部は幅約２２ｃｍ、高さ約１０ｃｍの空間があった。暗渠内には、厚さ約６ｃｍのしまりの悪い堆積土（１層）があり、その下には固く締まった土があるため、本来の暗渠は高さ約１６ｃｍであったと推定される。暗渠底は固く締まった土があり、底石は存在していないと推定される。なお、念のため暗渠底にピンポールを差し込んだところ、さらに１２～２２ｃｍ下でピンポールが止まる面があるため、石の多い面が暗渠下に存在している可能性がある。暗渠に用いられた蓋石の規模は、幅約３５～５５ｃｍ、奥行約１５～３５ｃｍ、厚さ約8～１５ｃｍである。側石については、観察可能な部分のうち比較的残存状況が良好な部分を参考にすると、扁平な石材を主として、一部に小型の塊状石材が用いられていた。扁平な石材は、長さ約２５～５０ｃｍ、幅約１０～１５ｃｍ、高さ約１６ｃｍ程度であり、暗渠主軸に平行して用いられている。小型の塊状石材は、約１５～２５ｃｍ程度の大きさである。やや移動しているものの、面を暗渠内部に向ける傾向が見られる。暗渠の背後には、約５～３０ｃｍ程度の裏込石があった。



第 21 図　A区西半遺構断面図（1/30）

埋石

A区西半で検出した。平面形はやや歪んだ四角形で、上面が平らに据えられている。規模は約４５×５５ｃｍで、遺構面から約９ｃｍのところが石上面となる。この埋石から南西に約６０cm離れた場所にＳＰ５が存在している。

ＳＰ５

A区西半で検出した。規模は約４０×５０ｃｍ、深さは約６ｃｍ、平面形は不整円形である。土坑内部には長軸約２５ｃｍ、短軸約１５ｃｍの鍛煉瓦（からみれんが）が検出された。鍛煉瓦（からみれんが）は、遺構面から約５ｃｍ上面に出た状況で検出された。この土坑から北東に約６０ｃｍ離れた場所に埋石が存在している。なお、土坑から１０ｃｍ北に離れた遺構面上からコンクリート板片が出土している。コンクリート板片は、長軸約３７ｃｍ、短軸約２５ｃｍ、厚さ約２ｃｍで、鉄筋が入ったものである。

ＳＰ６

A区西半で検出した。規模は約６０×４０ｃｍ、深さは約 10 ｃｍ、平面形は不整円形である。

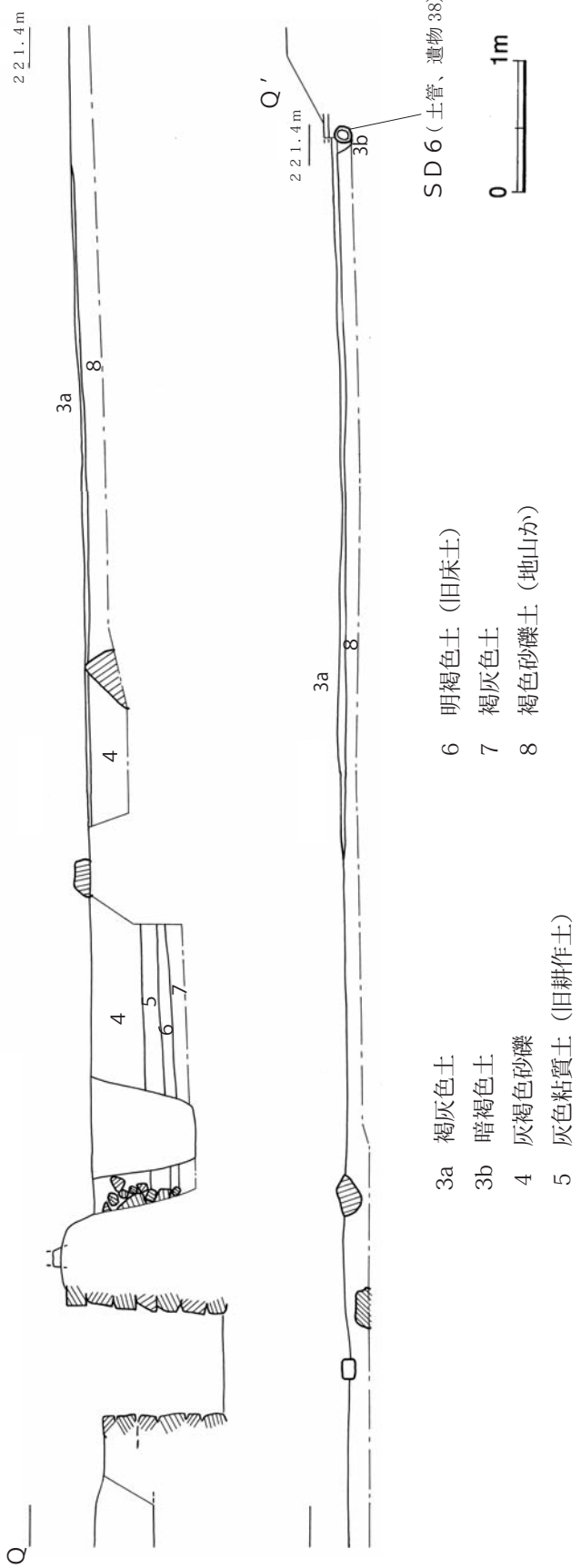
第２節　Ｂ区（名勝指定地外）の調査

Ｂ区南隅で検出された池庭は一部の石が欠落しているが、自然石を瓢箪形に配置し、コンクリートで仕上げられたものである。この池庭には導水路として合わせ口にした燻瓦が用いられており、刻印から京都産のものであることが判明した。

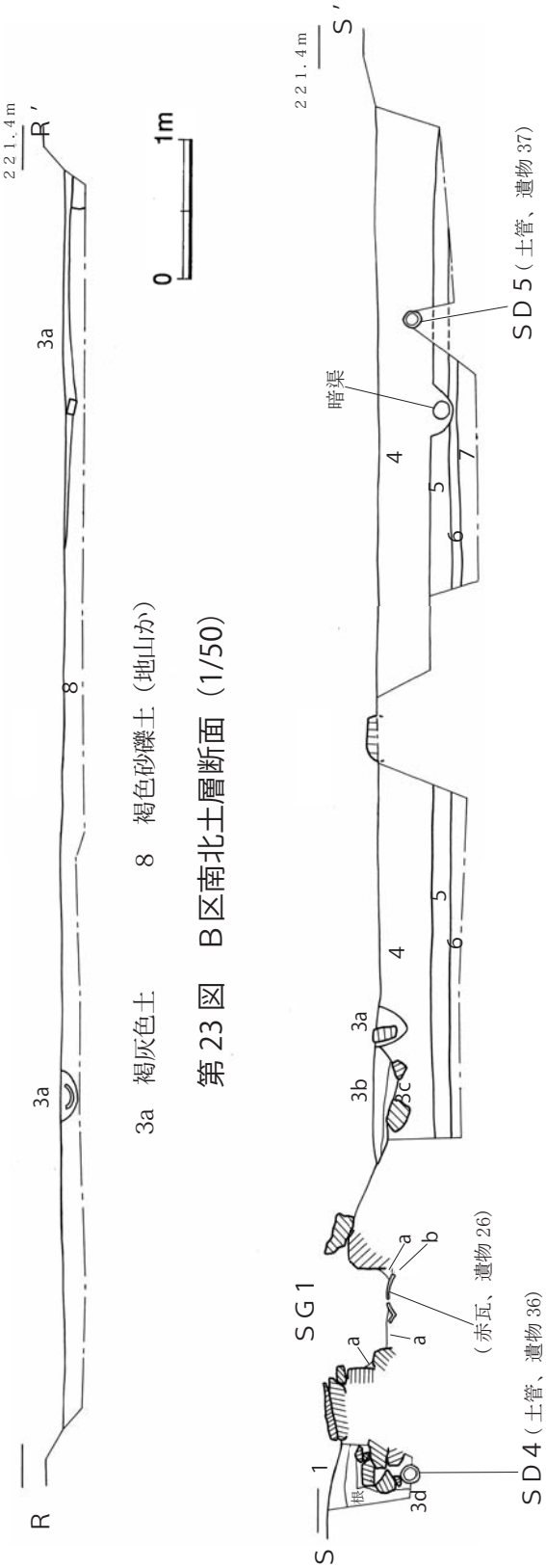
Ａ・Ｂ区境の石組水路の北西側については、道路工事によって掘削される部分、およびＡ・Ｂ区境の石組水路の代わりに新設予定の水路部分を発掘した。その結果、石組水路の背後には裏込土があり、下層には耕作土状の堆積層が確認され、かつては水田であった可能性が考えられる。なお、石組水路の石積面からは、排水用に用いられたと考えられる土管２列が検出され、排水口は石垣中位で確認できる。この土管は池庭に導水路に用いられた瓦とは明らかに異なっている。

指定地外の調査範囲では、一部において礎石状の石が確認されたが、大部分は欠落している状態であった。この礎石周辺でおこなったトレンチ調査では、地表下約 10㎝で基盤層となり、明瞭な遺構は確認できなかった。

発掘後に、ＳＧ１（ＳＤ４は含まず）の移設復元工事をおこなった。土地所有者である大谷一生氏のご協力によって、南側隣接地の敷地残地に石組を並行移動した。他所に集積された石の中から、苔の残る庭石を選別し、立石の痕跡と合わせながら復元工事をおこなったが、補足石材の位置、石については明確な根拠があるわけではない。底面はモルタル仕上げにせず、ＳＤ４新のあった場所に暗渠パイプを埋めた上で真砂土・玉砂利を敷いた。背後にあったモッコク等の庭木についても移植した。



第 22 図　Ｂ区東西土層断面（1/50）



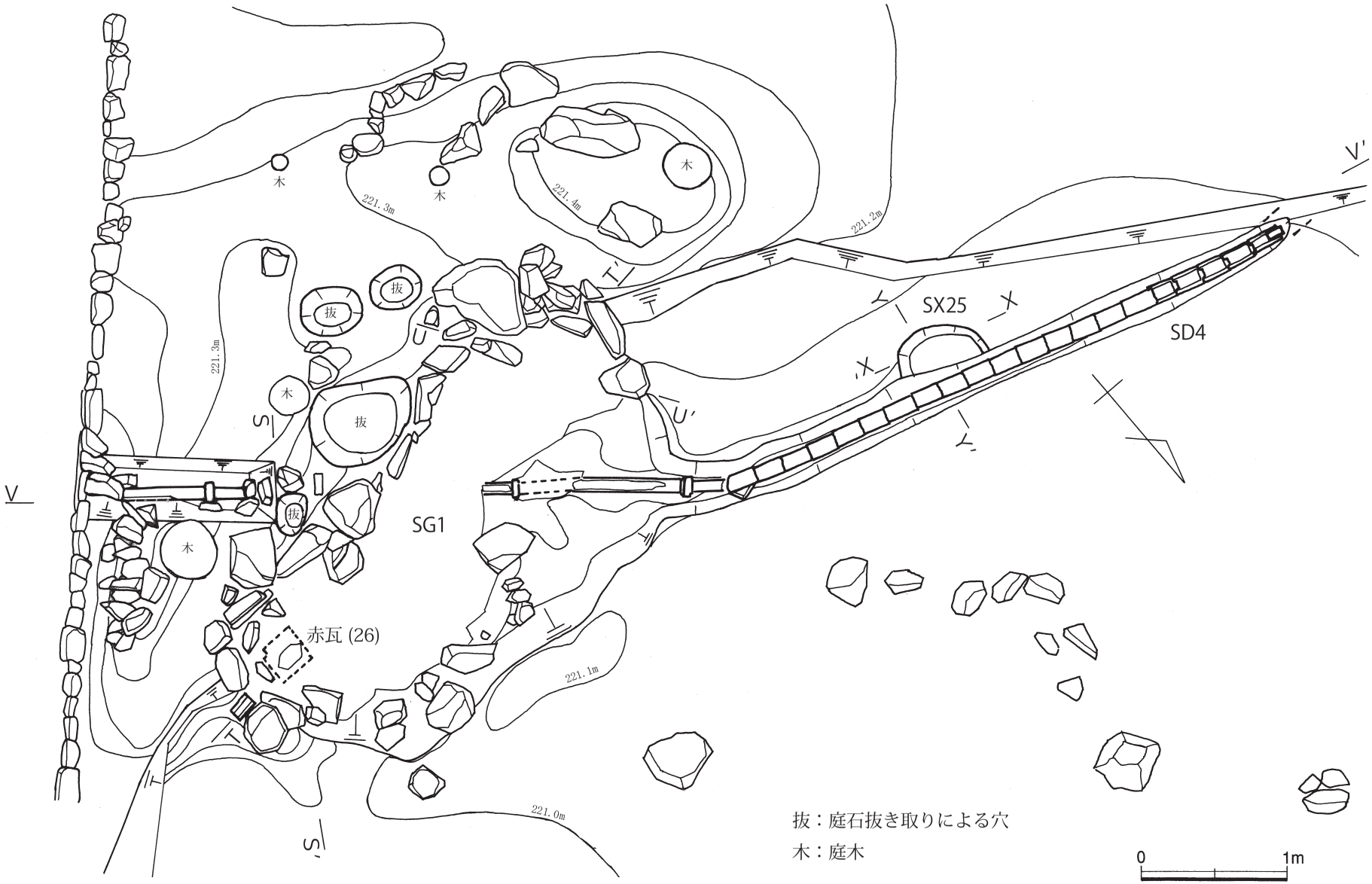
第 23 図　B 区南北土層断面（1/50）

1　表土
3a　褐灰色土
3b　焼土混じり土
3c　焼土
3d　褐灰色土
4　灰褐色砂礫土
5　灰色粘質土（旧耕作土）
6　明褐色土（旧床土）
7　灰褐色土
a　上層モルタル
b　下層モルタル

第 24 図　B 区南北土層断面（1/50）

基本層序

第１・２層は本発掘調査前に除去した表土・盛土層である。第３層は遺構埋土である。第４層は遺構面下の基盤土である。第５層は旧耕作土、第６層は旧床土であり、本発掘調査の対象とした遺構面以前の時期には水田が存在していたと推定される。第７層は旧床土下にある土層である。第８層は地山の可能性のある土層である。遺構埋土である第３層については、土層の特徴から細分をおこない、アルファベットの小文字を付した。



第25図　B区　ＳＧ１・ＳＤ４（1/40）

ＳＧ１（池庭遺構）

北辺側の石は、本発掘調査時には既に抜き取られた状態であったが、池の平面形は瓢箪形かと推定される。池の内寸は、長軸約３．５ｍ　短軸は広いところで約１．０ｍ、狭いところで約０．７ｍである。推定される遺構面からの深さは約２４ｃｍである。池の石組はモルタルで固定され、池底もモルタルが全面に打たれていた。モルタルは上層と下層に分かれ、上層は厚さ約１ｃｍ、下層は厚さ約３～５ｃｍである。上層には石が含まれないが、下層には玉砂利が含まれるという違いがある。

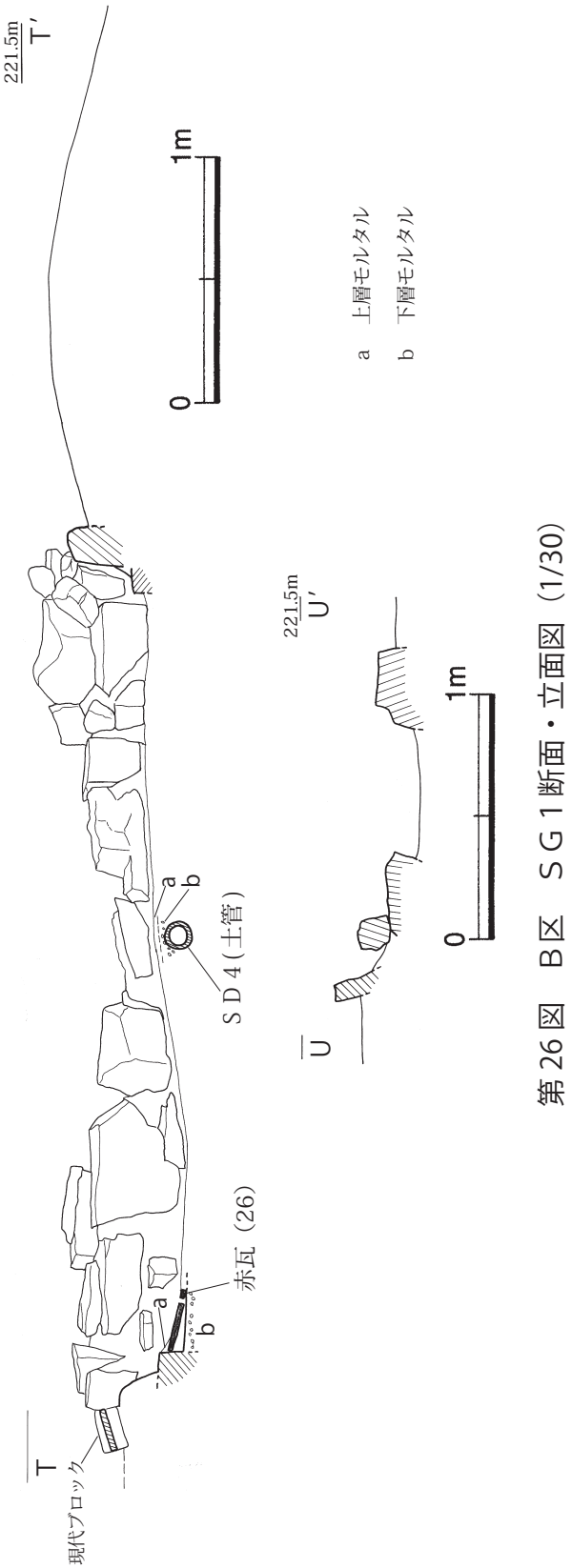
池の主軸はおよそ東西方向であり、西端には滝を表現したと思われる石組が残る。東端の石組上面には、オーバーフローした水が流れるかのごとくに、半分に折られたブロックが現状では置かれていた。池底面の東端には、石州赤瓦の桟瓦が伏せ置かれており、池底に打たれたモルタルで瓦の周囲が固定されていた。この瓦の一部には穴が開いていたが、これは後世の穴である可能性がある。

池の周囲は塊状の自然石を主に配置し、一部には扁平な自然石をあぶっていた。また、池内部の石組に接して、上面が平らな石が置かれており、岬状の表現が見られる。

使用された石材には遺跡周囲に分布している泥質岩、または津和野地域に分布している流紋岩質凝灰岩が利用されている。後者は現在もこの地域の庭石として利用されている石である。

ＳＤ４

ＳＧ１に関連した水路遺構である。ＳＤ４は改修により２時期の遺構で構成されていると推定される。古段階では池への導水路として機能していたＳＤ４は、新段階になると池には導水せず、池の下



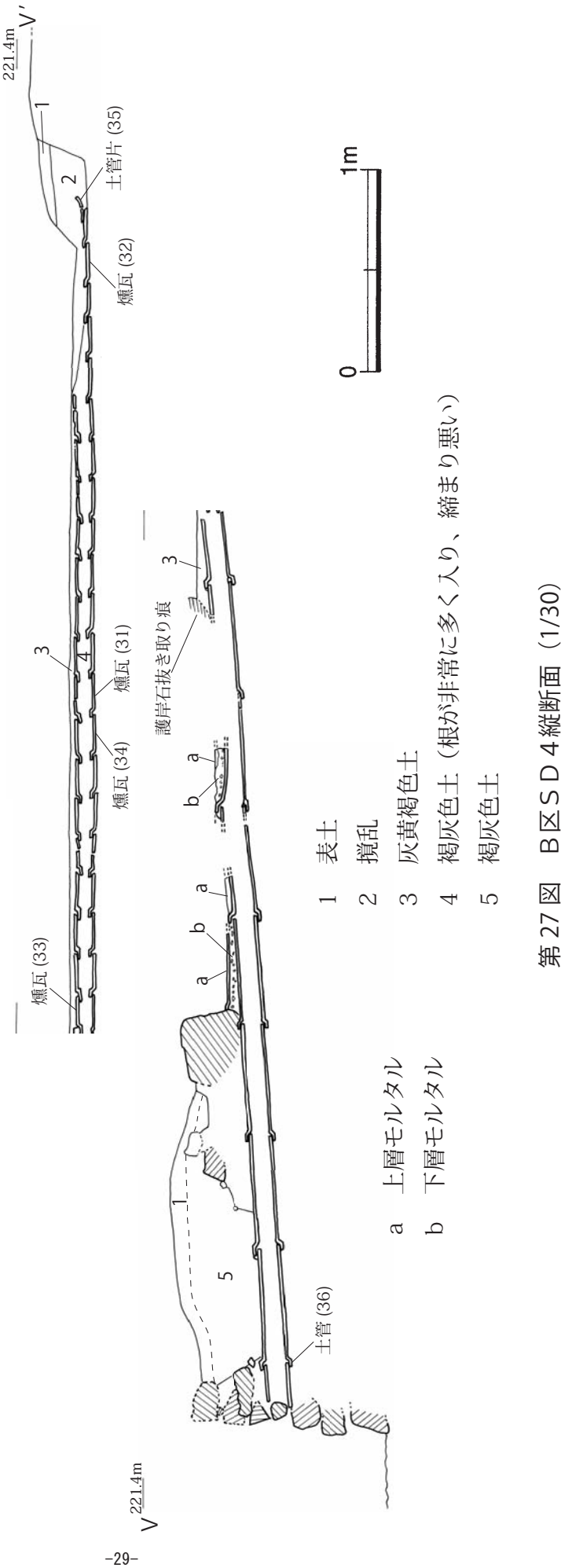
第26図　Ｂ区　ＳＧ１断面・立面図（1/30）

を通り抜けて石組水路に排水されるようになったと推定される。新段階の池への導水方法は、発掘調査では明らかにできなかったが、池内部がモルタルで仕上げられていることから空池ではなく、地下に遺構が残らない方法で導水がおこなわれていた可能性が考えられる。

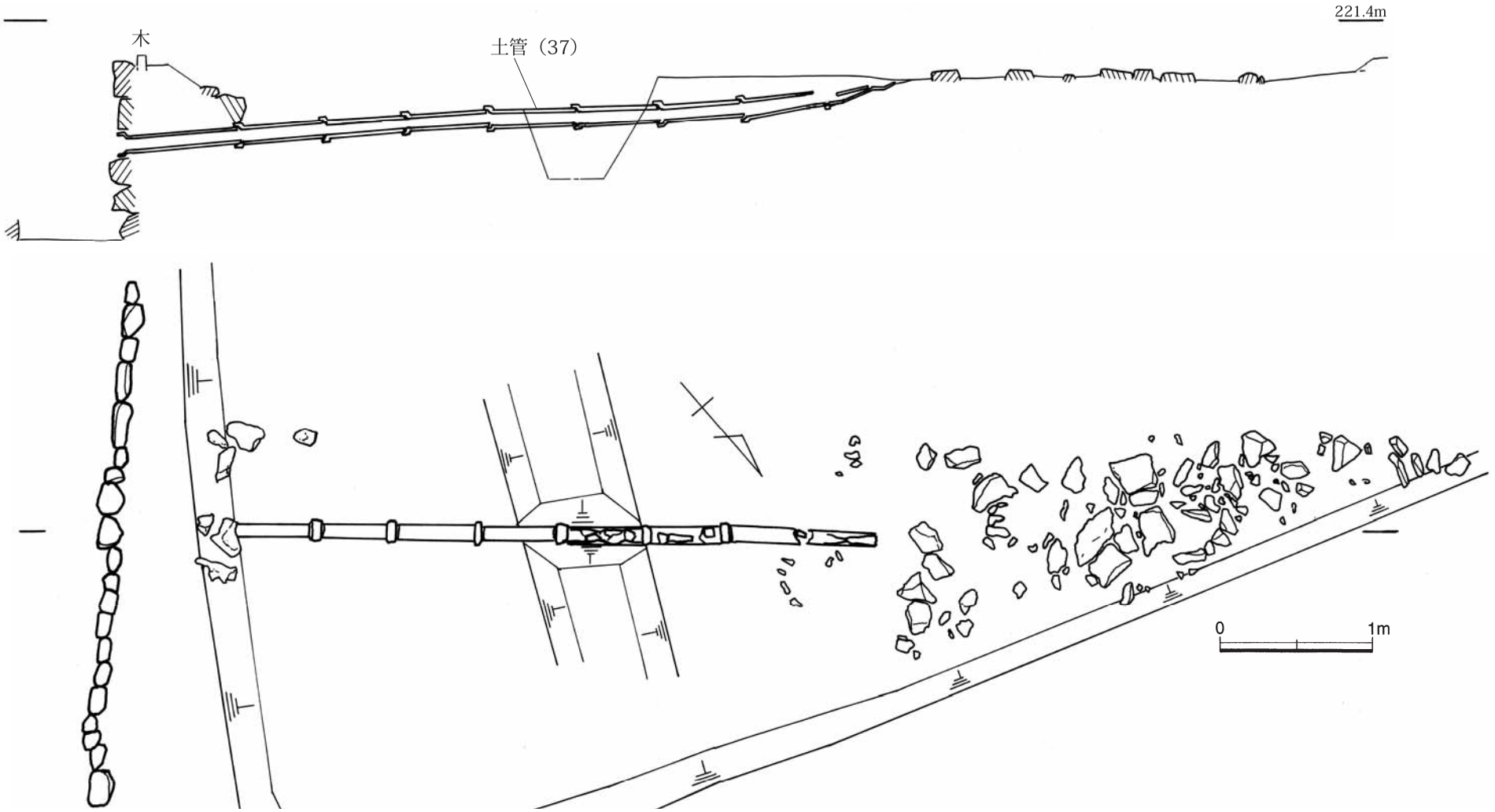
古段階

この時期と推定される遺構は、ＳＧ１の西側からＳＧ１に導水される水路部分に残る。発掘調査範囲では、長さ３．３ｍ、幅約２３ｃｍを検出した。さらに西側の調査区外に続いており、Ｂ区のある屋敷地南西辺の水路まで続いていると思われ、推定される長さは約１４ｍである。なお、この古段階のＳＤ４は南辺に接して検出されたＳＸ２５を切っていた。

古段階の遺構は素掘りの溝に、燻瓦の丸瓦を合わせ口にして埋めた状態で連続させることで、導水路としている。調査区南西辺付近となるＳＤ４西端付近の長さ約１．０ｍでは、遺構上部が削平を受けていたため、燻瓦の上半は失われ下半の５個体のみ残存していた。上部が削平を受けていない東側の約３．３ｍでは、燻瓦の上半・下半とも残り、上半１６個体、下半１６個体の計３２個体が検出された。これら発掘調査区内で検出したＳＤ４の燻瓦は合計３７個体である。これらの瓦を後述



第 27 図　Ｂ区ＳＤ４縦断面（1/30）



第28図　B区　ＳＤ５（1/40）

の総括での分類に当てはめると、３７個体のうち、Ｉａ2類が２個体、Ｉａ3類が推定されるものも含め３３個体、刻印分類不明・刻印有無不明が各１個体であった。Ｉａ類のみで構成され、そのうちＩａ3類が大半を占めていることが分かる。検出状況からはこれらの種類によって使用場所が特に選択されているようではないと思われる。

ＳＤ４の埋土は、灰黄褐色土の単一層であるが、合わせ口にした燻瓦の内部にも土が流入していた。この埋土は根が非常に多く入り、しまり悪い褐灰色土となっていた。

新段階

この時期と推定される遺構は、上記の古段階のＳＤ４の東端からＳＧ１の下を通り、石組水路に達している。推定される長さは約４．５ｍである。土管はＳＧ１の下を通っているが、土管と池底の間は約１～５ｃｍ程度とわずかである。池底のモルタル上層・下層境がおよそ土管接合部の上面に相当するレベルに、土管は埋設されていた。

池の下を通過した土管は、池の背後の築山地表面から約４０～５０ｃｍ地下に埋設されている。その先は、南東側にある石組水路Ｂ面に排水口①として確認できる。

ＳＤ５

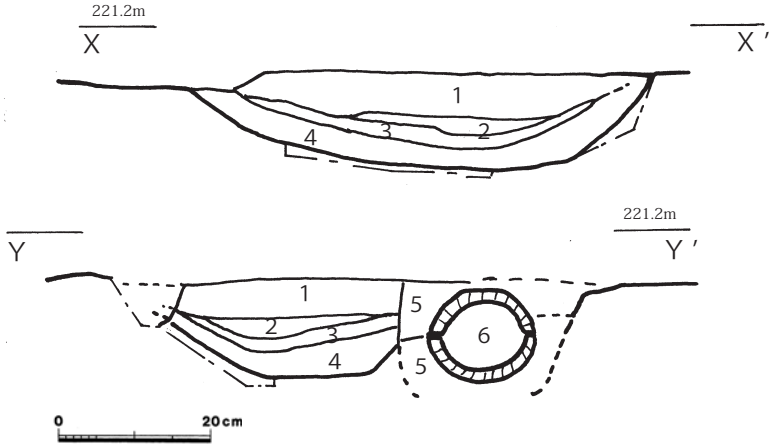
Ｂ区北東部で検出した土管である。敷石状遺構から始まるが、端部は欠損した状況で検出された。Ｂ区４層中で検出されており、Ｂ区敷地造成とともに埋設されたと考えられる。土管は計９本が用いられている。南東側の石組水路Ｂ面に排水口②が確認できる。

ＳＤ６

Ｂ区西辺で検出した土管である。敷地西辺を区画する土管と推定されるが、トレンチ部分のみでの検出であるため、長さ等の詳細は不明である。造成土に埋設されたＳＤ４・５の土管とは異なっており、別時期（後世か）に埋設された可能性が考えられる。

ＳＸ２５

ＳＤ４の南側で検出し、ＳＸ２５はＳＤ４に切られている。長軸 61cm、短軸 31cm、深さ 13cm の土坑である。埋土は４層に分層される。第２・４層は焼土層、第３層は炭層であり、第１層も暗赤褐色の色調から焼土に関連した層である可能性もある。遺構全体として焼土・炭を主体とした埋土であり、この土坑中で火が用いられたと考えられる。



SX25

１．暗赤褐色土（5YR3/2）

２．赤褐色土（2.5YR4/6）【焼土】

３．黒色土（N2/0）【炭】

４．暗赤褐色土（2.5YR3/3）【焼土】

SD4

５．灰黄褐色土（10YR4/2）

６．褐灰色土（10YR4/1）

根が非常に多く入り、しまり悪い。

第 29 図　Ｂ区　ＳＸ 25・ＳＤ４土層断面図（1/10）

第３節　Ａ・Ｂ区境の石組水路

県道端から山裾までの長さで約１８m、幅約０．４～０．８mであり、南西から北東に流れる。Ａ区側をＡ面、Ｂ区側をＢ面として以下記述する。

Ａ面

Ａ面は、県道側溝から山裾まで約１６mである。高さは県道側溝で約１．１m、山裾付近で約０．７mである。石積は上部約３分の１のところで目地が通り、新旧２時期に分かれる。なお、新段階の石積は駐車場整備のために積まれた、現代の石積である。

【新段階】

新段階の石積は北東側で高さ約０．４m、南西側で高さ約０．３mである。県道側溝から約６．１mの間は二段積みで割石を主体としている。さらに約６．９m南西までの間は一段積みで、川石を主体としている。このさらに南西側は古段階の溝を埋めて、新段階の石積面と同レベルとしている。

【古段階】

古段階の石積は北東側で高さ約０．７m、南西側で高さ約０．４mである。石積は落とし積みを多用し、元々の天端石は上面をそろえている。石材は遺跡周辺に点在している輝緑石あるいは泥質岩の割石を主体とし、１０～６０ｃm程度の石から構成される。

暗渠①（ＳＤ９）　県道側溝から約５．６～５．９mの石積下面に接して暗渠①が開いている。穴の規模は幅約３０ｃm、高さ約１５ｃmで、蓋石は幅約６０cmの扁平な石材を用いる。側石は石材を横長に配置し、暗渠②とは石材の用い方が異なる。底石があると思われるが大半が埋没しているため、その大きさは確認できなかった。

暗渠②（ＳＤ１０）　暗渠①から約３m南西側の石積下面に接して暗渠②が開いている。穴の規模は幅約２５ｃm、高さ約１５ｃmで、蓋石は長さ約５０ｃmの扁平気味な石材を用いる。側石は縦長に石材を配置し、暗渠①とは石材の用い方が異なる。底石は幅約３０ｃmの非常に扁平な石材を用いている。

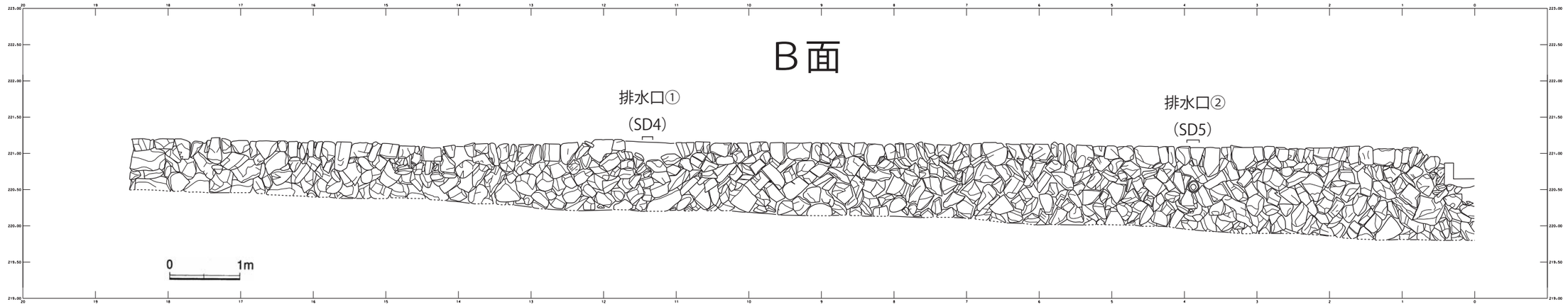
開渠①　暗渠②から約４．５m南西側に開渠①がある。開渠①は新段階の石積によって埋められている。規模は、幅約５０ｃm、高さ約４０ｃmであったと推定される。

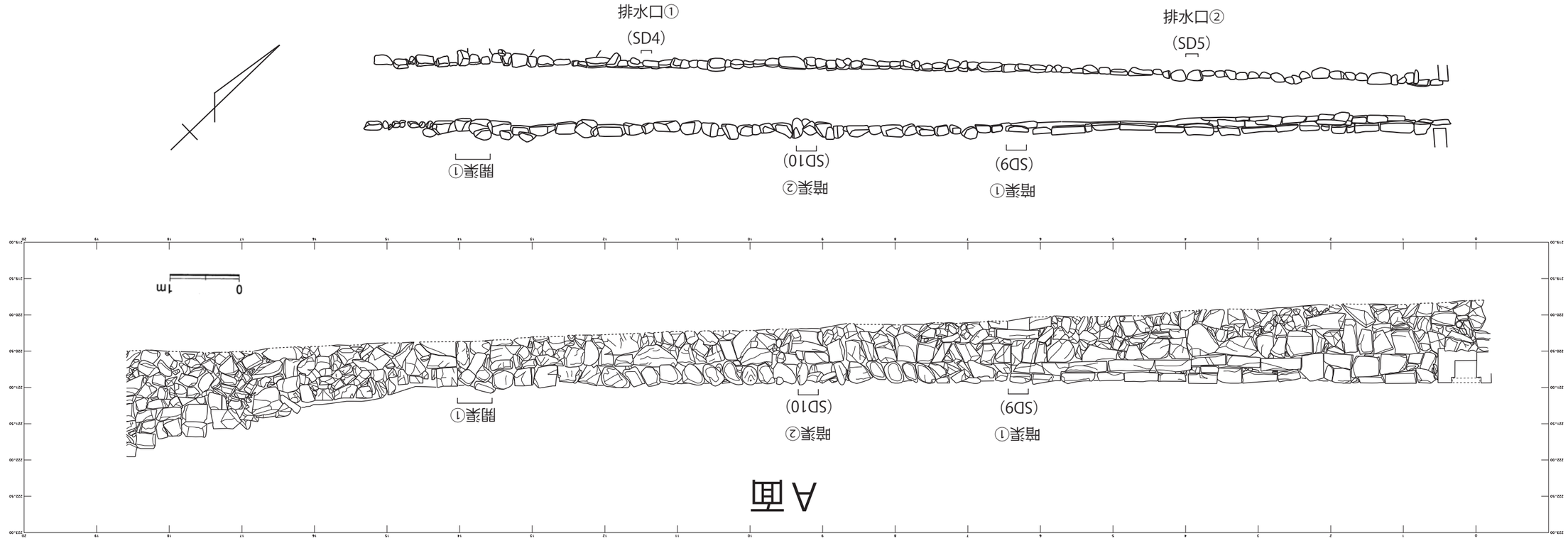
Ｂ面

Ｂ面は、県道側溝から敷地角まで約 18.1 mである。高さは県道側溝で約１．２５m、Ｂ区屋敷地角で約０．７mである。石積は落とし積みを多用し、天端石は上面をそろえている。石材は遺跡周辺に点在している輝緑石あるいは泥質岩の割石を主体とし、１０～５０ｃm程度の石から構成される。

排水口①（ＳＤ４）　敷地角から約 7.1 mの地点で発見された。Ｂ区のＳＤ４に伴う土管の排水口である。清掃調査をした段階では排水口の存在は明らかではなかった。ＳＧ１の下に埋設されていたＳＤ４を発掘した際に、その延長地点において約 10cm 程度の石が詰められているのを確認し、それを除去したところ排水口が現れた。石積上面から約４５ｃm下、石積下面から約５０ｃm上に開口する。土管の開口部は打ち欠かれて石積面までの長さが調整されている。この土管と土管列西端にある別の打ち欠かれた土管の長さがほぼ１本分であると推定されることから、これらは元々１本であった可能性も考えられる。

排水口②（ＳＤ５）　県道側溝から約３．５mの地点に土管の排水口②が見られる。これは、Ｂ区のＳＤ５に伴う排水口である。石積上面から約５５ｃm下、石積下面から約６０ｃm上に開口する。





第 30 図　石組水路実測図（1/60）

第４節　遺物

遺構内遺物

A 区米蔵基礎

１～３は米蔵跡基礎の石混じり土中（7f 層）出土の染付磁器である。1 は口縁部小片、２は碗体部、３は皿である。４は米蔵跡の北西隅撹乱土中から出土した煉瓦であるが、出土状況および大きさから考えて、本来は米蔵の床に敷かれた煉瓦であったと推定される。側面には使用時のモルタルが付着している。刻印はないが、裏面には焼成後の刻銘があり、縦書きで「白□□米」の文字が見える。

Ａ区ＳＤ１

５は須佐焼かと考えられる陶器皿の口縁部である。６は陶器の硫酸瓶の蓋で、約３周半回転するネジが切られている。上面には貫通しない２個１対の穴がある。鉄釉が平部上面および側面にかけられており、平部下面およびネジ部内外は基本的に無釉である。側面および裏面には半裁するラインに段差が確認でき、型押し成形をしたと推定される。「小野田皿山」の製品と推定される。７は石州赤瓦の軒平桟瓦である。

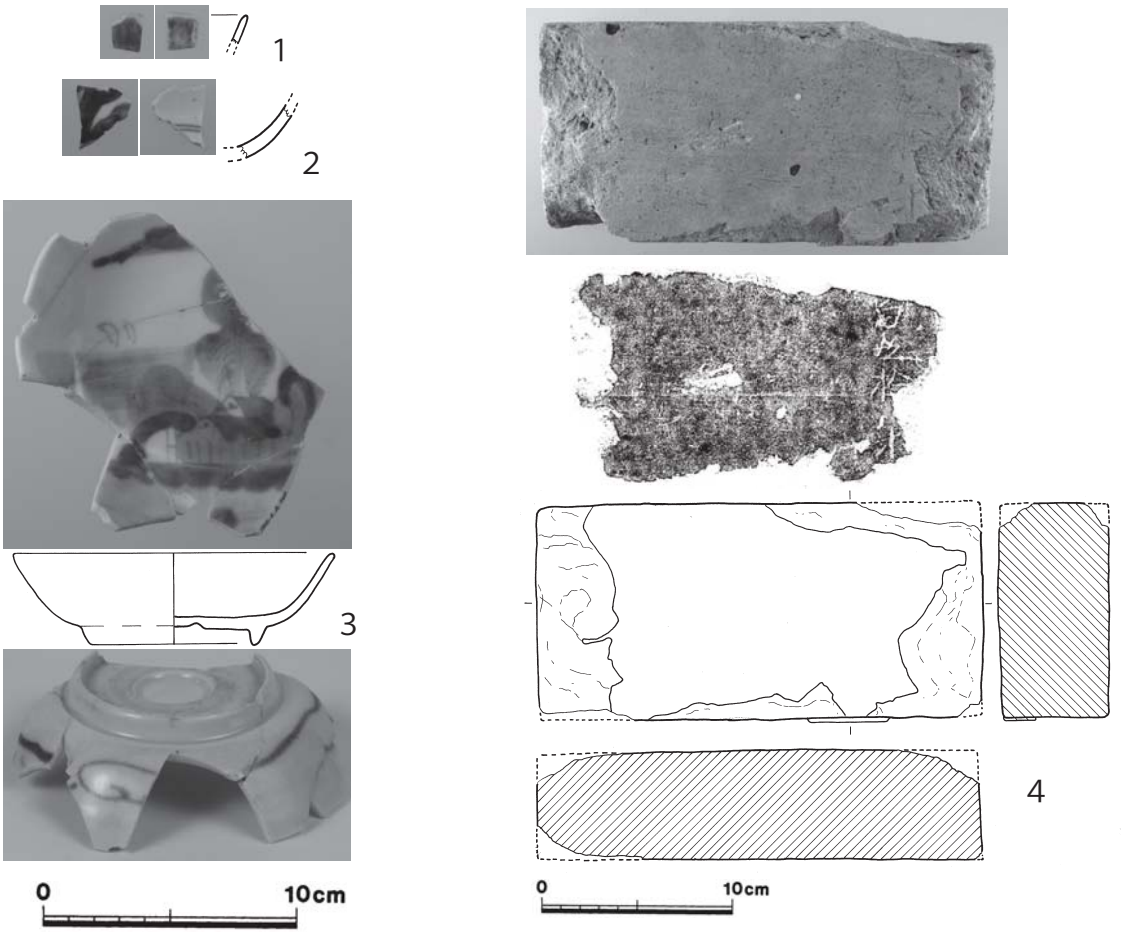
Ａ区ＳＤ２

８は、磁器の端反口縁部破片で、染付のない白磁部分である。

Ａ区ＳＤ３

９は、土師器皿口縁部である。焼成は良好で堅緻である。10 は磁器の瓶で燗徳利かとみられる。なお、これらは同一個体と考えられる破片であるが、接合しないため３つに分けて図化した。よって上下関係のみを示すものであり、器高は不明である。11 は陶器の鉢底部である。高台付近は露胎で、内面には目跡が２ヶ所以上残る。12 は、陶器の甕口縁部である。外面にはトビガンナが見られる。

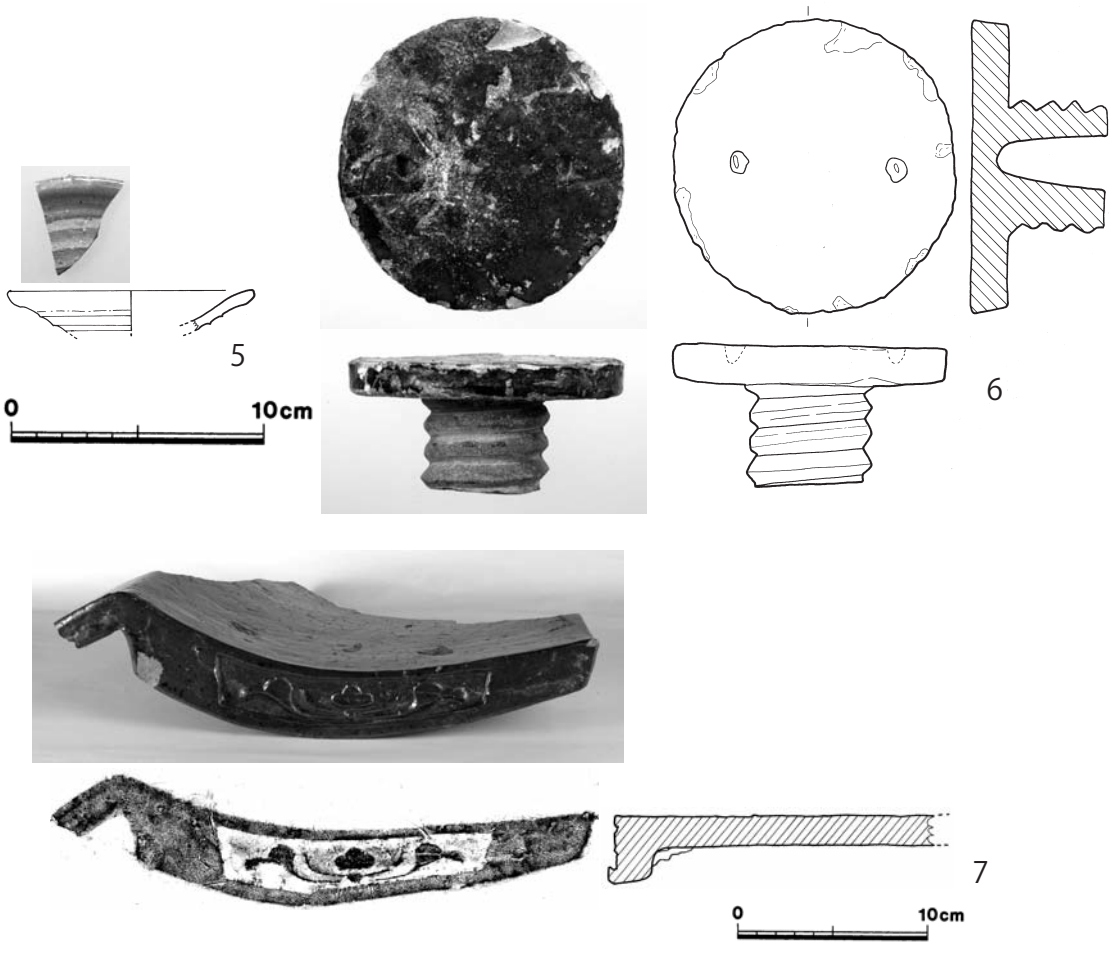
13 は焜炉かと推定される箱状の陶器である。欠損状況から内部は２重構造になると思われる。内面は



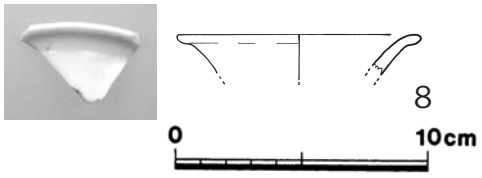
第 31 図　Ａ区米蔵跡出土遺物（１～３：1/3、４：1/4）

露胎であり、やや瓦質気味の土師質焼成である。外面および上面はサビ釉ののちに藁灰釉がかけられているが、藁灰釉の剥落は著しい。外面の一部に把手が付き、装飾性に富む。14 は上記の焜炉の装飾部の一部かと推定されるボタン状の破片である。ただし、いずれの面も無釉で、焼成は明らかな土師質であるという違いがあり、別個体である可能性もある。15 は焜炉で、土師質焼成で素焼きである。外面には印刻の一部が残る。扇形の線刻内に上段には横書きで右から「□業□［　］」、下段には「［　］」とあるが、印刻が弱く判読不能である。また、2 重の線刻内には縦書きで「吉［　］」の文字が見える。底部には指頭圧痕の残る短い脚部が付く。胎土は 1 mm以下の金雲母を少量含んでおり特徴的である。16・17 は、七厘のさなの一部であり、いずれも土師質の素焼きである。16 は厚手であり、大型の穴 1 ヶ所が残る。17 は薄手であり、小型の穴 2 ヶ所が残る。

18 ～ 20 は燻瓦のなまこ瓦である。上面の外周部の沈線は、18 は 5 条、19 は 4 ～ 5 条、20 は 3 条である。18 には上面から下面に向けて 1 ヶ所の目釘穴がある。



第 32 図　A区ＳＤ１出土遺物（5～6：1/3、7：1/4）



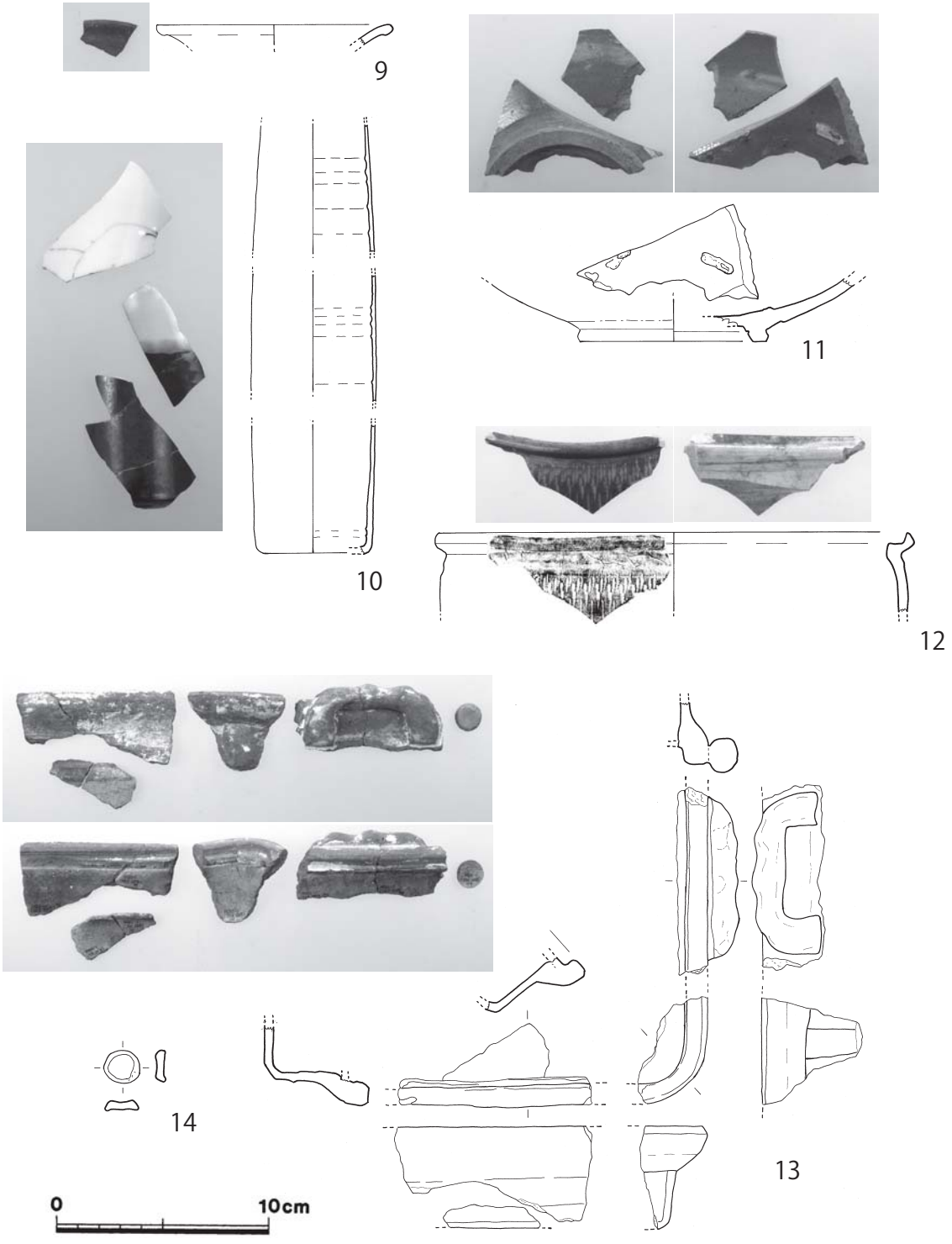
第 33 図　A区ＳＤ２出土遺物（8：1/3）

21 は砥石である。上面には顕著な擦痕が残る。右側面には砥石製作時の切断痕の可能性がある段と多条の筋が残る。左側面および下面には平行する波状の凹凸が見られる。

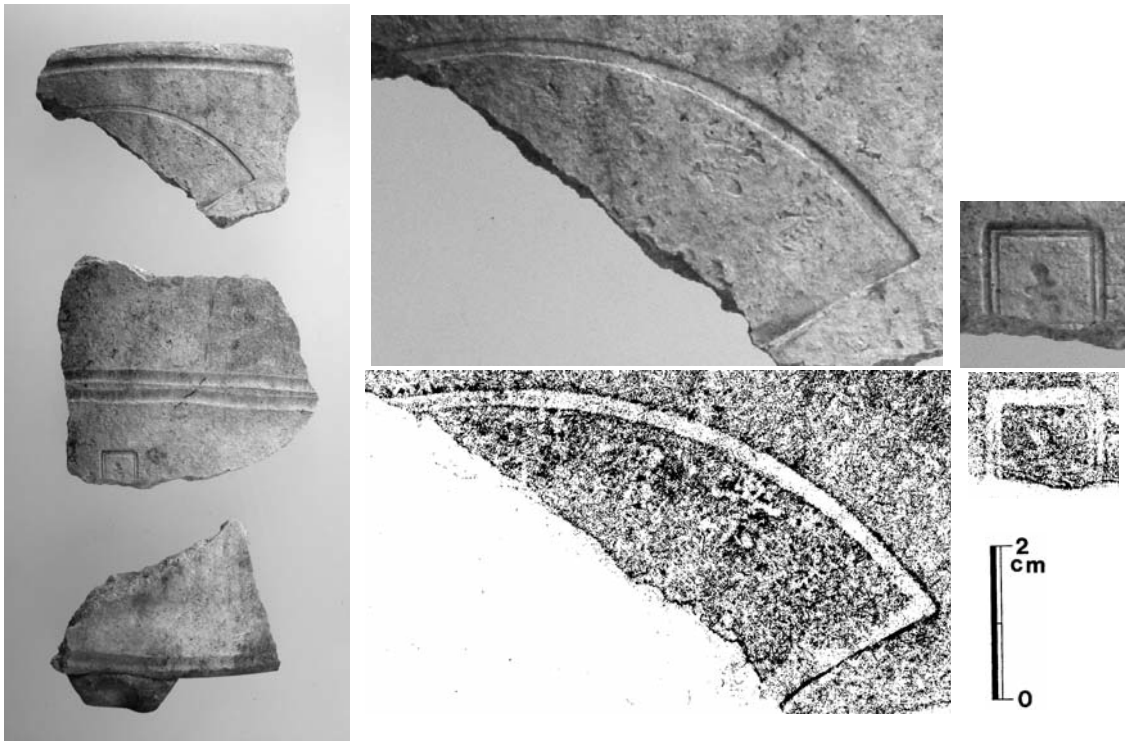
22 は銅製品でノミ状をした工具かと考えられる。23 は鉄製の錠である。振るとカラカラと音がすることから内部は空洞になっていると思われ、X線撮影によってその構造がうかがえる。

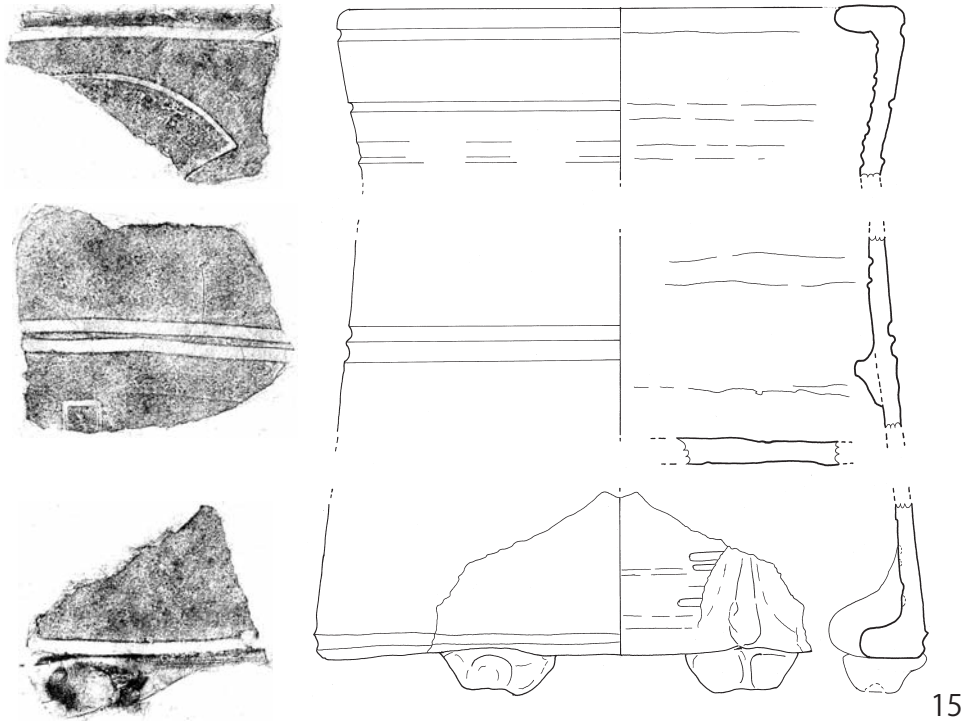
B区ＳＧ１

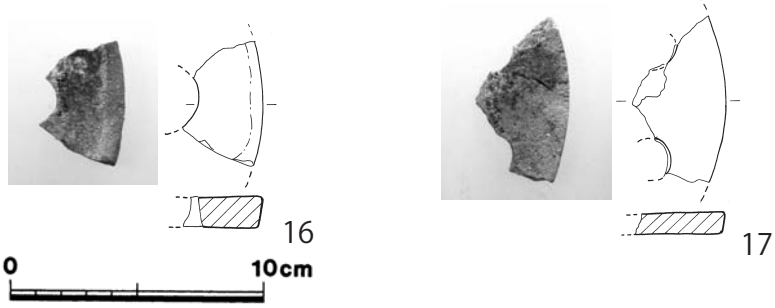
24 は銅製の口金である。25 は、燻瓦の丸瓦である。後述の B-SD4 埋設の瓦と比較して、長さ・幅ともに短い。裏面のクシ描き沈線は２帯あり、いずれも 16 条である。刻印は凸面に押されており、右から縦



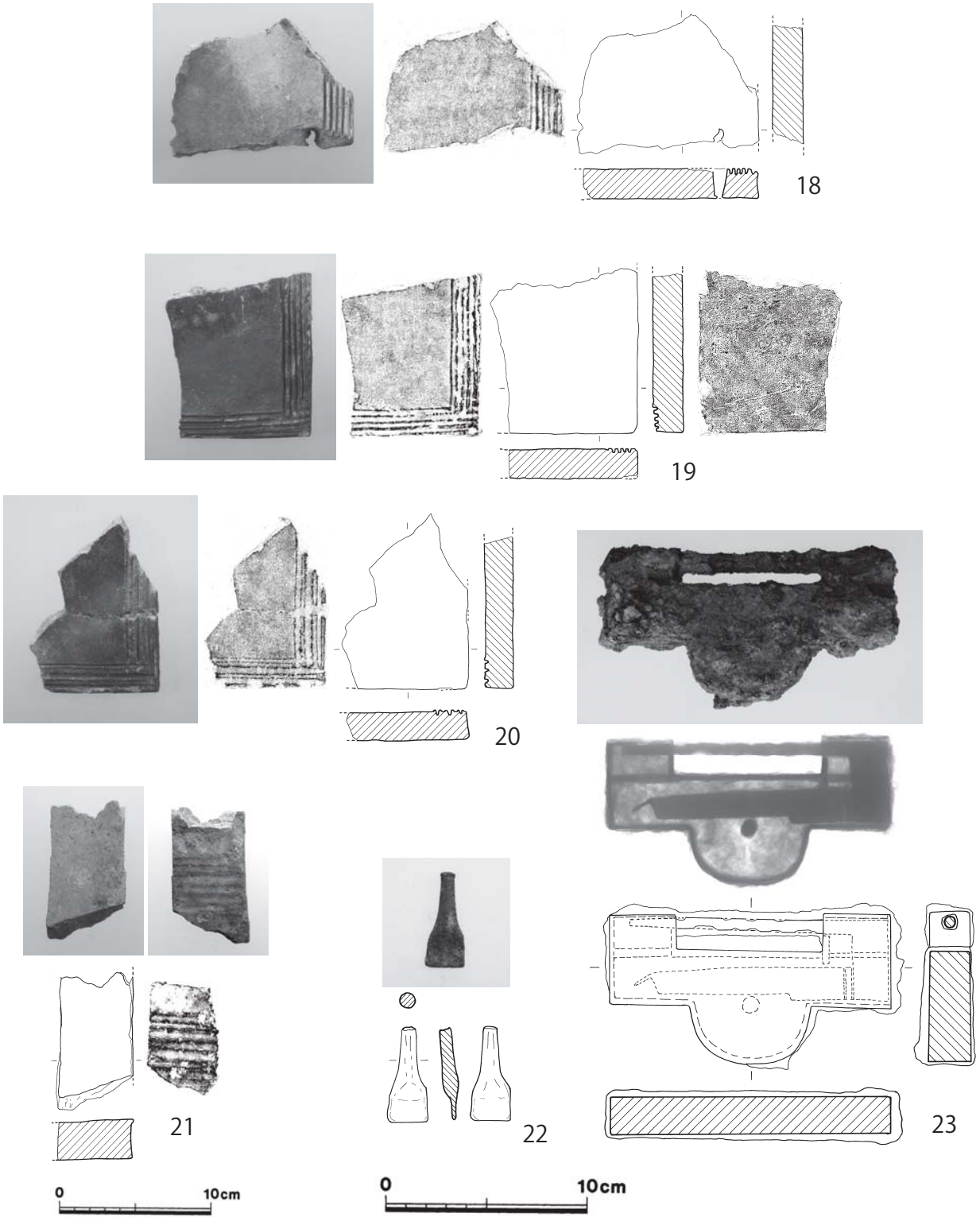
第 34 図　Ａ区ＳＤ３出土遺物①（９～ 14：1/3）







第 35 図　Ａ区ＳＤ３出土遺物②（15 ～ 17：1/3、刻印のみ 1/1）



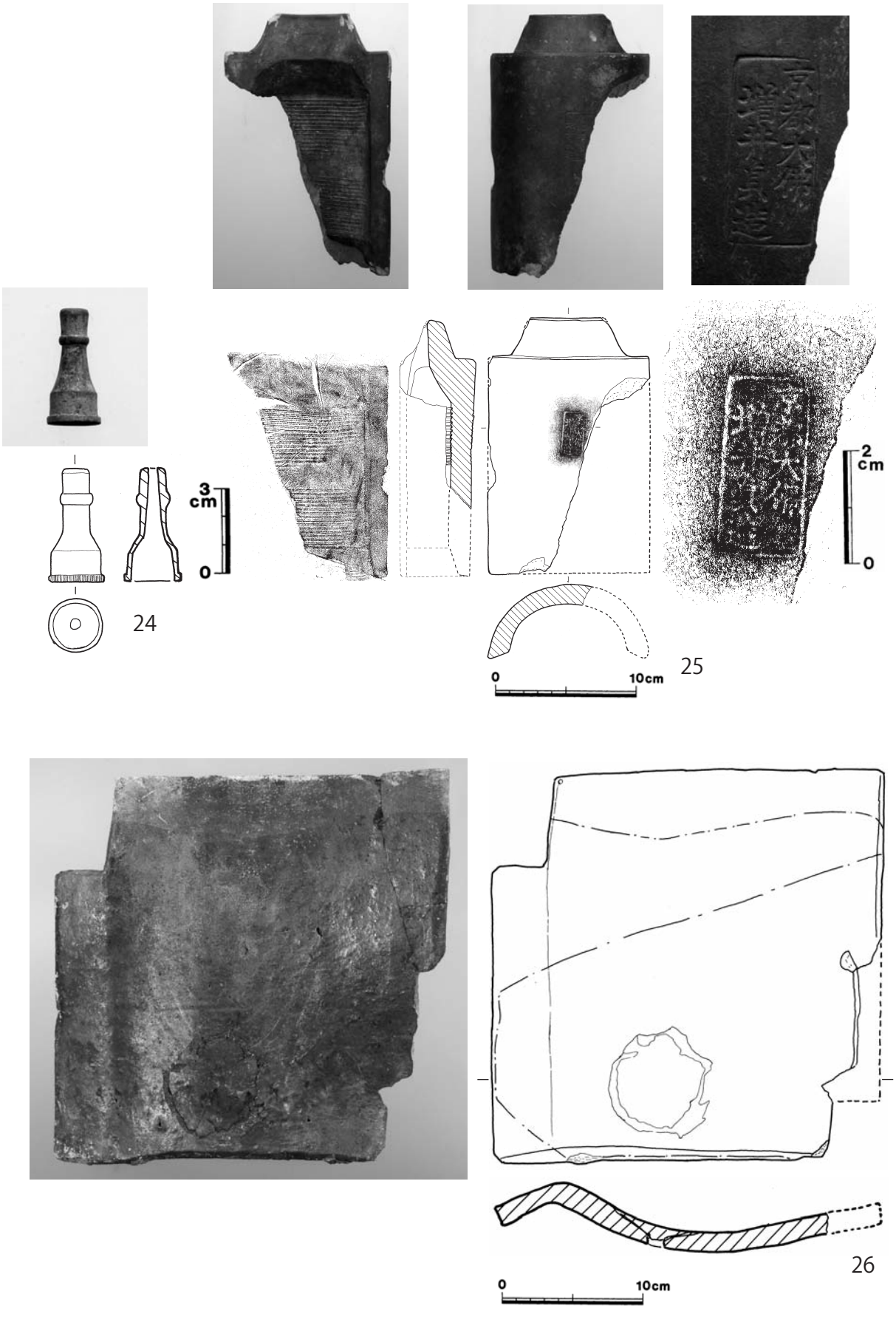
第 36 図　A区ＳＤ３出土遺物③（18 ～ 21：1/4、22・23：1/3）

書きで「京都大佛　増井貞造」とある。26 は石州赤瓦の桟瓦である。裏面を上にして伏せられた状態で池底から発見されたため、ほぼ完形であった。瓦設置後の穿孔によって割れた破片が、瓦の下から発見されており、接合後の形状を図示した。

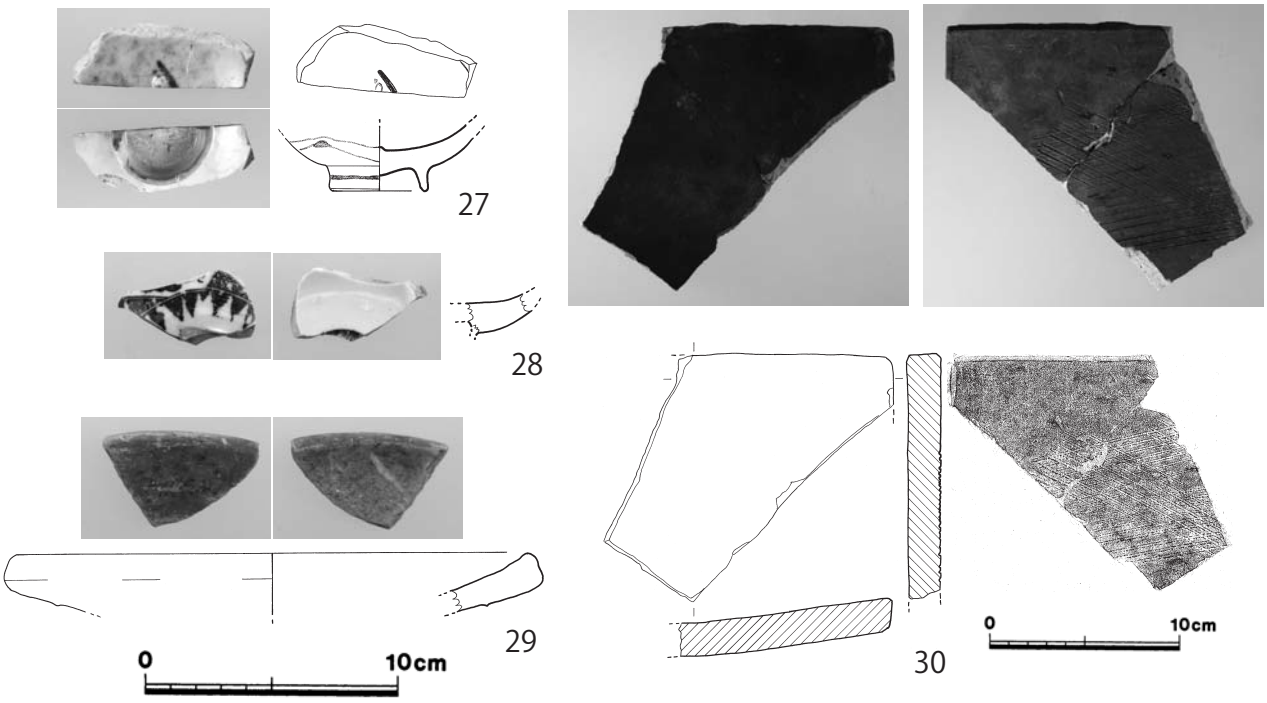
Ｂ区築山盛土

築山盛土中出土遺物が 27、表土出土遺物が 28 ～ 30 である。

27 は池庭の東側トレンチ発掘時に排水土管 (Ｂ区ＳＤ４新) の上付近より出土した染付磁器碗の底部で



第 37 図　Ｂ区ＳＧ１出土遺物（24：1/2、25・26：1/4・刻印のみ 1/1）



第 38 図　B 区築山盛土出土遺物（27 ～ 29：1/3、30：1/4）

ある。28 は、染付磁器の碗体部下半で、内外面には型紙刷りの濃紺の染付がある。29 は土師質焼成の口縁部で、器形は不明である。表面にはサビ釉が確認できるが、内面は剥落が著しい。30 は燻瓦の平瓦である。裏面に交差する 9 条のクシ描き沈線がある。

B区ＳＤ４

31 ～ 34 は、燻瓦の丸瓦である。いずれの刻印も凸面に押されている。31 ～ 33 の刻印は右から横書きで「京都」右から縦書きで「増井之印」とある。押印の方向が異なった個体があり、それぞれ図示した。34 の刻印は右から縦書きで「京都大佛」「増井製」とある。瓦の法量は寸詰まり気味の 31 ～ 33 と縦長気味の 34 に分かれるが、前述の B-SG1 出土の瓦と比較すると、いずれの長さ・幅ともに長い。凹面のクシ描き沈線は 2 帯あり、いずれも 11 条であるが、31 ～ 33・34 とでは玉縁部側のクシ描き沈線の場所が異なっている。いずれも凸面の玉縁部中央部には、製作時の痕跡と推定される段が残る。35 は土管状の製品の端部である。直径 11 ｃｍの小型品である。36 は土管である。口径約 11.5cm、最大径約 16cm、長さは約 59cm である。内外面には極暗赤褐色の鉄釉が薄くかけられ、布目が残る部分がある。接合痕から見ると、主要部分は粘土板を巻いたものを接合して製作したと推定される。

B区ＳＤ５

37 は土管である。口径約 13cm、最大径約 16cm、推定される長さは約 57cm である。内外面には極暗赤褐色の鉄釉が薄くかけられ、外面には布目が残る部分がある。接合痕から見ると、主要部分は 2 ～ 3 枚の粘土板を巻いたものを接合して 1 本の土管を製作したと推定される。

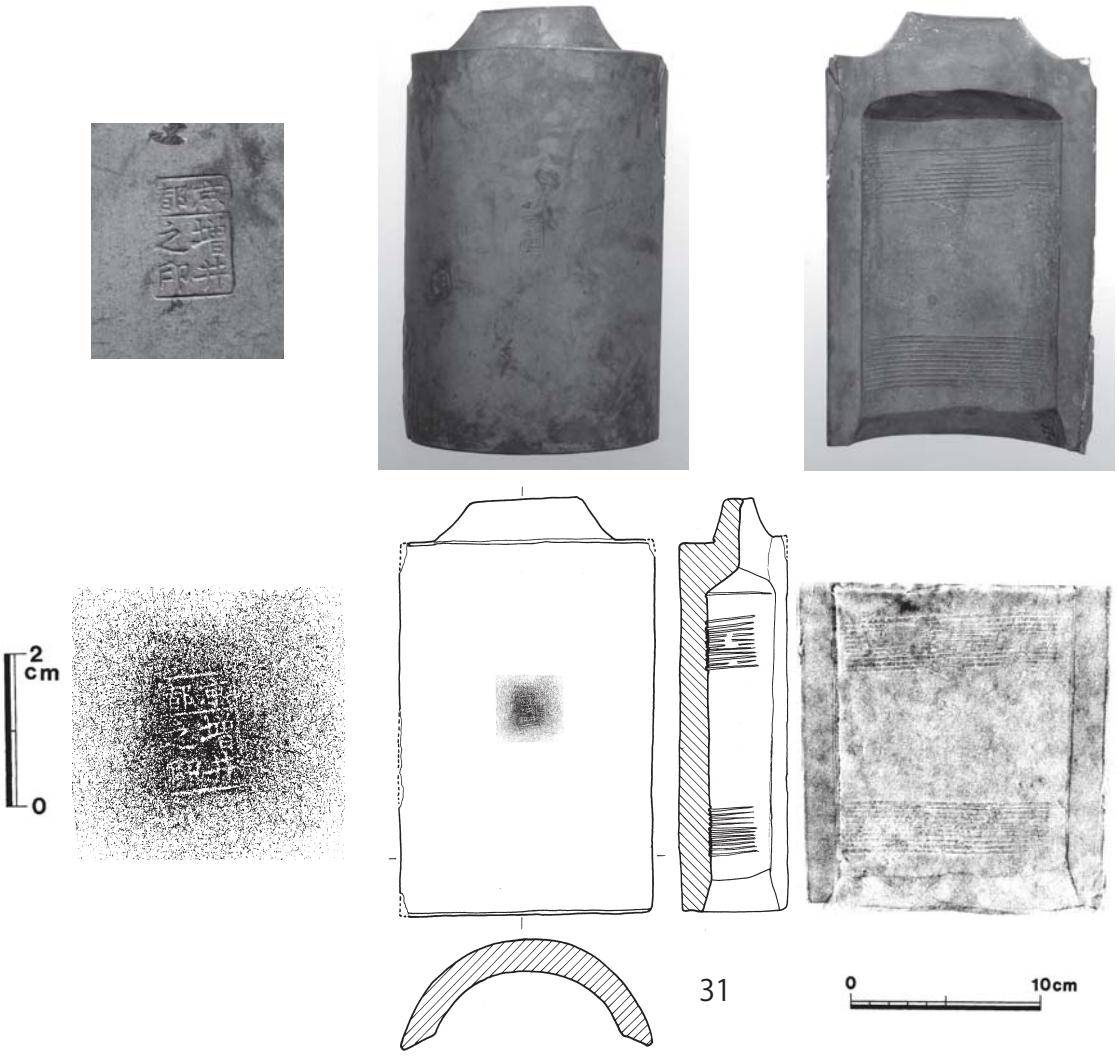
B区ＳＤ６

38 は土管である。口径約 10.5cm、最大径約 13.5cm 以上、長さは約 49.5cm である。内外面には暗褐色の来待釉が厚くかけられている。

Ａ区遺構に伴わない遺物

染付磁器

39 ～ 41 は碗、42・43 は猪口または湯飲と考えられる。染付は鮮明なものと濃紺なものとがある。40・41 とも底部畳付は露胎するが赤変していない。



第 39 図　Ｂ区ＳＤ４出土遺物①（31：1/4、刻印のみ 1/1）

陶器

44 は土鍋で、外面にはトビガンナがある。45 はこね鉢である。

46 は壷である。底部を除く内外面には白濁釉がかかり、外面上部には剥落が著しい鉄釉がかかる。47 は甕の口縁部と推定される。胎土には金雲母を少量含む。土師質焼成で、外面のみに暗青灰色の釉がかかる。48 は甕の体部である。内外面に鉄釉がかかり、内面には青海波文のタタキが残る。胎土・焼成・釉薬は一部の土管に類似する。

土管

49 は大型の土管である。内外面に鉄釉がかかる。

瓦質土器

50 は甕の体部、51 は底部と考えられる。いずれも内面に比べ、外面には光沢がある。

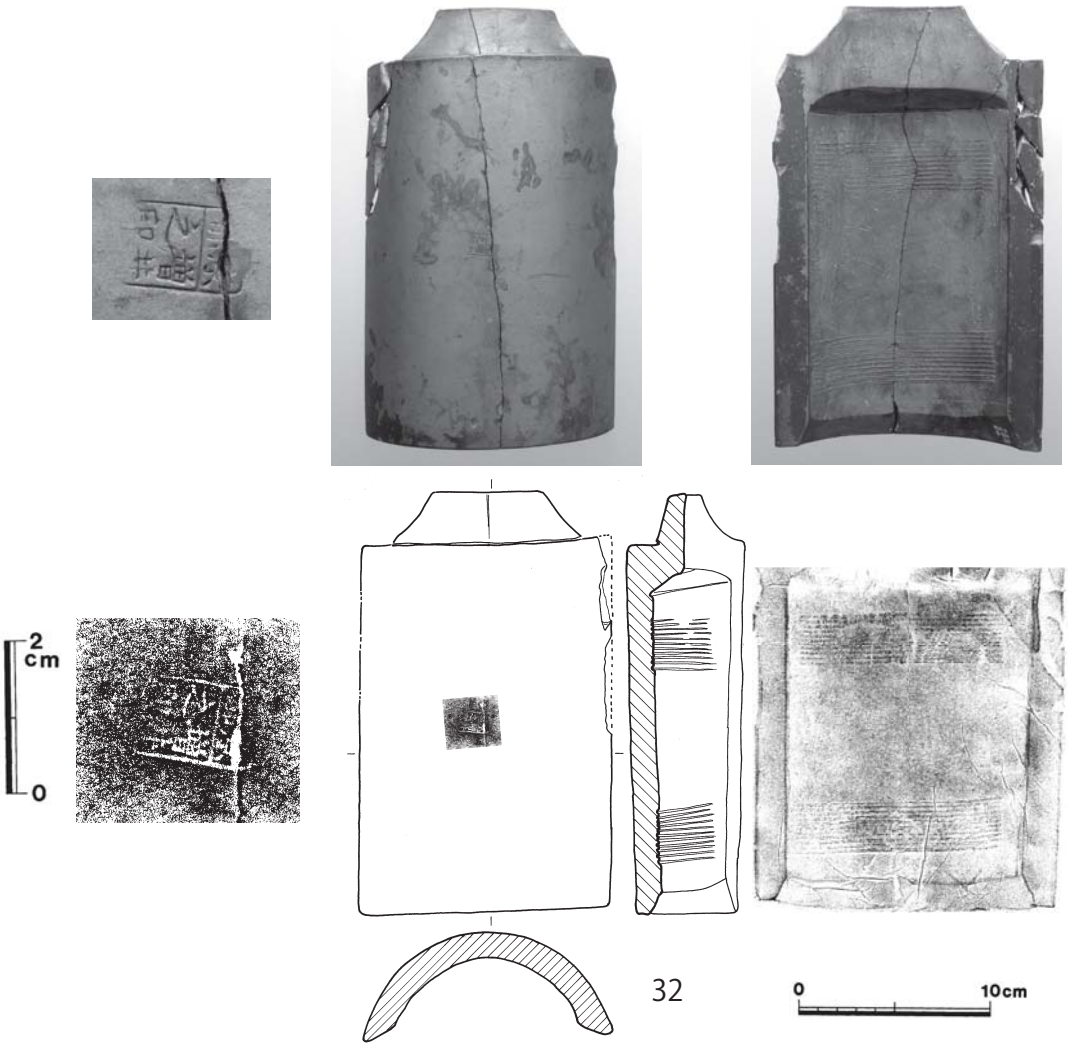
赤瓦（石州瓦）

52 ～ 55 は軒平瓦、56 は桟瓦、57・58 は熨斗瓦類、59 は丸瓦類である。55・59 のみ鉄釉で、残りは全て来待釉である。57 の目釘穴には銅線が残存していた。

燻瓦

丸瓦類

60・61 は軒丸瓦で巴瓦かと推定される。大型の 60 と小型の 61 がある。いずれも瓦当部は無紋。62



第 40 図　Ｂ区ＳＤ４出土遺物②（32：1/4、刻印のみ 1/1）

は丸瓦の玉縁部付近。凸面の玉縁側には 1 条の沈線、凹面には 10 条以上のクシ描き沈線がある。63 は丸瓦の一部。凸面には縦書きで「谷川瓦株式会社」「[　　]（製造人か）□（荒か）井米吉」の刻印がある。

軒平瓦

64 は軒平瓦の小巴部かと推定される。小巴の瓦当部は欠損しているため、紋様の有無は不明である。上面には接合のための 15 条以上のヘラ描き沈線が残る。

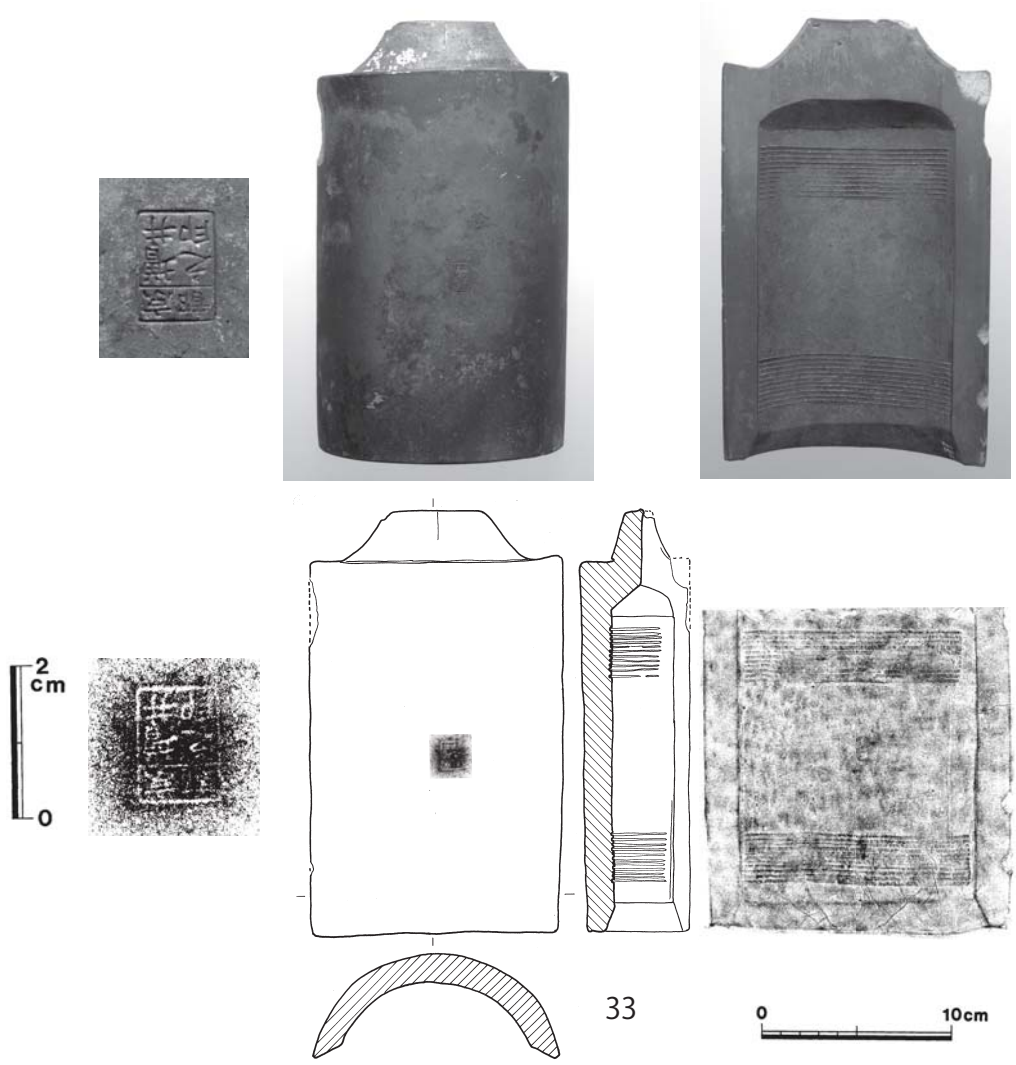
65 は一文字軒平瓦で、瓦当部は無文。尻部付近に目釘穴があり、目釘穴に接して表面に 1 条の沈線が入る。裏面には 15 条のクシ描き沈線が 3 帯と刻印がある。刻印は右から横書きで「京都」、上から縦書きで「特製」とある。

平瓦類

66・67 は桟瓦。68 ～ 71 はいずれも凸面に比べ凹面が平滑で、凸面にクシ描き沈線が施されていることから、平瓦あるいは桟瓦と推定した。65 の軒平瓦も含めてこれら平瓦・桟瓦類のクシ描き沈線の施文方向は、基本的に瓦の谷の軸に直交ないし斜行していることが、後述の熨斗瓦類と異なる。裏面である凸面のクシ描き沈線には、平行する 68 ～ 70 と交叉する 71 がある。その条数は 68 が 9 条以上、69・70 が 11 条、71 が 13 条である。

熨斗瓦類

凹面に比べ凸面が平滑で、凹面にクシ描き沈線が施されている瓦を熨斗瓦類とし、72 ～ 81 に掲載した。クシ描き沈線は凹面のみではなく、凸面にも施されていることが多い。クシ描き沈線の条数は 16 条から

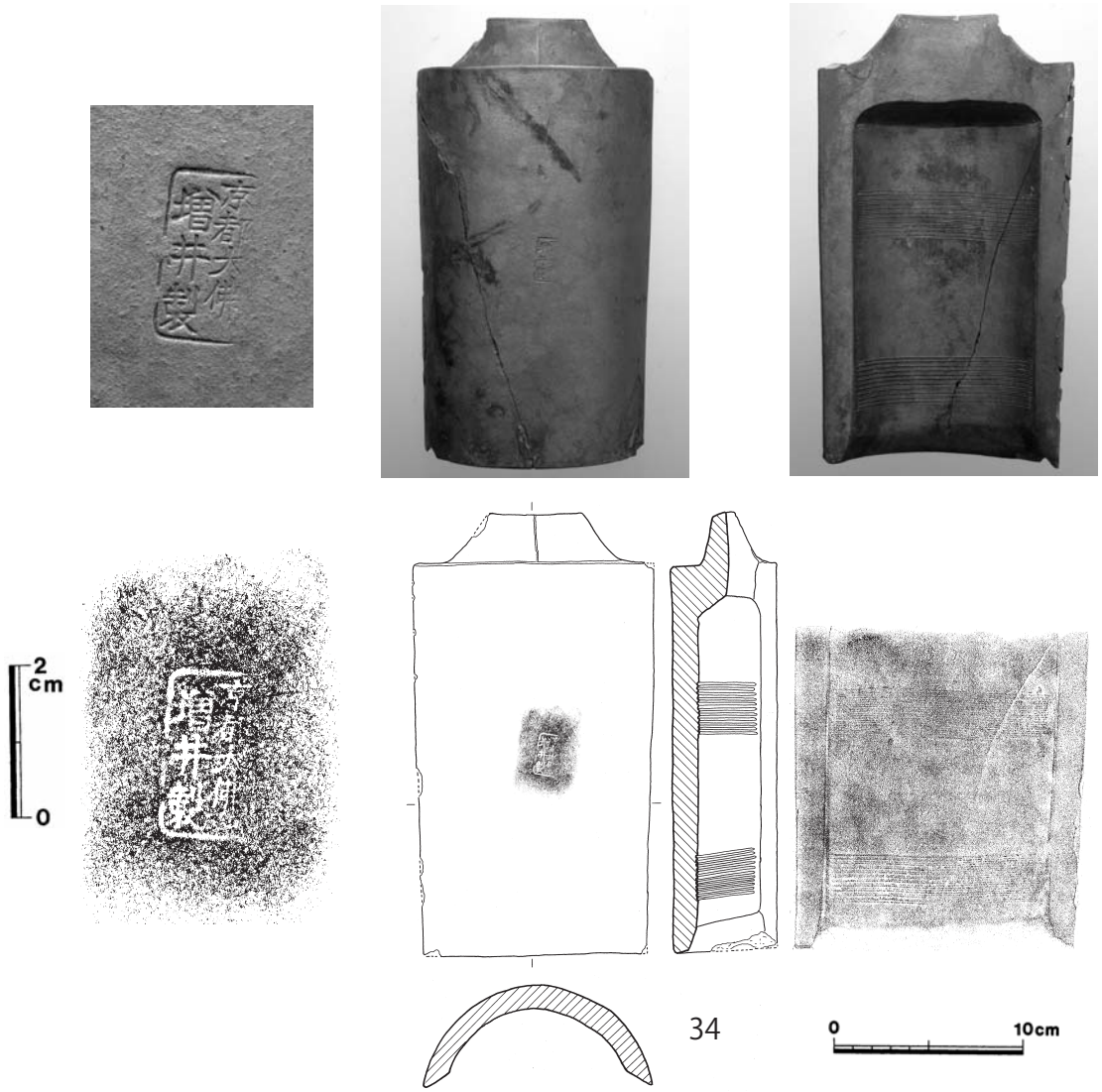


第 41 図　Ｂ区ＳＤ４出土遺物③（33：1/4、刻印のみ 1/1）

5 条まで多様であり、表側である凸面が裏側である凹面より多い傾向にあるが、77 のように同数で同じ工具を用いたと推定される個体もあった。これら熨斗瓦類のクシ描き沈線の施文方向は、基本的に瓦の谷の軸に沿っていることが、前述の平瓦・桟瓦類と異なる。クシ描き沈線は、表側である凸面では直線的に平行し、裏側である凹面では波状や交差する傾向にある。

刻印が見られるものもあり、いずれも瓦の頭部ないし尻部の小口面に押印されていた。75 は右から 2 行の縦書きで「京都大 [　] (佛か)」「増井 [　] (製か)」。77 は 1 行の縦書きで「京 [　　] (都特製か)」。79 は不明瞭ながらも上から順に、横書きで「□□」、14 弁の菊花文、右からの横書きで「泉州」、右からの 3 行の縦書きで「[　　] 川」「[　] 辻利」「[　] 会社」の文字が確認できる。81 も不明瞭であるが、同一刻印と推定される試掘調査出土遺物を参考にすると、上から順に 14 弁の菊花文、横書きで「□□」、右からの横書きで「泉州（州は異体字)」、右からの 2 行の縦書きで「谷川 [　] 株式会社」「[　] 人辻利平」の文字が確認できる。「京都」の文字が見られる 75・77 のクシ描き沈線の条数は比較的多く、13 ～ 10 条であり、「泉州」の文字が見られる 79・81 のクシ描き沈線の条数は比較的少なく、6 ～ 5 条であり、クシ描き沈線の条数が産地を反映している可能性も考えられる。なお､79 など一部には漆喰が残存していた。

82 は凸面に比べ凹面がやや粗いことから熨斗瓦類の一種かと推定した。小口面がやや先細りとなっており、他の熨斗瓦類とは端部の形状が異なっている。



第 42 図　Ｂ区ＳＤ４出土遺物④（34：1/4、刻印のみ 1/1）

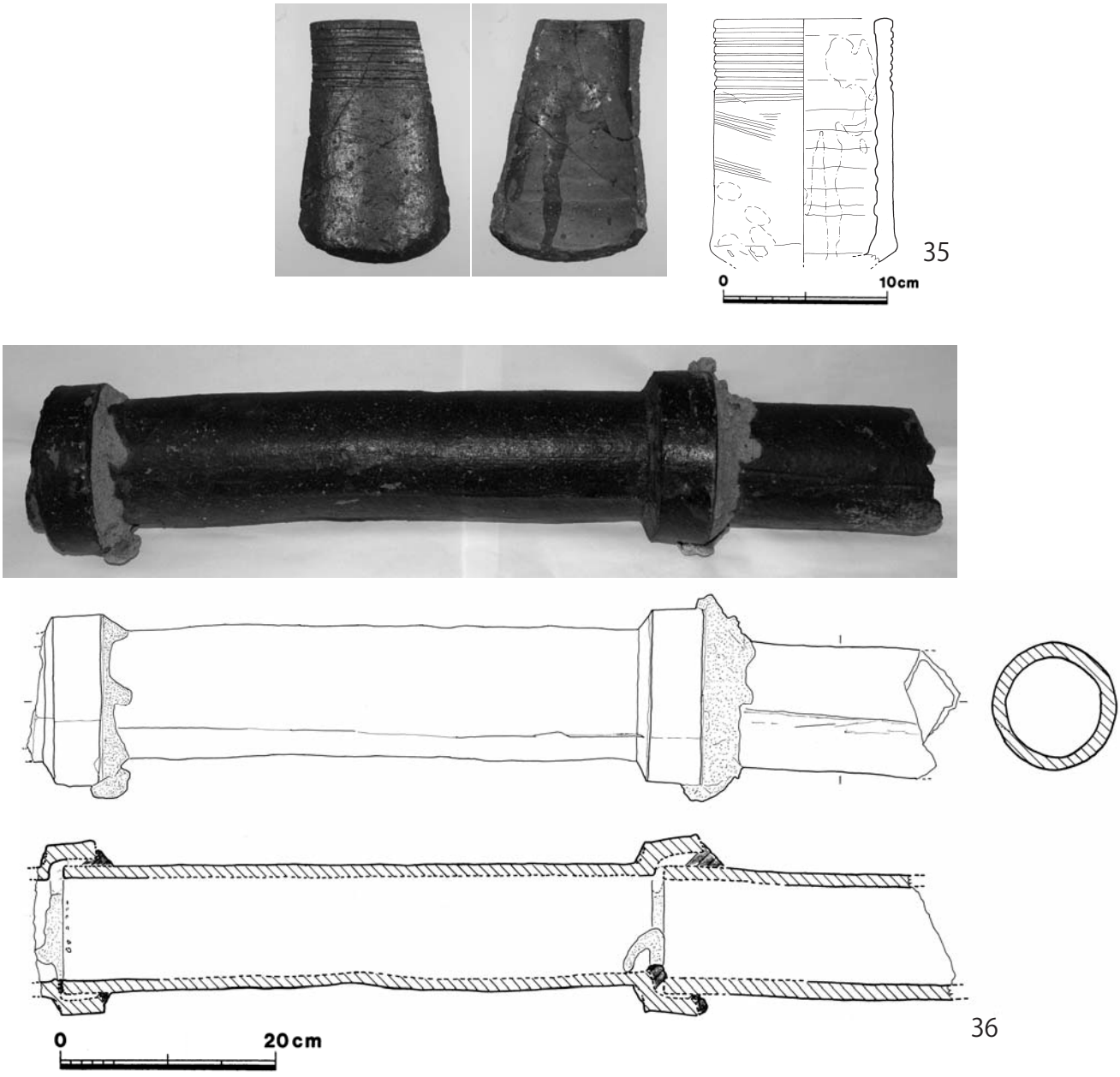
海鼠瓦類

反りのない扁平な瓦で、表面は平滑であるのに比較して裏面はやや荒い仕上げである。83 の表面の外周には沈線はなく、裏面には焼成後に縦書きで「三浦」の刻銘がある。84・85 は海鼠瓦である。84 の表面外周には３条のヘラ描きかと推定される沈線がある。沈線施文部は斜めに面取りがされる特徴がある。85 の表面には２条のヘラ描きかと推定される沈線がある。沈線施文部に沿って、段差を有した欠損部が見られる特徴がある。

その他の瓦

86 は不明瓦で、扁平な瓦に幅狭の縁部が接合されている。接合部の上下は４条のヘラ描きと思われる沈線を施して接合されている。表面は平滑で、裏面はやや粗い。裏面側の縁部に刻印がある。刻印の上部には、丸の中に「三」で外周には２本の矢があるマークが陰刻されている。マークの下には２行の縦書きで「泉［　］」「［　］」の文字が確認できる。桟瓦かとも思われるが、その場合には縁部が下になる。

87 は雁振瓦の一部である可能性がある。半円形の断面を有しており、裏面は剥離面である。剥離面には７条以上のヘラ描きと思われる沈線と凸線が確認でき、表裏面に接合のための沈線が施されていたと推定される。



第 43 図　Ｂ区ＳＤ４出土遺物⑤（35：1/4、36：1/6）

煉瓦

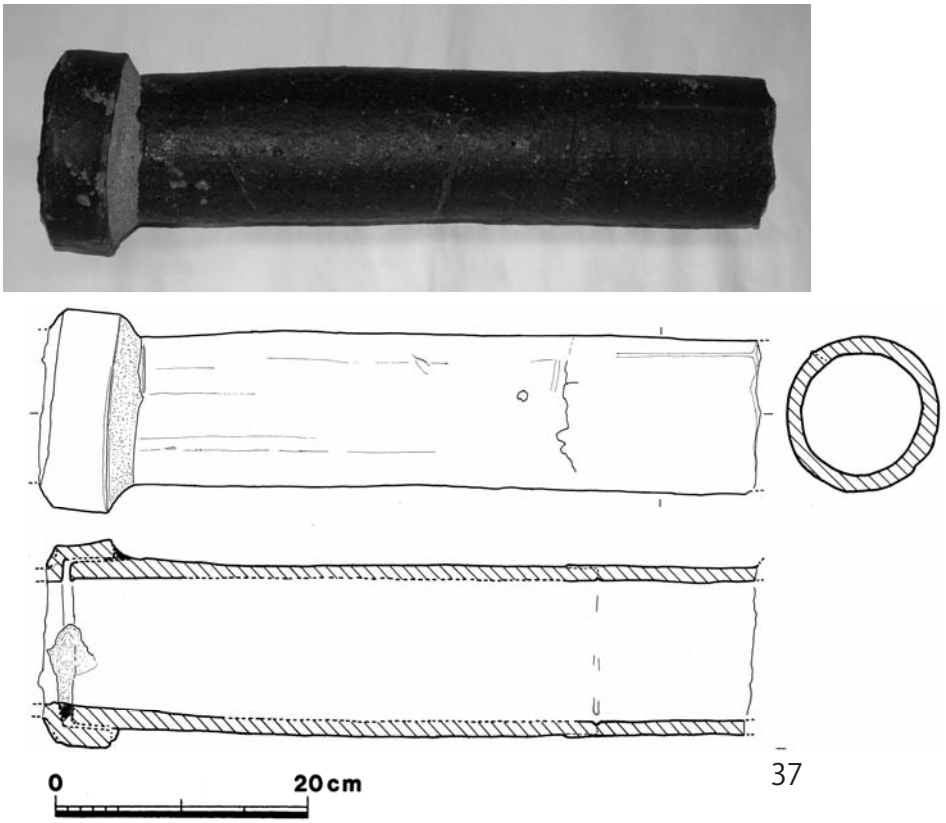
88 は荒い粒状をした磁質の煉瓦で、明らかに土製の赤煉瓦とは異なる。一部にモルタルが付着している。煉瓦は長さ 23.0cm、幅 11.0cm、厚さ 6.1cm であり、平部に 1 行の縦書きで「三石耐火加藤合資会社」の陰刻による刻印がある。

89 は鍔煉瓦（からみれんが）である。一側面を欠損するが、残る側面には鋳型への流し込みで生じたと推定される段差が上下中間位に廻る。側面上半は比較的平滑であるが、側面下半および上面は小さな気泡が表面に見える。断面上部には 2 層の空洞があり、空洞下面には扁平な粒状溶解物（径約 3 ～ 9mm、厚さ約 2 ～ 4mm）が固着している。

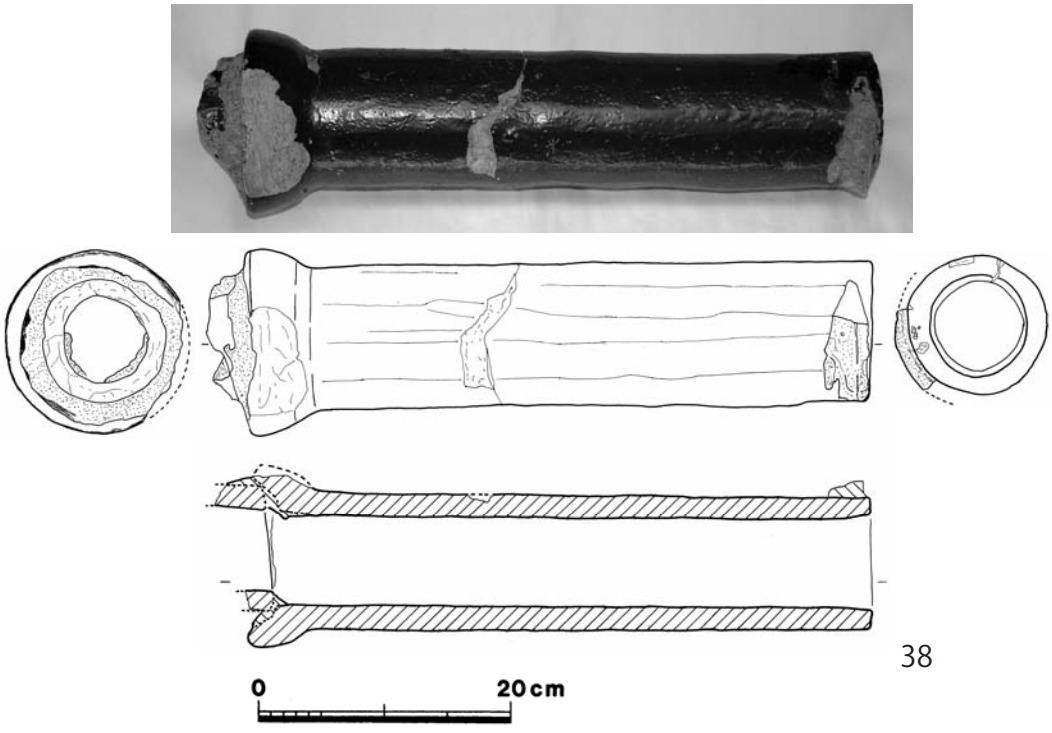
金属製品ほか

90 ～ 93 は鉄製カスガイである。幅広のものから幅狭のものまで多様である。

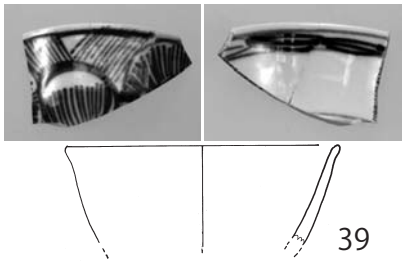
94 はクサビ状の鉄製品である。95 は鉄製の縦樋受けと推定される。 2 部品で構成されており、環状に

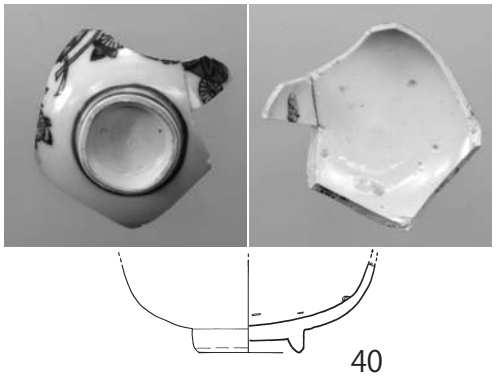


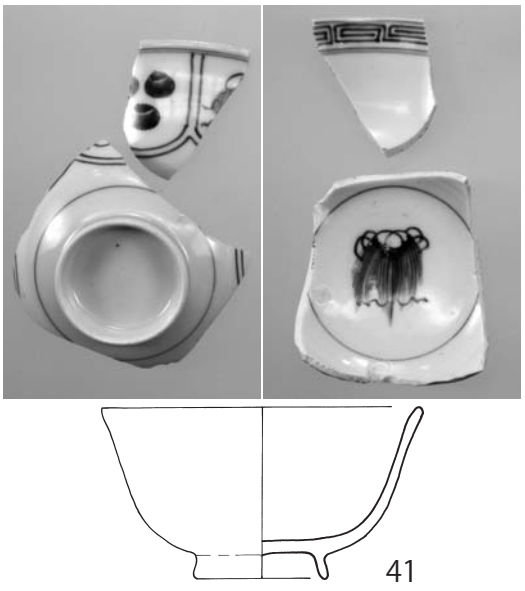
第 44 図　Ｂ区ＳＤ５出土遺物（37：1/6）

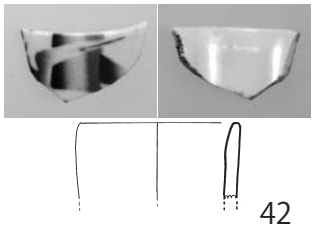


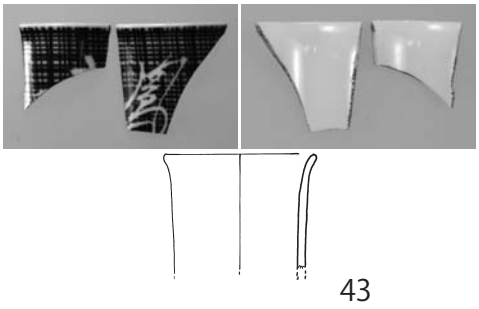
第 45 図　Ｂ区ＳＤ６出土遺物（38：1/6）

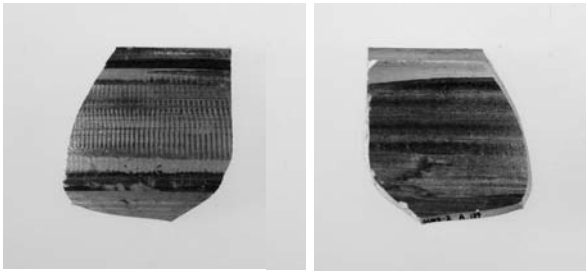


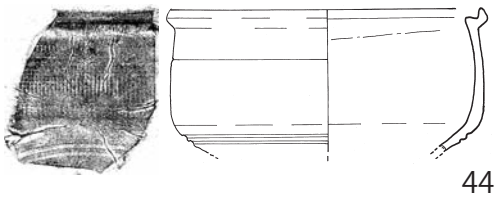


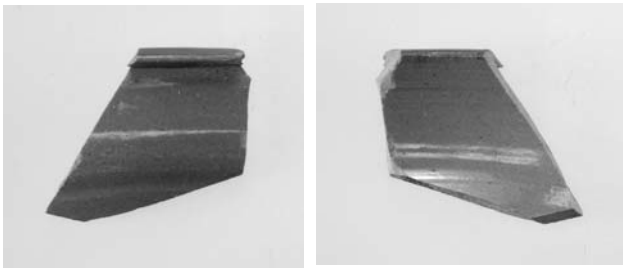


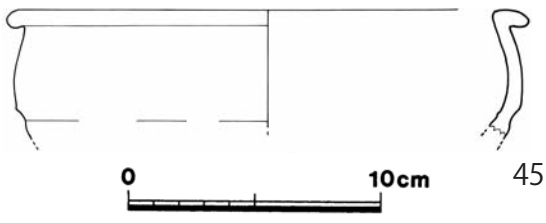




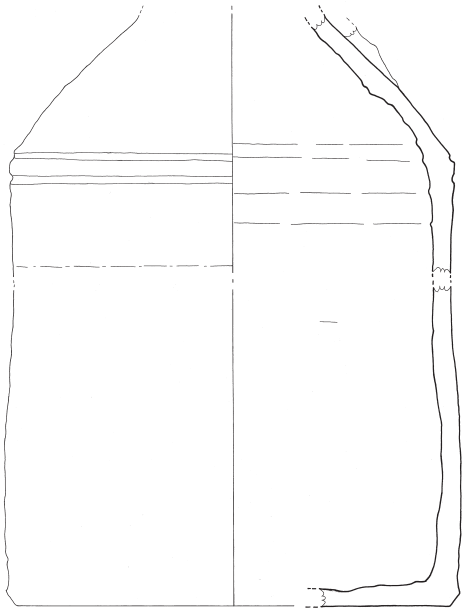




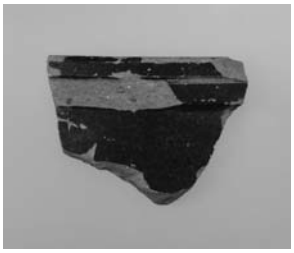


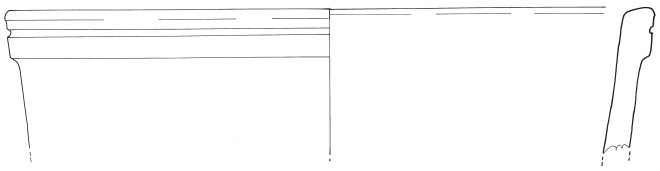


第 46 図　A 区遺構に伴わない遺物①（39 ～ 45：1/3）

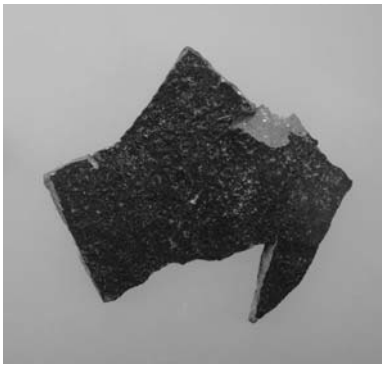


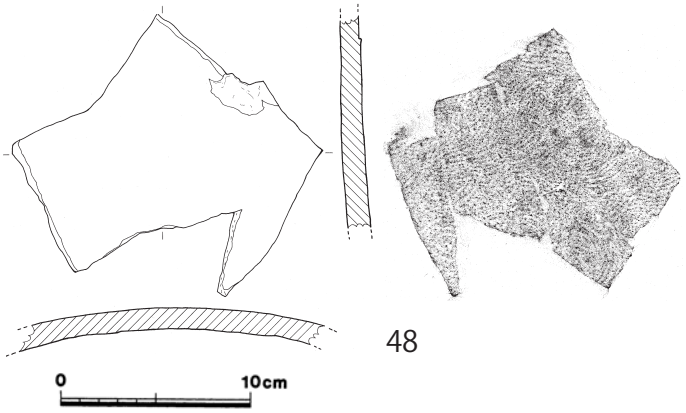
46





47

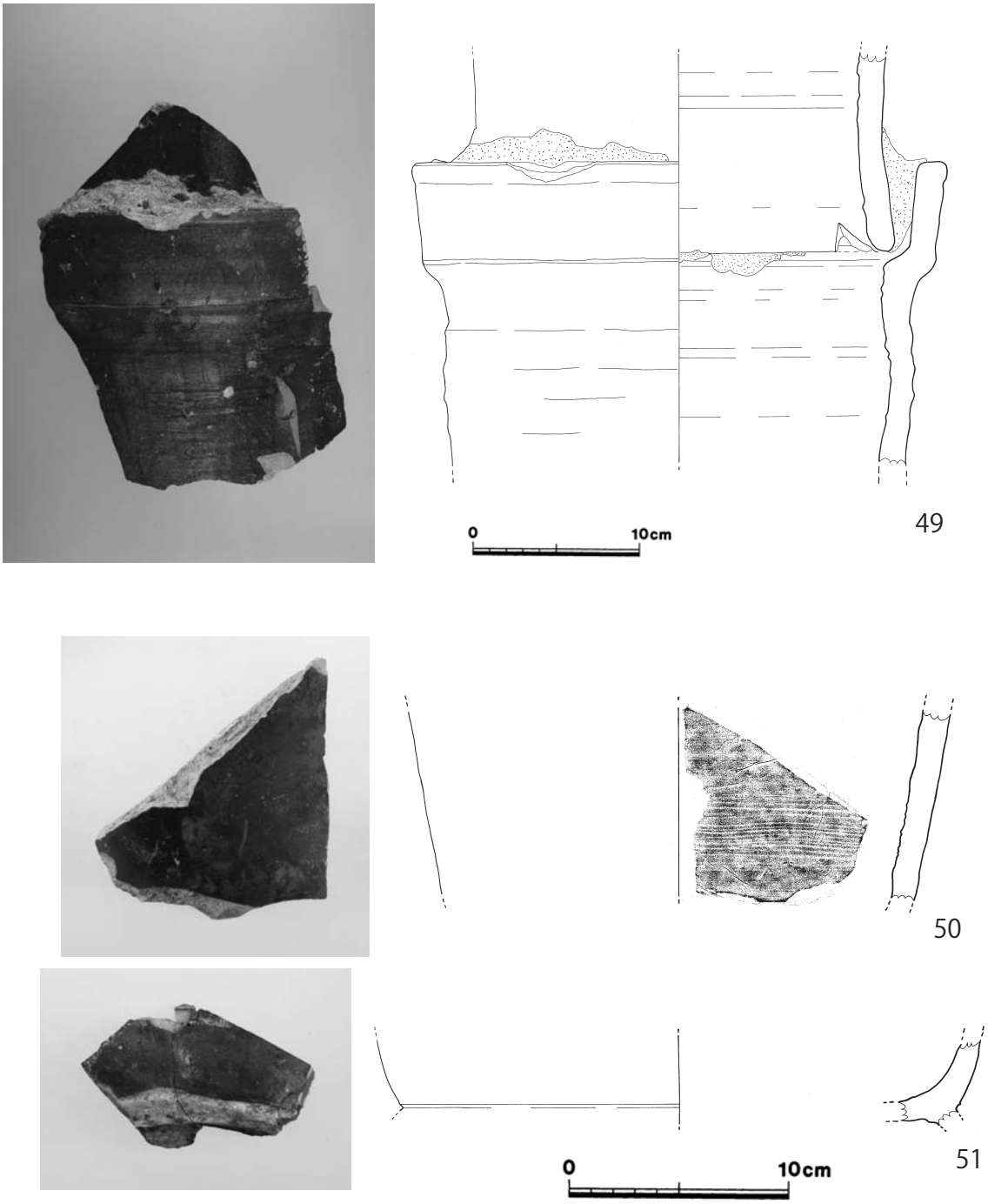




48

0 10cm

第 47 図　A 区遺構に伴わない遺物②（46 ～ 48：1/4）



第 48 図　A 区遺構に伴わない遺物③（49：1/4、50・51：1/3）

折り曲げられた中には釘状の小片も残っていることから、蝶番状に 2 ヶ所が接合されていたと推定される。

96 は鉄製の座金。約 4.6cm 四方の鉄板に約 2.0cm の円形穴が開いている。

97 は鉄製の歯車状の工具片と推定される。弧を描く外周部には歯車状の凹凸が確認できる。

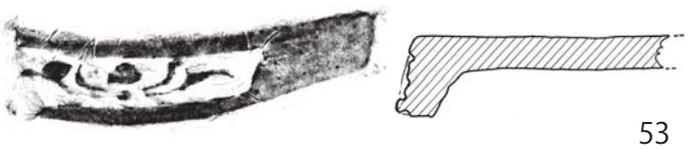
98 は不明の鉄板片である。X 線写真を見ると成分の異なる 2 材によって鋳造されていると推定される。

99 は銅板片である。折れ曲がった状態で出土したが、復元すると長さ約 13.0cm、幅約 7.0cm と推定される。

100 は銅滴である。表面は溶解しており、錆によって緑青色をしている。101・102 はガラス質溶解物である。101 は石に付着しており黒色、102 は赤褐色をしている。

103 は自然石と思われるが、通常の石と比較して比重が高く、鉱石様の自然石である可能性があり掲載

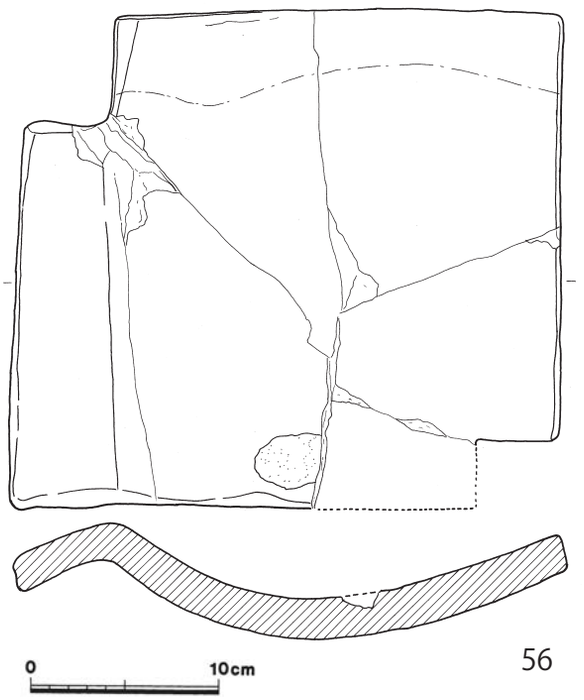
52



53

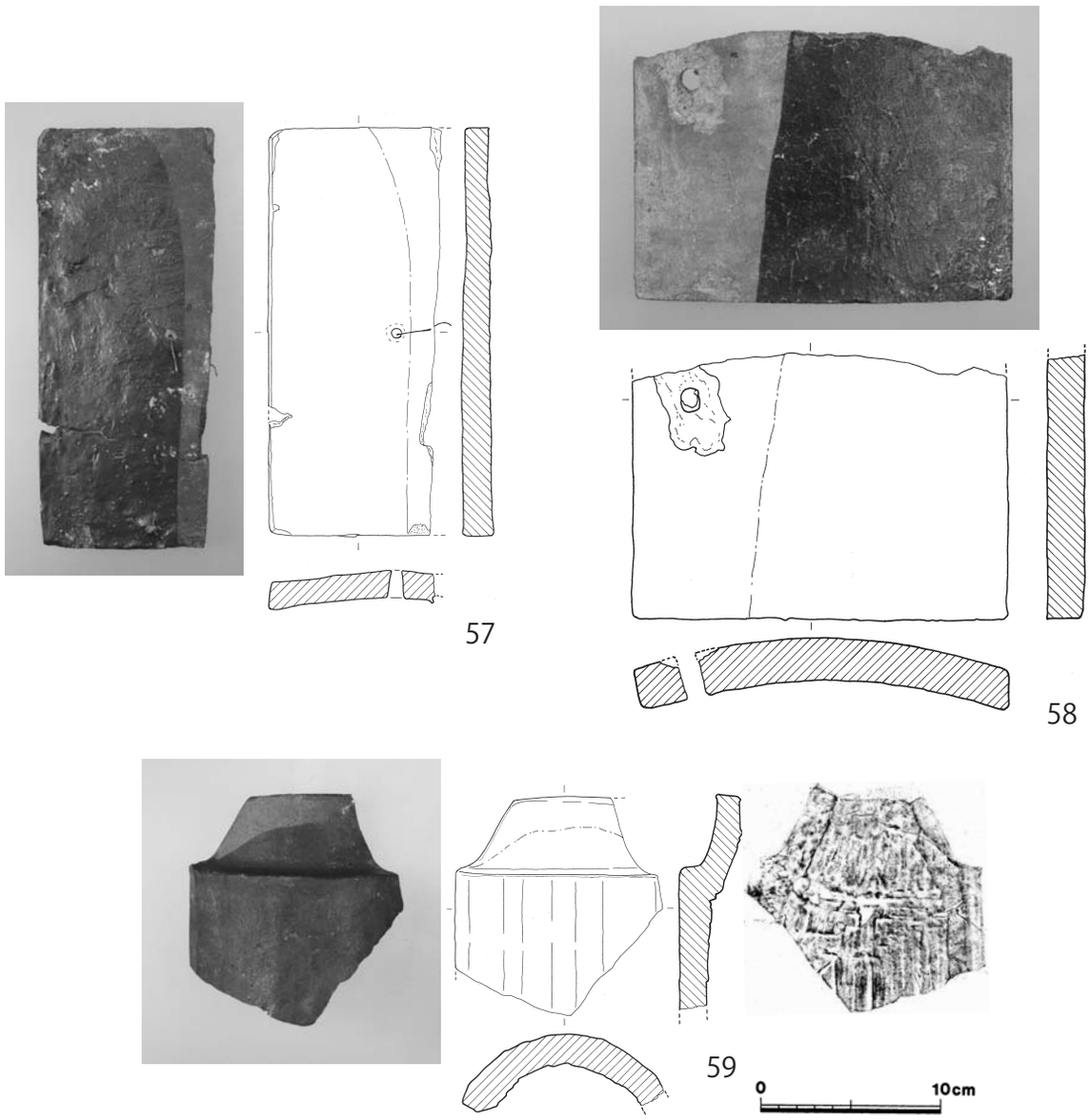
54

55



56

第 49 図　A 区遺構に伴わない遺物④（52 ～ 56：1/4）



第 50 図　A 区遺構に伴わない遺物⑤（57 ～ 59：1/4）

しておいた。この他に 3 点同様の石が出土している。

104 は切石製品の両側に鉄が錆びて付着したものである。

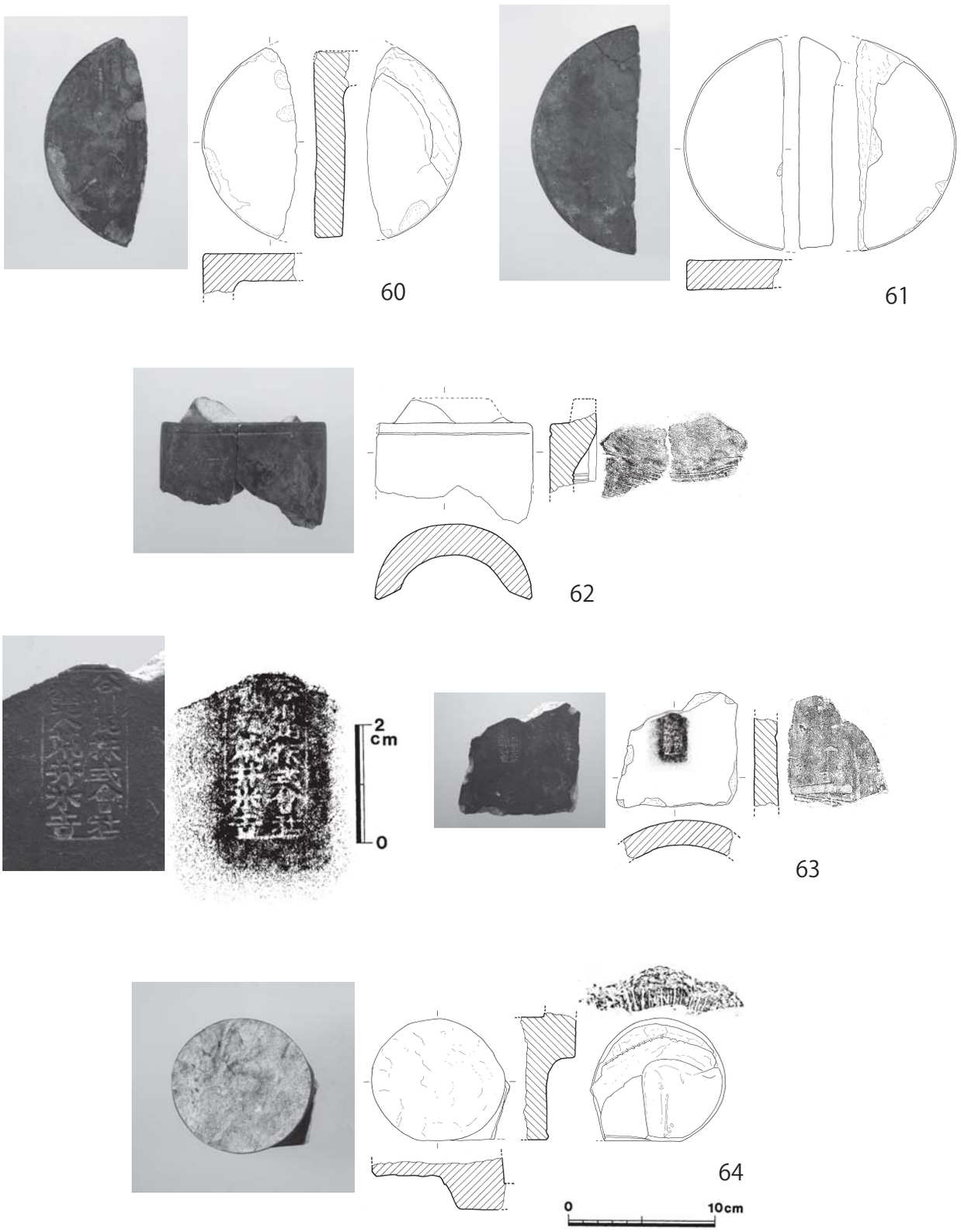
ガラス製品

105 はガラス瓶の蓋。106 はガラス製容器である。平面形は 10 角形である。107 はビール瓶である。肩部には 2 つのマークと「TRADE」「MARK」の文字、裾部には「CO_.LTD_DAINIPPON　BREWERY」の文字、底部には星マークと「10」「6」の文字がそれぞれ陽刻されている。

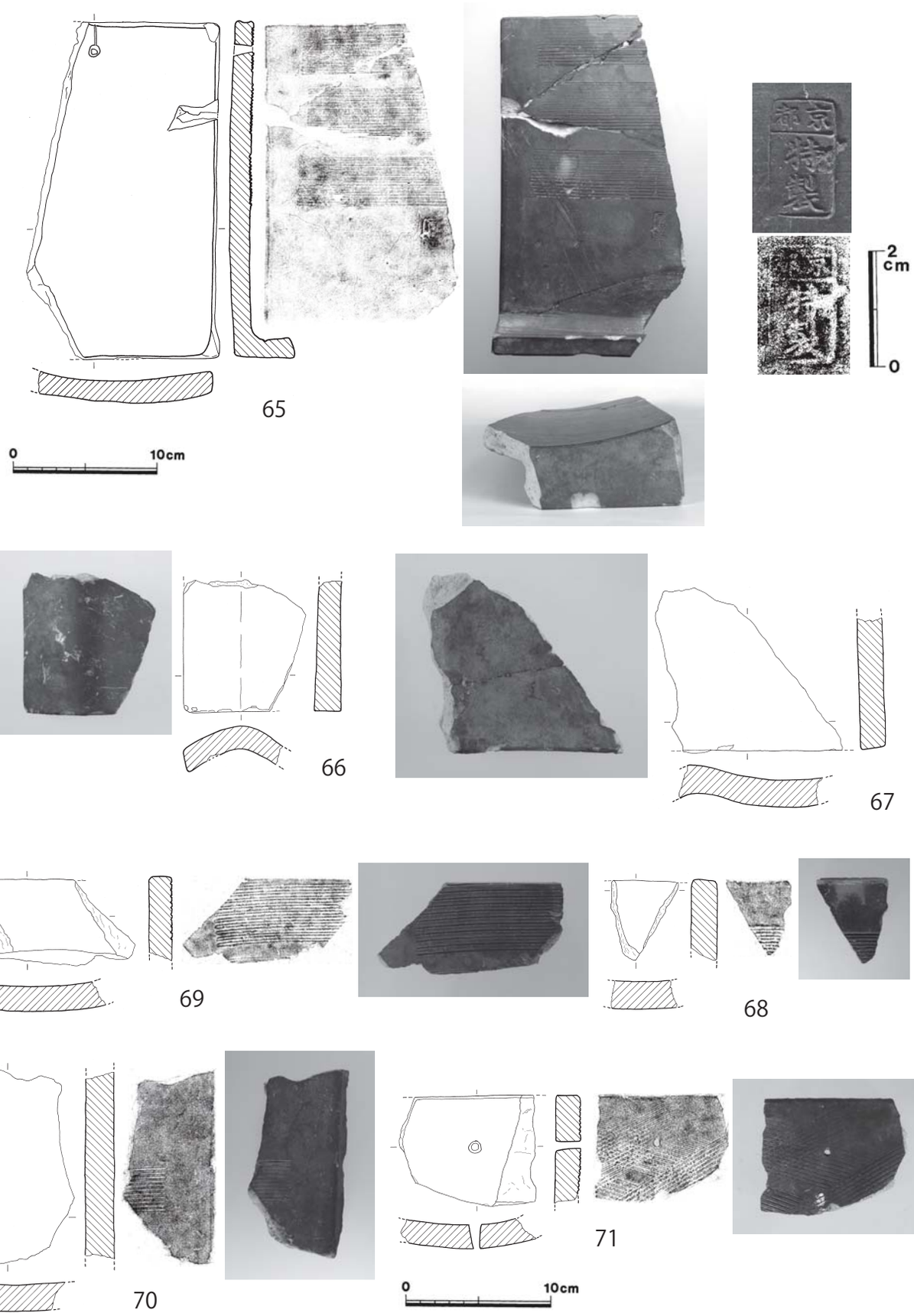
B 区遺構に伴わない遺物

陶磁器・土師器・瓦質土器

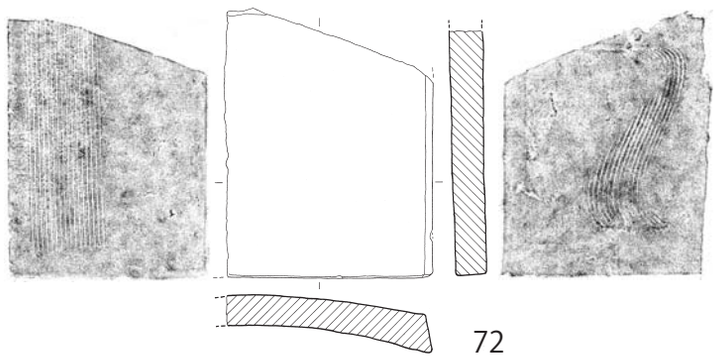
108 ～ 111 は染付磁器。108 は碗、109 は皿、110 は猪口である。111 は便器の一部と推定され、上面には鱗状の模様、側面には雷文状の模様が描かれる。112 は陶器の鉢。113 は土師器の灯明受皿である。内外面にロクロ回転痕による凹凸が著しい。114・115 は瓦質土器の口縁部である。いずれも破片で同一



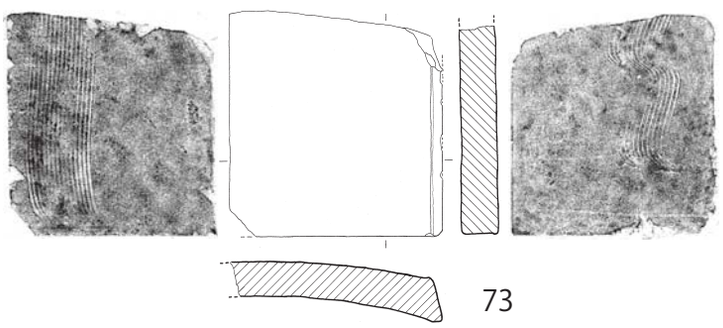
第 51 図　A 区遺構に伴わない遺物⑥（60 ～ 64：1/4、刻印のみ 1/1）



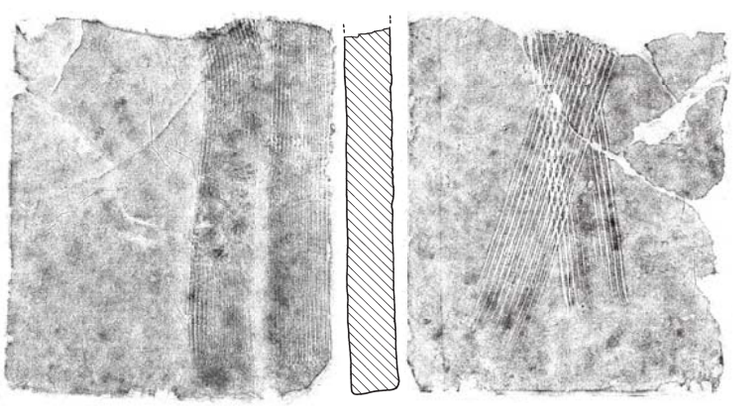
第 52 図　A 区遺構に伴わない遺物⑦（65 ～ 71：1/4、刻印のみ 1/1）



72



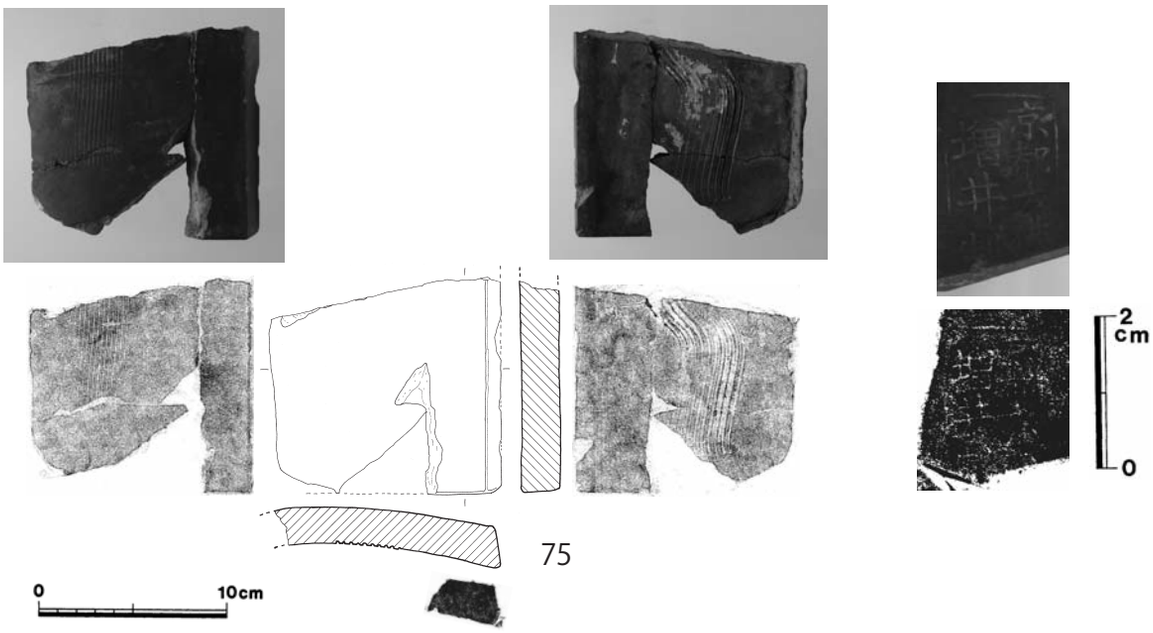
73

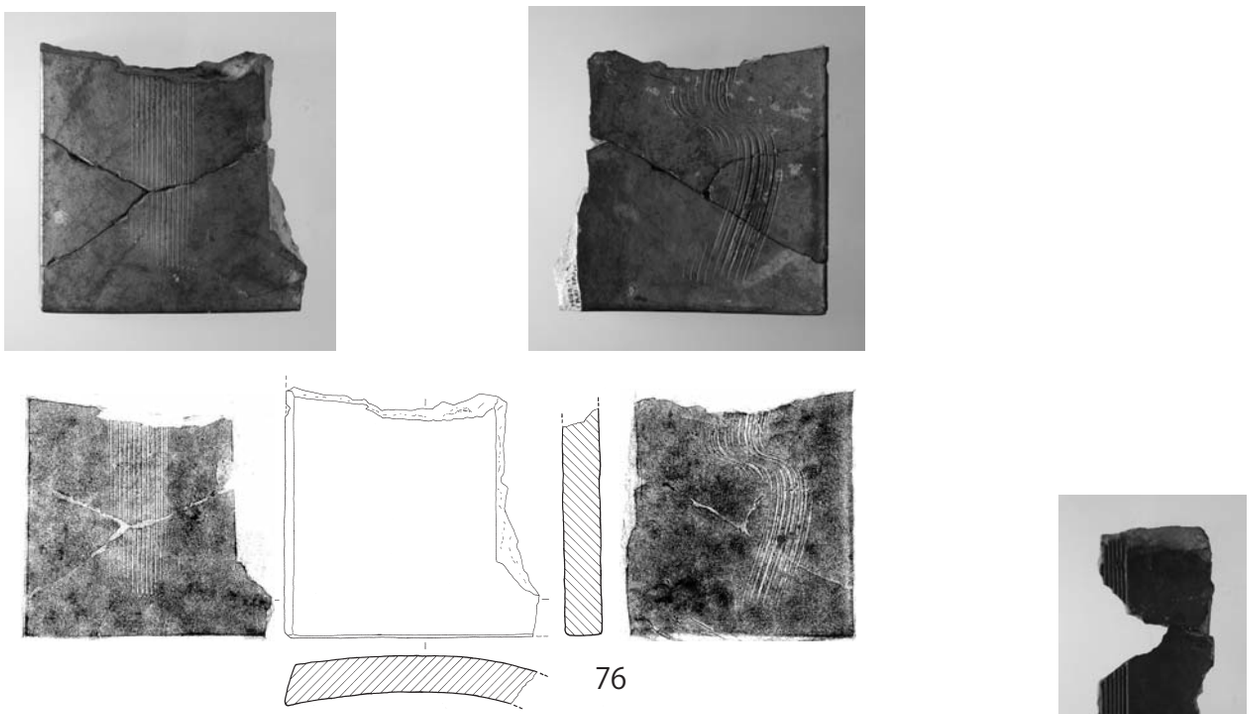


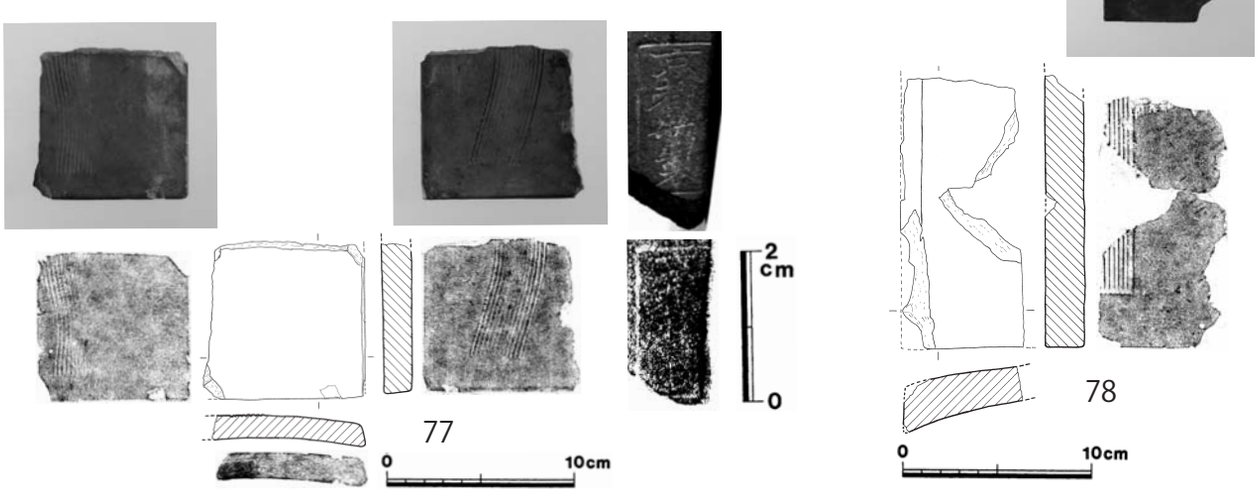
74

0 10cm

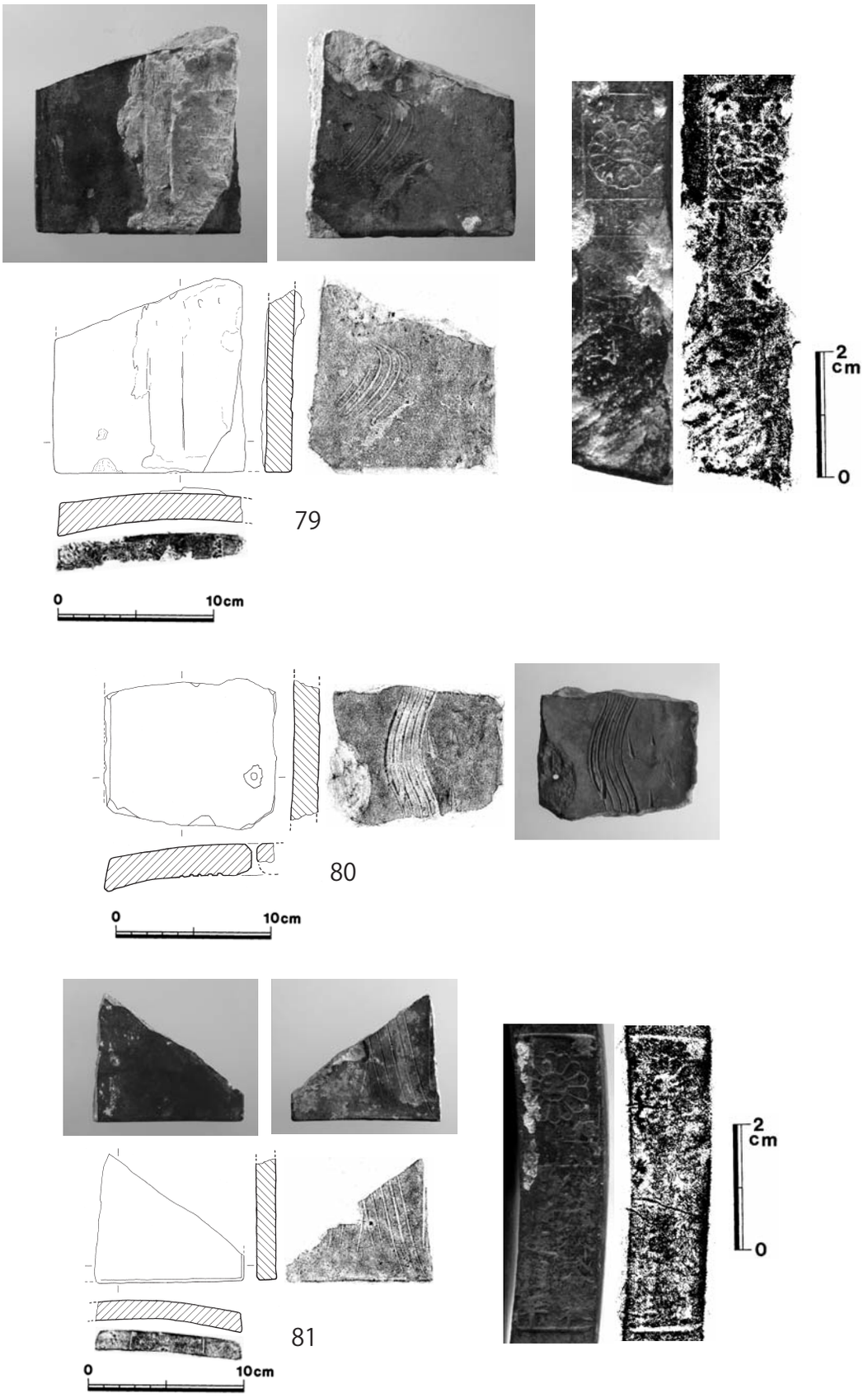
第 53 図　A 区遺構に伴わない遺物⑧（72 ～ 74：1/4）



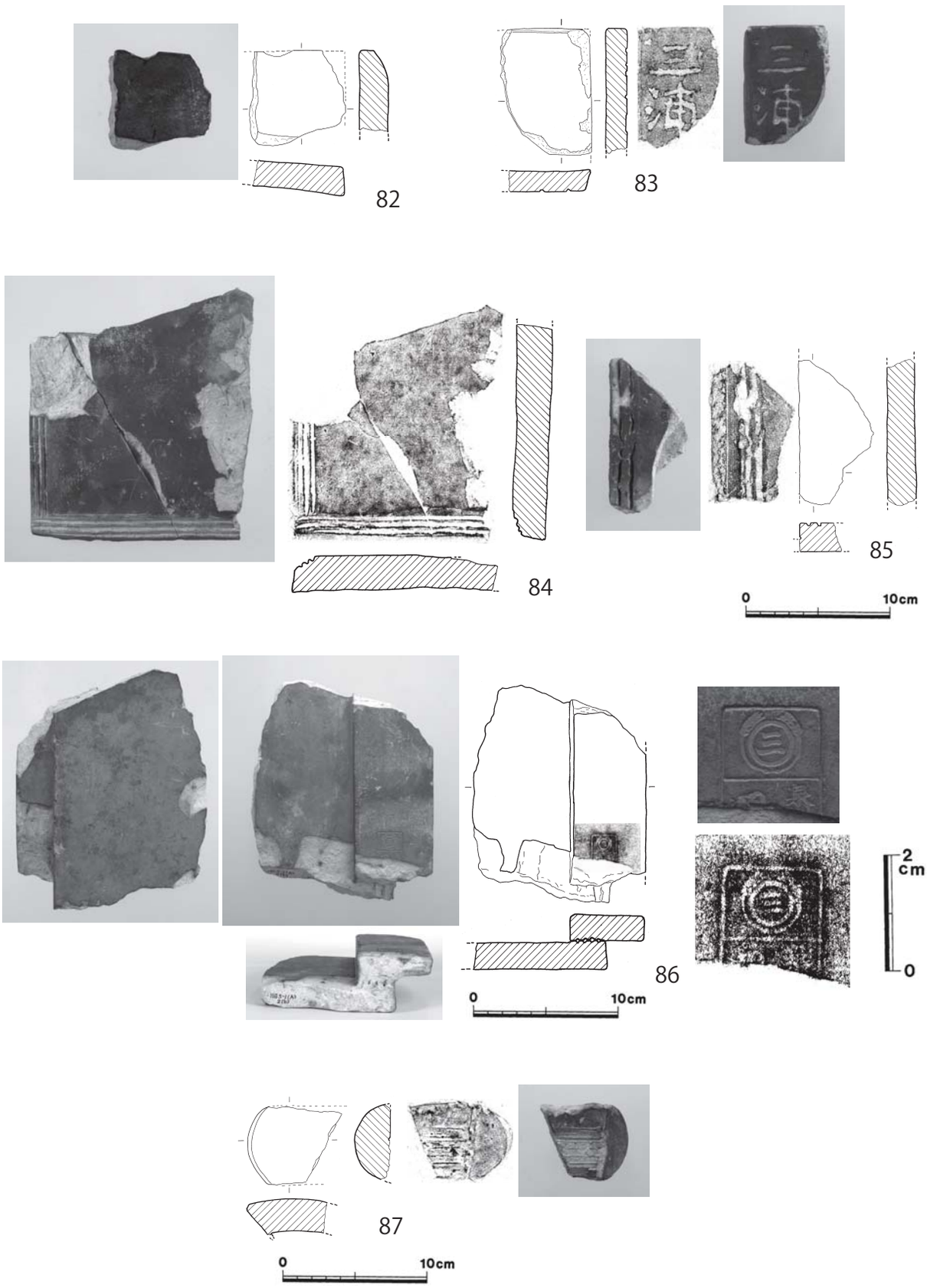




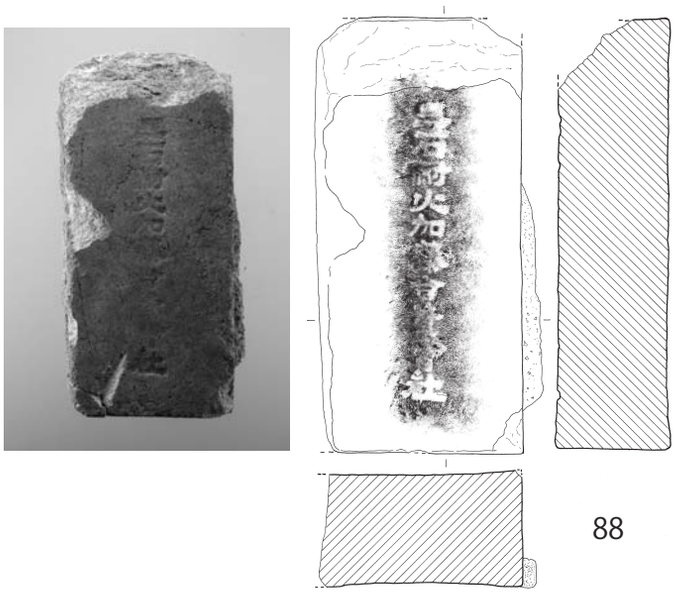
第 54 図　A 区遺構に伴わない遺物⑨（75 ～ 78：1/4、刻印のみ 1/1）



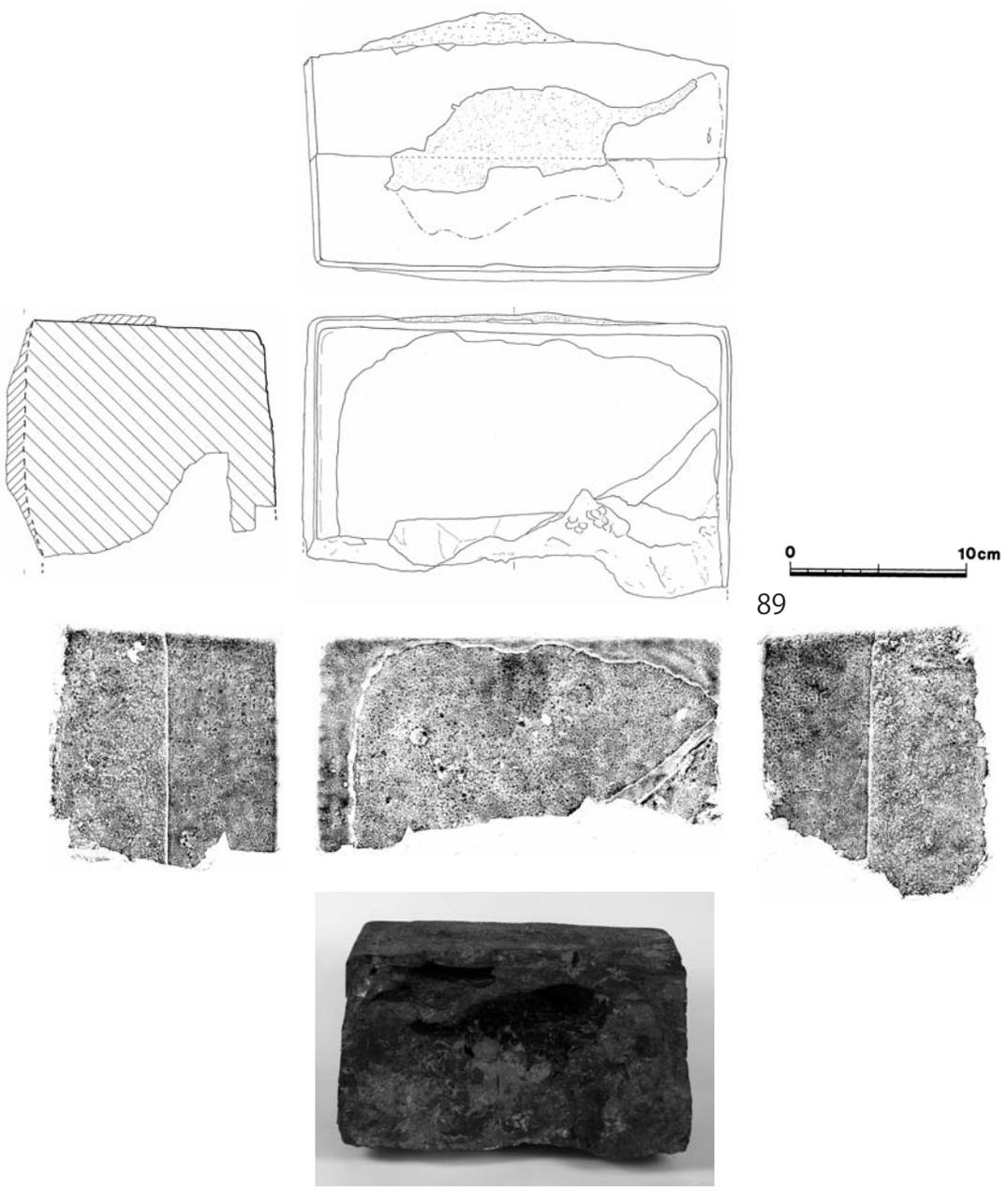
第 55 図　A 区遺構に伴わない遺物⑩（79 ～ 81：1/4、刻印のみ 1/1）



第 56 図　A 区遺構に伴わない遺物⑪（82 ～ 87：1/4、刻印のみ 1/1）

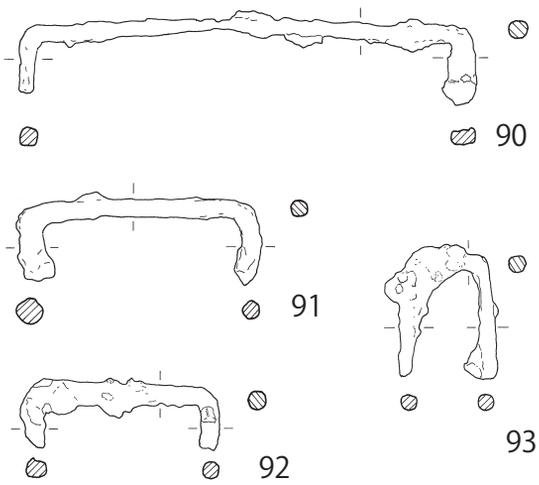


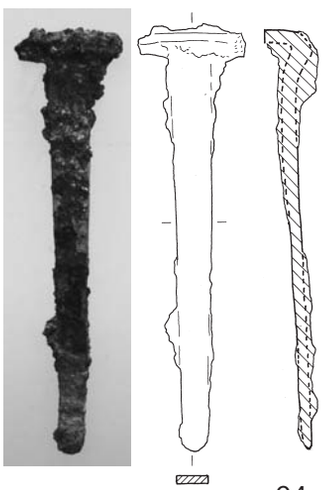
88

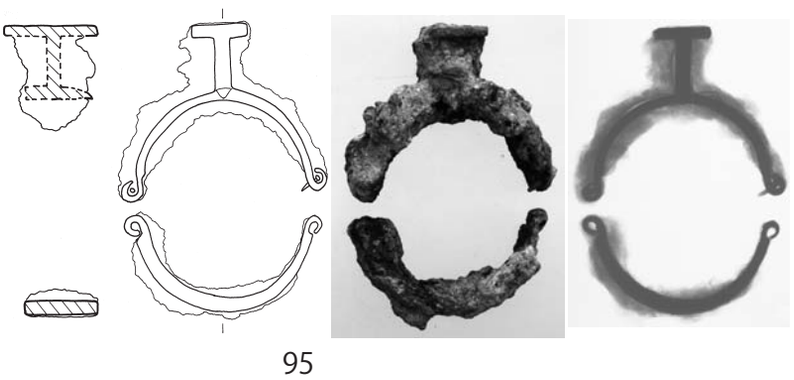


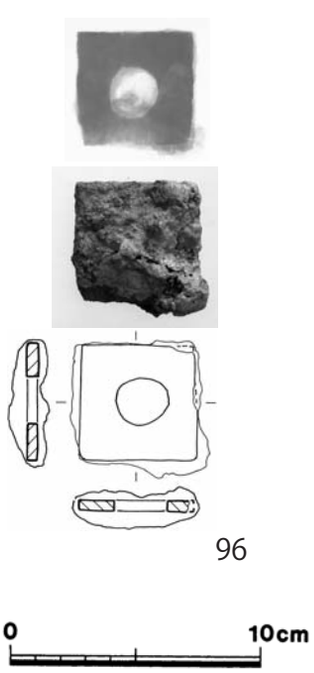
89

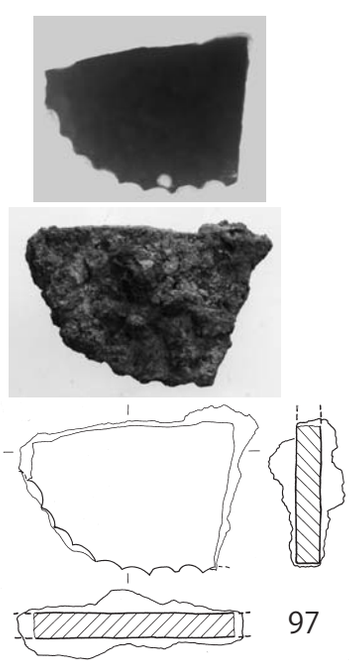
第 57 図　A区遺構に伴わない遺物⑫（88・89：1/4）

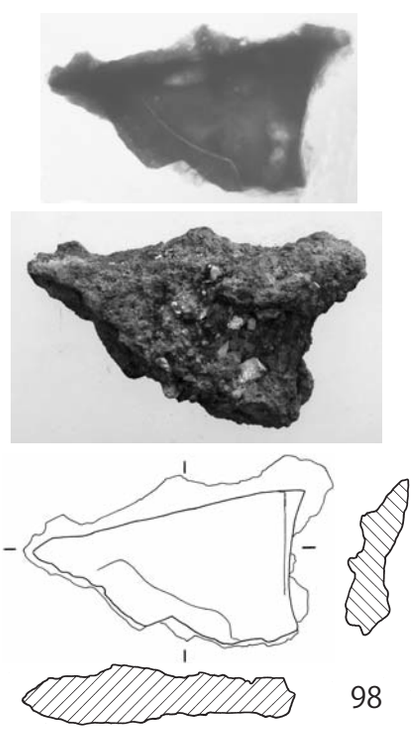




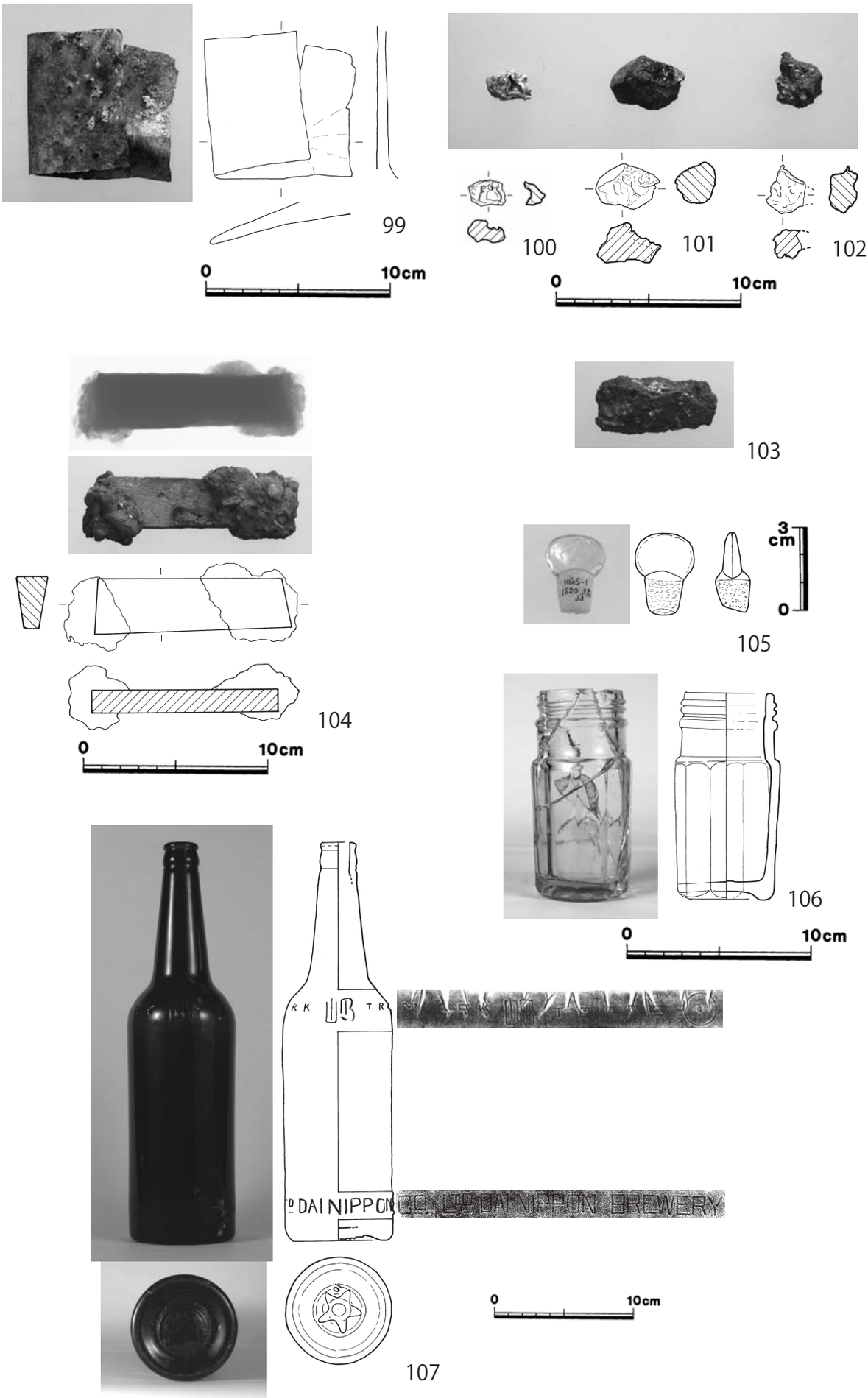




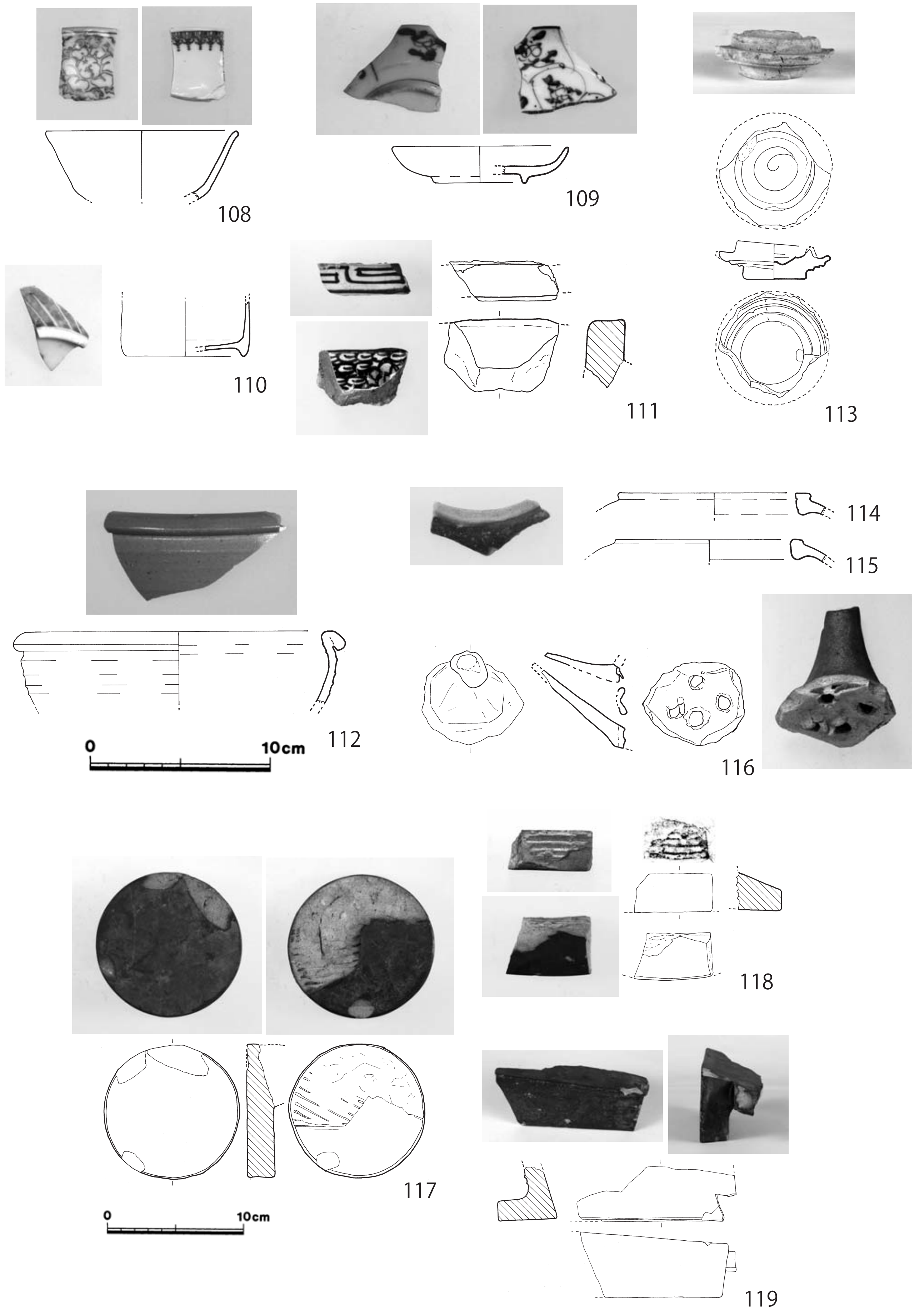




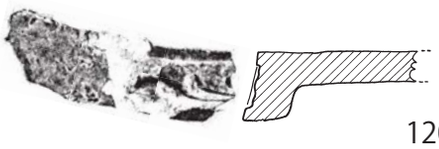
第 58 図　A 区遺構に伴わない遺物⑬（90 ～ 98：1/3）

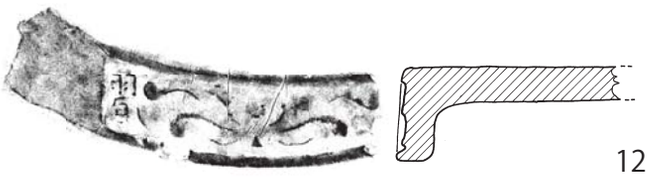


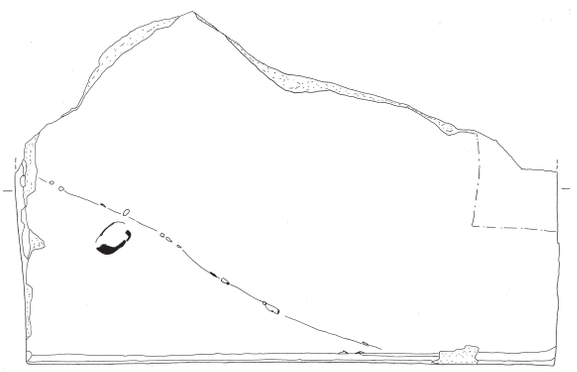
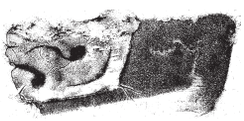
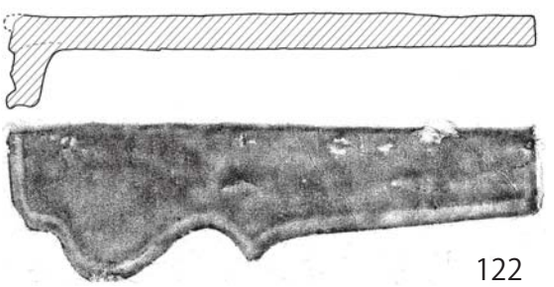
第 59 図　A 区遺構に伴わない遺物⑭（99 ～ 104・106：1/3、105：1/2、107:1/4）

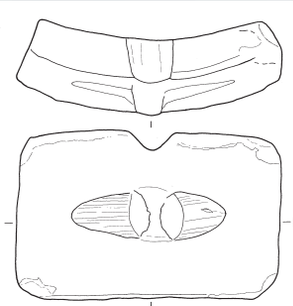


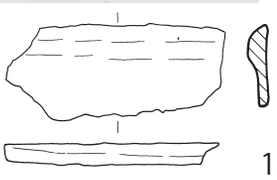
第 60 図　B 区遺構に伴わない遺物①（108 ～ 116：1/3、117 ～ 119：1/4）


120

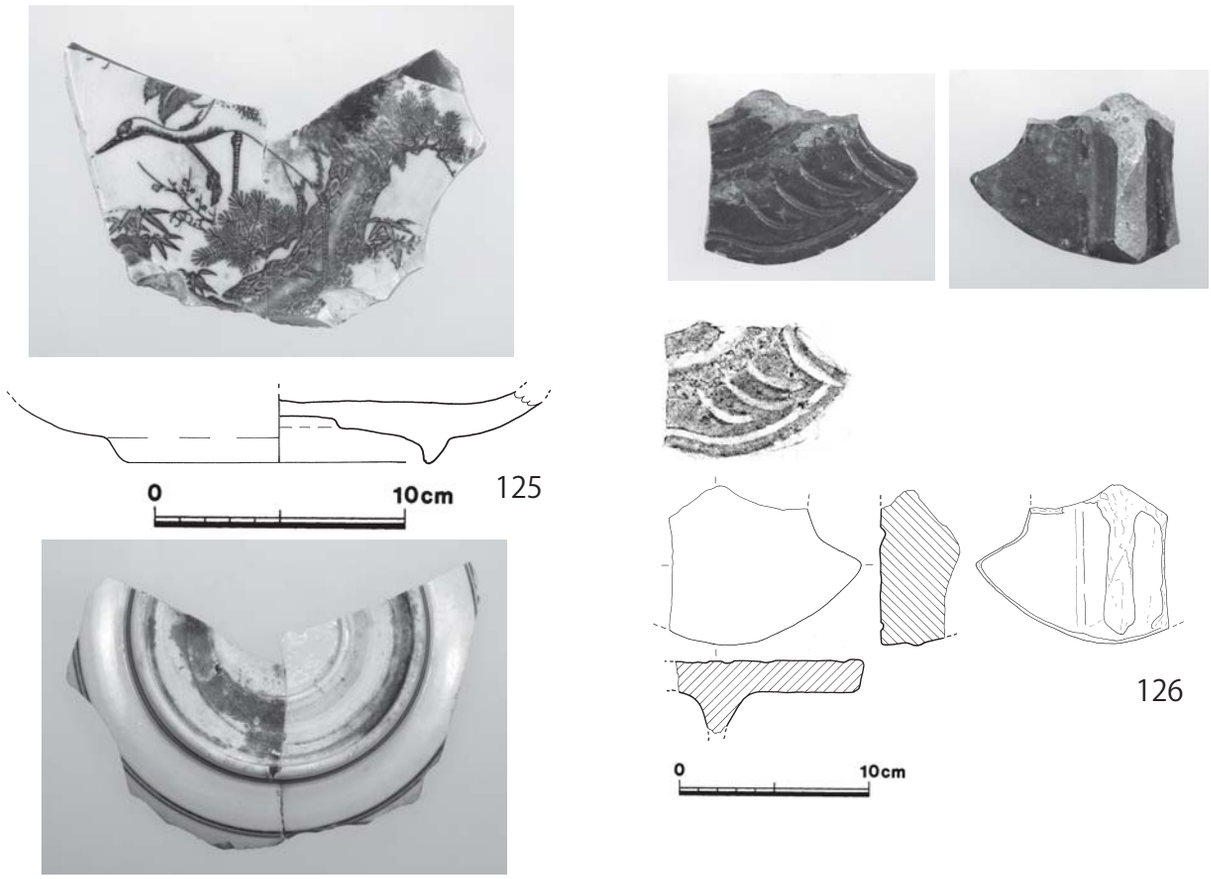

121




122




124
0 10cm
123
0 10cm

第 61 図　B 区遺構に伴わない遺物②（120 ～ 123：1/4、124：1/3）



第 62 図　A・B 区境石組水路の表採遺物（125：1/3、126：1/4）

器種と考えられるが、微妙な器形および焼成・色調などが異なっていることから別個体である可能性もあり、それぞれ図示した。116 は瓦質土器の土瓶注口部である。

燻瓦

117 は軒平瓦の小巴部かと推定される。瓦当面は無文で、裏面の剥離面には 7 条以上のヘラ描きと思われる沈線が残る。118 は軒平瓦の瓦当部である。瓦当面は無文であるが、下面は一文字ではなく弧を描く垂れがある。上面の剥離面には 4 条以上のヘラ描きと思われる沈線が残る。119 は刻袖瓦の尻部と推定される。

赤瓦（石州瓦）

120 ～ 122 は軒平瓦で、122 は特に袖垂れのある角瓦である。いずれも来待釉がかかるが、121・122 には光沢のある橙色系の来待釉が掛けられており、現代瓦である可能性が高い。121・122 は同時に用いられたセットと推定され、瓦当面左端に縦書きで「羽原」の陽刻文字が見られる。B 区調査区外の南側残地の表採資料であるが参考までに図示しておく。

土製品

123 は煙突の側蓋かと推定される焼物である。前面には削り出し後に貼り付けられたツマミがあり、上面には抉りが入る。内面には 9 条の凹線があり、ススが付着している。

金属製品

124 は不明の鉄製品である。扁平な鉄板の縁辺が肥厚する。

A・B 区境石組水路の表採遺物

125 は染付磁器の大皿。内面見込には松竹梅鶴文が描かれる。

126 は赤瓦の鬼瓦類の一部と推定される。

挿図番号	－	遺物番号	区(旧区)	出土地点・層位	種別	器種	法量(cm)（)は残存値、＜ >は推定値						重量(g)	胎土色／表面色	釉薬／絵付	技法など	備考
31	－	1	A	米蔵　基礎　石混じり土中(7f層)	染付磁器	碗	口径	－	底径	－	器高	(2.1)	－	灰白色	透明釉／染付		
31	－	2	A	米蔵　基礎　石混じり土中(7f層)	染付磁器	口縁	口径	－	底径	－	器高	(1.2)	－	灰白色	透明釉／染付		
31	－	3	A	米蔵　基礎　石混じり土中(7f層)	染付磁器	皿	口径	12.8	底径	6.4	器高	2.5	－	灰白色	透明釉／染付	蛇の目釉剥ぎ高台	
31	－	4	A	米蔵　北西隅　撹乱土中	土製品	煉瓦	長	23.3	幅	11.3	高	5.8	2,230	浅黄橙色(土師質)／にぶい黄橙色	－		裏面に線刻の人名「白□□米」あり。側面にモルタル付着。
32	－	5	A	SD1	陶器	皿	口径	9.6	底径	－	器高	(1.6)	－	灰白色	灰釉(外面下半は露胎)		須佐焼か
32	－	6	A	SD1	陶器	瓶の蓋	長	11.6	幅	11.2	高	5.6	459.2	灰白色／上:暗褐色～黒褐色、下:灰オリーブ色	上面および側面:鉄釉 下面およびネジ部:露胎	型押し成形	ネジ切り(約3周半回転)。上面には貫通しない2個1対の穴。
32	－	7	A	SD1	赤瓦	軒平桟瓦	長	(23.3)	幅	(27.8)	高	3.5	－	にぶい黄橙色／外釉:暗赤褐色	来待釉	表裏面に窯道具付着痕あり	
33	－	8	A	SD2	磁器	碗？	口径	9.6	底径	－	器高	(1.5)	－	灰白色	透明釉(染付なし)		
34	－	9	A	SD3	土師器	皿	口径	11.1	底径	－	器高	(1.0)	－	外内:黄灰色	－		焼成良好で堅緻
34	－	10	A	SD3	磁器	燗徳利	口径	－	底径	5.2	器高	不明	－	灰白色／上:灰白色、上下境:オリーブ灰色、下:暗赤褐色～黒色	外:(上)透明釉、(下)鉄釉、内:露胎、底部:露胎		実測の3破片は一部重なるが、接合しないため器高は不明
34	－	11	A	SD3	陶器	鉢	口径	－	底径	8.8	器高	(3.0)	－	にぶい褐色	透明釉か	目跡2ヶ所以上	
34	－	12	A	SD3	陶器	甕	口径	22.0	底径	－	器高	(3.7)	－	浅黄橙色／外釉:灰赤、内上:浅黄橙色、内下釉:橙色	外面:鉄釉、内面上半:露胎、下半:サビ釉	外面トビガンナ	
34	－	13	A	SD3	陶器	焜炉か	長	(13.8)	幅	(13.8)	高	(4.8)	－	にぶい橙色(土師質)／赤色+灰白色	外および上:サビ釉のち薬灰釉、内および底:露胎		薬灰釉は剥落著しい。
34	－	14	A	SD3	土師器	不明	長	1.6	幅	1.7	高	0.5	－	にぶい橙色(土師質)	(無釉)		ボタン状の貼付部
35	－	15	A	SD3	土師器	焜炉	口径	21.6	底径	24.2	器高	〈27.0〉	－	浅黄橙色(金雲母を少量含む)。一部赤褐色。	－	指頭圧痕による脚部貼り付けのための溝3条	扇形の線刻内に上段には「□業□[ ]」、下段には「[ ]」。2重の線刻内には「吉[ ]」の文字。脚部数は不明。外面上半にスス付着。
35	－	16	A	SD3	土師器	七輪さな	口径	〈17.0〉	底径	＜16.5＞	高	1.2	22.7	にぶい黄橙色(金雲母を少量含む)／にぶい黄橙色～赤橙色	－		穴の推定径約3.0cm。上面は風化し、スス付着。
35	－	17	A	SD3	土師器	七輪さな	口径	〈17.0〉	底径	＜16.5＞	高	0.9	19.0	にぶい橙色～灰黄褐色(金雲母を微量含む)／にぶい橙色～灰黄褐	－		穴の推定径約1.5cm。上面は風化し、スス付着。
36	－	18	A	SD3・SD1交点付近	燻瓦	なまこ瓦	長	(9.2)	幅	(12.0)	高	2.0	－	灰色／灰色	－	表:外周に沈線5条	釘穴あり
36	－	19	A	SD3	燻瓦	なまこ瓦	長	(10.9)	幅	(9.7)	高	2.0	－	灰白色／灰色	－	表:外周にクシ描き沈線4～5条	
36	－	20	A	SD3	燻瓦	なまこ瓦	長	(11.6)	幅	(8.4)	高	2.0	－	灰白色／灰色	－	表:外周に沈線3条	
36	－	21	A	SD3	石製品	砥石	長	(9.0)	幅	(5.0)	高	2.6	－	灰白色／表:灰白色、裏赤褐色	－	右側面には砥石製作時の切断痕の可能性がある段と多条の筋あり。	上面には顕著な擦痕。左側面および下面には平行する波状の凹凸あり。
36	－	22	A	SD3	金属製品	ノミ状製品	長	(4.7)	幅	2.0	高	0.8	10.95	銅製	－		
36	－	23	A	SD3	金属製品	錠	長	14.0	幅	7.0	高	2.0	473.9	鉄製	－		
37	－	24	B	SG1	金属製品	口金	長	4.0	幅	2.0	厚	0.3	14.4	銅製	－		
37	－	25	B	SG1	燻瓦	丸瓦	長	18.1	幅	11.5	高	5.4	－	灰白色／暗青灰色	－	裏:クシ描き沈線16条が2帯横位施文。	表面に刻印Ⅰa1類「京都大佛　増井貞造」のあり
37	－	26	B	SG1	赤瓦	桟瓦	長	27.8	幅	27.4	高	5.4	－	灰色～灰褐色／釉:にぶい赤褐色、露胎部:灰赤色～灰褐色	表:来待釉、裏:露胎		上層・下層モルタル間埋設時に破損していた穴の破片を接合復元
38	－	27	B	築山盛土東トレンチ排水土管(SD4)の上	染付磁器	碗	口径	－	底径	3.8	器高	(2.6)	－	灰白色／底部畳付:にぶい橙色	外内:透明釉、底部畳付:露胎／染付		
38	－	28	B	築山盛土表土	染付磁器	碗	口径	－	底径	－	器高	(1.6)	－	灰白色	透明釉／染付(型紙刷り、濃紺)		
38	－	29	B	築山盛土表土	土師器	口縁	口径	20.2	底径	－	器高	(2.3)	－	にぶい黄橙色／明赤褐色	サビ釉(内面は剥落が著しい)		
38	－	30	B	築山盛土表土	燻瓦	平瓦	長	(13.0)	幅	(15.2)	厚	1.8	－	灰白色／暗灰色	－	裏:9条のクシ描き沈線2帯以上が横位交差。	
39	－	31	B	SD4	燻瓦	丸瓦	長	21.9	幅	13.4	高	5.7	－	灰色／暗灰色	－	裏:クシ描き沈線11条が2帯横位施文。表面の玉縁部中央部には、製作時の痕跡と推定される段が残る。	表面に刻印Ⅰa3類「京都」「増井之印」あり
40	－	32	B	SD4	燻瓦	丸瓦	長	22.2	幅	13.3	高	6.2	－	灰色／暗灰色	－	裏:クシ描き沈線11条が2帯横位施文。表面の玉縁部中央部には、製作時の痕跡と推定される段が残る。	表面に刻印Ⅰa3類「京都」「増井之印」あり
41	－	33	B	SD4	燻瓦	丸瓦	長	22.3	幅	13.2	高	5.7	－	灰色／暗灰色	－	裏:クシ描き沈線11条が2帯横位施文。表面の玉縁部中央部には、製作時の痕跡と推定される段が残る。	表面に刻印Ⅰa3類「京都」「増井之印」あり
42	－	34	B	SD4	燻瓦	丸瓦	長	23.2	幅	12.8	高	5.6	－	灰白色／暗青灰色	－	裏:クシ描き沈線11条が2帯横位施文。表面の玉縁部中央部には、製作時の痕跡と推定される段が残る。	表面に刻印Ⅰa2類「京都大佛　増井製」あり
43	－	35	B	SD4	陶器	土管	口径	11.0	底径	－	器高	(14.8)	－	灰褐色／暗赤褐色	外:鉄釉、内端:鉄釉、内中:露胎	外:沈線8条	
43	－	36	B	SD4	陶器	土管	1本長	59.5	最大径	16.5	最小径	11.5	－	赤橙色／極暗赤褐色	外:鉄釉、内:鉄釉	外：布目痕。粘土板接合痕の段あり。	土管接合部にモルタル付着
44	－	37	B	SD5	陶器	土管	1本長	(59.5)	最大径	16.2	最小径	13.0	－	赤橙色／極暗赤褐色	外:鉄釉、内:鉄釉	外:布目痕。内外:粘土板接合痕の段あり。	土管接合部にモルタル付着
45	－	38	B	SD6	陶器	土管	1本長	49.3	最大径	13.5	最小径	10.5	－	淡黄色・橙色／釉:暗褐色・極暗赤褐色、露胎部:淡黄色	外:来待釉、内:来待釉、最大径側の端部:露胎		土管接合部にモルタル付着。接着の2個体では色調が異なる。

第１表　遺物観察表①

挿図番号	－	遺物番号	区（旧区）	出土地点・層位	種別	器種	法量(cm)（ ）は残存値、＜＞は推定値						重量(g)	胎土色／表面色	釉薬／絵付	技法など	備考
46	－	39	A	TR2（21ライントレンチ）	磁器	碗	口径	10.9	底径	－	器高	(4.0)	－	灰白色	透明釉／外内：染付（鮮明）		
46	－	40	A	表土等除去時採取（A区東半）	染付磁器	碗	口径	－	底径	4.0	器高	(3.5)	－	灰白色	透明釉、畳付のみ露胎／外：染付（鮮明）	内面見込に目跡5ヶ所	
46	－	41	A	表土等除去時採取（A区東端）	染付磁器	碗	口径	12.4	底径	5.0	器高	7.8	－	灰白色	透明釉、畳付のみ露胎／外内：染付（鮮明）		2片を復元実測
46	－	42	A	表土等除去時採取（A区西端）	磁器	猪口	口径	6.4	底径	－	器高	(3.0)	－	灰白色	透明釉／外：染付（鮮明）		
46	－	43	A	表土等除去時採取（A区西半）	染付磁器	湯飲？	口径	6.0	底径	－	器高	(4.5)	－	灰白色	透明釉／外：染付（濃紺）		
46	－	44	A	米蔵　北西隅　撹乱土中	陶器	土鍋	口径	12.7	底径	－	器高	(5.7)	－	浅黄橙色／釉：暗褐色、露胎部：にぶい黄褐色	外上部および内下部：鉄釉、外下部および内上部：露胎	外：トビガンナ	
46	－	45	A	S20、3層	陶器	こね鉢	口径	18.0	底径	－	器高	(5.1)	－	灰白色／外内：灰オリーブ色	外内：灰釉		
47	－	46	A	R21、3層	陶器	壷	口径	－	底径	22.7	器高	(31.3)	－	灰白色／外上：黄褐色、外下および内：灰白色	外上部：鉄釉（剥落著しい）、外下部：白濁釉、内：白濁釉、外底：露胎		
47	－	47	A	R21、3層	陶器	甕	口径	34.0	底径	－	器高	(7.5)	－	にぶい橙色（土師質、金雲母を少量含む）／外：暗青灰色	外：暗青灰色釉、口唇部および内：露胎		
47	－	48	A	S20、3層	陶器	甕	口径	－	底径	－	器高	(14.7)	－	橙色／外内：赤黒色	外内：鉄釉	内：青海波タタキ、ハケメ。粘土帯接合痕の段差あり。	胎土、焼成はB-SD4・5土管（36・37）に類似
48	－	49	A	R22、2層	陶器	土管	最大径	32.4	最小径	24.6	長	(25.0)	－	浅黄橙色～赤色／外：褐色～黒褐色、内：暗赤褐色	外内：鉄釉		土管接合部にモルタル付着
48	－	50	A	A区西辺拡張区	瓦質土器	甕	口径	－	底径	－	器高	(8.7)	－	灰白色／外：暗灰色、内：灰色（外面は光沢あり）	－	内：カキメ状の擦痕、回転ナデ	
48	－	51	A	R20、3層	瓦質土器	鉢	口径	－	底径	(25.3)	器高	(3.6)	－	外：灰白、内：灰色／外内：暗灰色（外面は光沢あり）	－		
49	－	52	A	R21、3層	赤瓦	軒平瓦	長	(12.2)	幅	(21.1)	高	4.4	－	赤橙色／暗赤褐色	来待釉		
49	－	53	A	表土等除去時採取（A区東半）	赤瓦	軒平瓦	長	(17.5)	幅	(19.8)	高	4.2	－	灰色／外：暗褐色、内：褐色	来待釉		
49	－	54	A	R22、2層	赤瓦	軒平瓦	長	(1.6)	幅	(6.7)	高	(3.0)	－	にぶい赤褐色／暗褐色	来待釉		
49	－	55	A	S20、3層	赤瓦	軒平瓦	長	(3.5)	幅	(9.5)	高	(4.2)	－	灰黄色／釉：灰褐色、露胎部：灰黄色	錆釉か		
49	－	56	A	R21、3層	赤瓦	桟瓦	長	26.4	幅	29.2	厚	2.3	－	灰色／表釉：暗赤褐色、露胎部：にぶい褐色	来待釉		表面釉薬に貫入多くあり
50	－	57	A	R21、3層	赤瓦	のし瓦	長	(22.6)	幅	(9.5)	厚	1.6	－	灰色～にぶい赤褐色／釉：暗赤褐色、露胎部：にぶい赤褐色	来待釉		穴に銅線残存
50	－	58	A	表土等除去時採取（A区東半）	赤瓦	のし瓦	長	(14.9)	幅	20.9	厚	2.4	－	にぶい橙色／外釉：黒褐色	来待釉		釘穴1個あり
50	－	59	A	A区西辺拡張区	赤瓦	丸瓦	長	(12.1)	幅	(11.2)	高	(3.5)	－	にぶい黄橙色／暗赤褐色	錆釉か		
51	－	60	A	表土等除去時採取（A区西端）	燻瓦	軒丸瓦	長	(13.1)	幅	(6.4)	高	(2.8)	－	灰白色／暗灰色	－		
51	－	61	A	S20、3層	燻瓦	軒丸瓦	長	(14.5)	幅	(6.7)	高	(2.8)	－	灰白色／暗灰色	－		
51	－	62	A	R22、2層	燻瓦	丸瓦	長	(8.5)	幅	10.7	高	5.1	－	灰白色／表：暗灰色、裏：灰色	－	裏：10条以上（欠損）のクシ描き沈線が横位施文。	外面に沈線1条あり
51	－	63	A	S20、3層	燻瓦	丸瓦	長	(7.8)	幅	(8.2)	厚	1.7	－	灰白色／暗灰色	－	裏：2条以上（欠損）のクシ描き沈線が横位施文か	表面に刻印Ⅱa1類「谷川瓦株式会社」「[ ](製造人か)□（荒か）井米吉」あり
51	－	64	A	表土等除去時採取（A区東端）	燻瓦	軒平瓦	長	(8.4)	幅	(9.4)	高	(3.7)	－	灰白色／暗灰色	－	接合面に15条以上のヘラ切り沈線あり	小巴部あり
52	－	65	A	R21、3層	燻瓦	軒平瓦	長	23.4	幅	(13.2)	高	4.2	－	灰白色／灰色	－	裏：15条のクシ描き沈線が3帯横位並行施文。	裏面に刻印Ⅰa4類「京都」「特製」あり。表面から開けられた釘穴1個と溝1条あり。
52	－	66	A	R21、3層	燻瓦	桟瓦	長	(9.1)	幅	(8.5)	厚	1.6	－	灰白色／暗灰色	－		
52	－	67	A	R21、3層	燻瓦	桟瓦	長	(11.2)	幅	(13.0)	厚	1.8	－	灰白色／暗灰色	－		
52	－	68	A	R21、3層	燻瓦	平瓦	長	(5.5)	幅	(4.6)	厚	1.8	－	灰白色／暗灰色	－	裏：9条以上（欠損）のクシ描き沈線が1帯横位施文。深く明瞭。	
52	－	69	A	米蔵　北西隅　撹乱土中	燻瓦	平瓦	長	(6.0)	幅	(12.0)	厚	1.8	－	灰白色／暗灰色	－	裏：11条以上（縁辺部にかかる）のクシ描き沈線が2帯横位施文	釘穴1ヶ所あり
52	－	70	A	R22、2層	燻瓦	平瓦	長	(14.0)	幅	(7.1)	厚	2.0	－	灰白色／暗灰色	－	裏：11条のクシ描き沈線が1帯横位施文	
52	－	71	A	A区西辺拡張区	燻瓦	平瓦	長	(7.6)	幅	(9.4)	厚	1.7	－	灰白色／暗灰色	－	裏：13条のクシ描き沈線が各2帯横位交差。	釘穴1ヶ所あり
53	－	72	A	R21、3層	燻瓦	のし瓦	長	(14.2)	幅	(11.1)	厚	1.9	－	灰白色／暗灰色	－	表：16条のクシ描き沈線が1帯縦位施文 裏：14条のクシ描き波状沈線が1帯縦位施文	
53	－	73	A	米蔵　北西隅　撹乱土中	燻瓦	のし瓦	長	(12.0)	幅	(11.3)	厚	2.0	－	灰白色／暗灰色	－	表：15条のクシ描き沈線が1帯縦位施文 裏：13条のクシ描き波状沈線が1帯縦位施文	
53	－	74	A	表土等除去時採取（A区東半）	燻瓦	のし瓦	長	(19.5)	幅	17.4	厚	2.5	－	灰白色／灰色	－	表：14条のクシ描き沈線が2帯縦位並行。裏：11条のクシ描き沈線が2帯縦位交差。	

第２表　遺物観察表②

挿図番号	－	遺物番号	区(旧区)	出土地点・層位	種別	器種	法量(cm)（ ）は残存値、＜＞は推定値						重量(g)	胎土色／表面色	釉薬／絵付	技法など	備考
54	－	75	A	米蔵　北西隅　撹乱土中	燻瓦	のし瓦	長	(11.4)	幅	(12.3)	厚	2.1	－	灰白色／暗灰色	－	表:13条のクシ描き沈線が1帯縦位施文(細かい) 裏:10条のクシ描き波状沈線が1帯縦位施文(荒い)	小口面に刻印Ⅰa2類(？)「京都大佛」「增井[　](製か)」あり
54	－	76	A	R21、3層	燻瓦	のし瓦	長	(13.2)	幅	(13.5)	厚	1.9	－	灰白色／暗灰色	－	表:13条のクシ描き沈線が1帯縦位施文 裏:10条のクシ描き波状沈線が1帯縦位施文	
54	－	77	A	R21、3層	燻瓦	のし瓦	長	(8.4)	幅	(8.6)	厚	1.6	－	灰白色／暗灰色	－	表:12条のクシ描き波状沈線が1帯縦位施文 裏:12条のクシ描き波状沈線が1帯縦位施文	小口面に刻印Ⅰa5類「京都□製」あり
54	－	78	A	R21、3層	燻瓦	のし瓦	長	(14.3)	幅	(6.5)	厚	2.2	－	灰白色／暗灰色	－	裏:7条以上(欠損)のクシ描き沈線が1帯縦位施文。深く明瞭。	
55	－	79	A	R21、3層	燻瓦	のし瓦	長	(12.4)	幅	(12.4)	厚	2.0	－	灰白色／暗灰色	－	裏:6条のクシ描き波状沈線が1帯縦位施文	小口面に刻印Ⅱa3類あり。表裏面に漆喰付着
55	－	80	A	R22、2層	燻瓦	のし瓦	長	(9.7)	幅	(11.1)	厚	2.0	－	灰白色／暗灰色	－	裏:5条のクシ描き波状沈線が1帯縦位施文	釘穴1ヶ所あり(焼成後穿孔)
55	－	81	A	R22、2層	燻瓦	のし瓦	長	(8.2)	幅	(9.6)	厚	1.2	－	灰白色／暗灰色	－	裏:5条のクシ描き沈線が2帯縦位交差。他に1帯以上、縦位施文あり。	小口面に刻印Ⅱa2類あり。全面に漆喰痕あり。
56	－	82	A	R21、3層	燻瓦	平瓦	長	(6.5)	幅	(6.6)	厚	2.0	－	灰白色／暗灰色	－		
56	－	83	A	A区西辺拡張区	燻瓦	平瓦？	長	(8.7)	幅	(6.2)	厚	1.5	－	灰白色／暗灰色	－		裏面に焼成後の刻名「三浦」あり
56	－	84	A	R20、3層	燻瓦	なまこ瓦	長	(16.0)	幅	(14.3)	高	2.5	－	灰白色／暗灰色	－	表:外周に3条のヘラ切り沈線	外周沈線部に面取り
56	－	85	A	R21、3層	燻瓦	なまこ瓦	長	(10.1)	幅	(5.1)	厚	2.0	－	灰白色／灰色	－	表:外周に2条のヘラ切り沈線	
56	－	86	A	表土等除去時採取(A区東半)	燻瓦	桟瓦？	長	(15.0)	幅	(12.0)	高	3.8	－	灰白色／灰色	－		裏面に刻印Ⅱb1類あり
56	－	87	A	TR1(20ライントレンチ)	燻瓦	雁振瓦	長	(6.4)	幅	(5.4)	高	(2.5)	－	灰白色／暗灰色	－	裏面(接合面)に7条以上のヘラ切り沈線あり	
57	－	88	A	A区西辺拡張区	土製品	煉瓦	長	23.0	幅	11.0	高	6.1	2,670	灰白色(0.5mmの粒状で荒い。土師質ではなく磁質)／にぶい橙色	－		「三石耐火加藤合資会社」の刻印あり。一部モルタル付着あり。風化のため脆い。
57	－	89	A	表土等除去時採取(A区西半)	煉瓦	カラミ煉瓦	長	(15.5)	幅	24.0	高	13.7	－	暗青灰色／赤黒色	－	外側面の上下中間位に段差が廻る。断面上部には2層の空洞があり、空洞下面には扁平な粒状溶解物(径約3～9mm、厚さ約2～4mm)が固着している。	一部にモルタル・砂利(～2cm)付着
58	－	90	A	R21、3層	金属製品	カスガイ	長	18.0	幅	3.0	径	0.65	39.6	鉄製	－		
58	－	91	A	R21、3層	金属製品	カスガイ	長	9.5	幅	3.0	径	0.6～1.0	26.3	鉄製	－		
58	－	92	A	R21、3層	金属製品	カスガイ	長	8.0	幅	2.5	径	0.6～0.8	22.2	鉄製	－		
58	－	93	A	R21、3層	金属製品	カスガイ	長	5.0	幅	3.5	径	0.6	24.5	鉄製	－		
58	－	94	A	R21、3層	金属製品	クサビ状製品	長	16.6	幅	1.5	厚	0.5	91.0	鉄製	－		
58	－	95	A	S20、3層	金属製品	縦樋受金具？	長	10.5	幅	8.0	高	3.7	240.0	鉄製	－		先端環状部に目釘状のもの残存
58	－	96	A	R21、3層	金属製品	座金	長	5.0	幅	5.0	厚	0.5	69.4	鉄製	－		円形穴径約2.0cm
58	－	97	A	R21、3層	金属製品	歯車	長	(9.0)	幅	(6.0)	厚	1.0	245.4	鉄製			
58	－	98	A	R21、3層	金属製品	不明遺物	長	(11.0)	幅	(7.0)	厚	2.3	260.7	鉄製		2種の金属で鋳造か	
59	－	99	A	R21、3層	金属製品	銅板	長	13.0	幅	7.0	厚	0.04	17.5	銅製(緑青色)			折れ曲がりあり
59	－	100	A	S20、3層	金属製品	銅滴	長	2.0	幅	1.4	厚	1.2	3.93	銅製(緑青色)			
59	－	101	A	R21、3層	金属製品	ガラス質溶解物	長	3.5	幅	2.5	厚	2.0	17.98	黒色			石に付着
59	－	102	A	R21、3層	金属製品	ガラス質溶解物	長	(2.0)	幅	2.5	厚	1.5	3.48	にぶい赤色～暗灰色			気泡を多く含む
59	－	103	A	R22、2層	自然遺物	自然石	長	5.5	幅	2.5	厚	1.5	46.68	にぶい黄褐色			鉄鉱石の一種か
59	－	104	A	A区西辺拡張区	石製品	不明遺物	石長	9.9～10.7	石幅	2.7～3.0	石厚	0.8～1.7	292.1	砂岩製？			石の両端に鉄が錆着
59	－	105	A	S20、3層	ガラス製品	蓋	長	2.9	幅	2.1	厚	1.2	5.45	ガラス製(薄緑色)			
59	－	106	A	S20、3層	ガラス製品	瓶	口径	4.8	底径	5.0	器高	11.1	194.1	ガラス製(透明)			10角形
59	－	107	A	R21、3層	ガラス製品	ビール瓶	口径	2.6	底径	7.0	器高	28.7	687.6	ガラス製(黒褐色)	－		外面に「TRADE」「MARK」「DAINIPPON BREWERY CO., LTD.」の陽刻文字あり。底面に星印と「6」「10」の陽刻文字あり。
60	－	108	B	S19、1層	染付磁器	碗	口径	10.8	底径	－	器高	(3.8)	－	灰白色	透明釉／染付		
60	－	109	B	S19、1層	染付磁器	皿	口径	9.8	底径	5.0	器高	2.0	－	灰白色	透明釉／染付		
60	－	110	B	B区東半、4層	染付磁器	猪口	口径	－	底径	6.6	器高	(3.0)	－	灰白色	透明釉／外:染付		
60	－	111	B	表土等除去時採取(B区一括)	染付磁器	便器	長	(6.3)	幅	(4.0)	高	(2.1)	－	灰～灰白色	透明釉／染付		
60	－	112	B	B区南東辺(石組水路土手)表土	陶器	鉢	口径	18.4	底径	－	器高	(4.0)	－	浅黄色／にぶい黄色	灰釉		
60	－	113	B	B区南東辺(石組水路土手)表土	土師器	灯明受皿	口径	4.0	底径	3.5	器高	2.2	－	浅黄橙色	－		
60	－	114	B	S19、1層	瓦質土器	壷	口径	10.5	底径	－	器高	(1.2)	－	外:灰白色、内:にぶい黄橙色			115と同一個体の可能性あり。シャープな作り。
60	－	115	B	S19、1層	瓦質土器	壷	口径	10.5	底径	－	器高	(1.5)	－	外:灰色、内:にぶい黄橙色			114と同一個体の可能性あり。にぶい作り。
60	－	116	B	B区南東辺(石組水路土手)表土	瓦質土器	土瓶	口径	－	底径	－	器高	(5.2)	－	灰白色／暗灰色			
60	－	117	B	B区南東辺(石組水路土手)表土	燻瓦	軒平瓦	長	(2.0)	幅	10.1	高	9.8	－	灰白色／暗灰色	－	接合面に7条以上のヘラ切り沈線あり	小巴部あり
60	－	118	B	B区西半、3a層	燻瓦	軒平瓦	長	(2.6)	幅	(5.8)	高	(3.3)	－	灰白色／外:暗灰色、内:灰色		接合面に5条以上のヘラ切り沈線あり	
60	－	119	B	S19、1層	燻瓦	袖瓦	長	(11.5)	幅	(4.5)	高	(4.9)	－	灰白色／暗灰色			
61	－	120	B	S19、1層	赤瓦	軒平瓦	長	(9.1)	幅	(12.5)	高	3.7	－	外周部:灰色、中央部:にぶい橙色／釉:暗赤褐色、露胎部:にぶい赤褐色	来待釉		
61	－	121	B	築山付近表採	赤瓦	軒平瓦	長		幅		高	5.0	－	灰黄色／褐色	来待釉		瓦当面左端に「羽原」？の陽刻文字あり。122と同一セットか。
61	－	122	B	築山付近表採	赤瓦	軒平袖瓦	長	28.8	幅	(18.6)	高	4.8	－	浅黄橙色／褐色	来待釉		裏面に墨書あり。文字不明。121と同一セットか。
61	－	123	B	B区西半、3a層	土製品	蓋	長	9.0	幅	14.0	高	3.8	518.4	にぶい橙色	－	裏面9条の凹線	裏面スス付着。煙突の蓋か。
61	－	124	B	B区西半、3a層	金属製品	鉄板	長	(8.5)	幅	(3.5)	高	0.8	90.7	鉄製			一縁辺が厚く盛り上がる
62	－	125	－	AB区境の石組水路底表採	染付磁器	皿	口径	－	底径	12.0	器高	(2.8)	－	灰白色	透明釉／染付	蛇の目釉剥ぎ高台	
62	－	126	－	AB区境の石組水路底表採	赤瓦	鬼瓦？	長	(8.4)	幅	(10.2)	高	(4.2)	－	灰黄色／暗褐色	来待釉		

第３表　遺物観察表③

第４章　総括

遺構について

Ａ区は東端の米蔵跡と、西半の営繕場跡の調査である。

米蔵跡の調査では、全面の清掃調査と北西端の撹乱部の発掘をおこなった。清掃調査の結果、米蔵跡の外周には基礎石が廻り、その上に煉瓦敷遺構が遺存していた。煉瓦敷遺構は当時の米蔵の床面であり、通有のいわゆるタタキではなく極めて特殊な構造である。その地下構造は、地面を掘り込んだ後に、下層に割石を多く含んだ土を埋め、上層に割石をあまり含まない土を造成して、その上にモルタルを敷いて煉瓦を固定していることが明らかとなった。

営繕場跡の調査では、東端で敷地を区画する石積みと柱穴列の間にタタキ（土間）が検出された。その上部には漆喰と見られる白色物質が厚く堆積していた。この付近は、営繕場のうち左官の仕事場があったと伝えられている部分に相当しており、漆喰の検出は伝聞を裏付ける発掘成果となった。また、トレンチ調査の結果、当時の生活面の下には石組暗渠が存在していたことが明らかとなった。

検出した遺構の主軸は２方向に大別される。一つは「米蔵」とほぼ同じ主軸を有すると考えられるもので、Ａ区東端の SD7・SV1 がこれに当たる。もう一つは SA1、SD1 ～３などＡ区の大半の遺構がこれに該当し、この主軸が「営繕場」の主軸であったと推定される。

Ｂ区は堀氏「家作」跡の調査である。調査区南端で池庭と導水・排水施設が検出された。本発掘調査時には池庭の北半の石組と立石は失われていたが、南半の石組はほぼ当初の形状を保った状態であった。導水施設は作庭当初の遺構と推定され、燻瓦の丸瓦を合わせ口にしてつないだ特徴的な遺構であった。この丸瓦には、「京都」「増井之印」という刻印が見られた。この導水施設は後の改変を受け、池の下の土管を通ってそのまま排水される仕組みとなっていた。聞取調査では、節を抜いた孟宗竹の樋を用い、裏の谷水を「使い水」（生活用水）としていたとのことであり、最終段階での池庭への導水は、この「使い水」を分けていた可能性があると考えられる。なお、遺構面造成土の下には水田耕作土・床土状の堆積土が確認でき、堀氏家作建築以前には水田があったと推定される。

Ａ・Ｂ区の間にある石組水路については、暗渠や排水口が石積面中に確認された。これらの暗渠・排水口は調査区内の暗渠・土管に続いており、造成土中に埋め込まれた状態で検出された。このことから、石組水路はＡ・Ｂ区の遺構面造成時に合わせて構築されたと考えられる。

遺物について

今回の調査では赤瓦とともに燻瓦が多く出土している（第４表）。総計での割合は、赤瓦 65％に対し、燻瓦 35％であった。燻瓦は特にＢ区遺構内で高い比率を示しており、Ｂ区ＳＤ４が燻瓦の丸瓦を多用した特殊な遺構であることが分かる。江戸時代後期以降、地元では耐久性の高い石州赤瓦があるため、この時期以降の一般的な遺跡から出土する瓦の大半は赤瓦である。今回調査した遺跡の主要な時期と推定されるのは、明治から昭和前半にかけての近代である。今のところ、近代遺跡での瓦の出土比率を示す比較データは持ち合わせていないが、現存する幕末から昭和前半の建物瓦の大半が赤瓦であることを参考にすると、今調査での燻瓦の出土割合は極めて高いと言える。

ところで、瓦には刻印を有するものがあり、その刻印瓦は全て燻瓦である。刻印には「京都」「泉州」という文字があり、地元に石州赤瓦があるにもかかわらず、あえて関西地方から燻瓦が搬入されていたことが明らかになった。今調査出土の燻瓦の刻印については以下のように分類したい。

まず、刻印の大半には産地が記されていることから、これを大分類の基準とした。Ⅰ類は「京都」の文字を有する刻印とした。Ⅰ類には、「京都」の文字以外に「大佛」「増井」の文字が見られるが、これらが同一刻印中に確認される例があること（34）から、これらのいずれかの文字があればⅠ類とした。Ⅱ類は「泉州」の文字を有する刻印とした。Ⅱ類には「泉州」の文字が記載されていない刻印もあるが、同一刻印中に「泉州」「谷川」「辻」の文字が確認される例があること（81）から、これらいずれかの文字があればⅡ類とした。

中分類は地域または窯を示す文字・文様等による分類とした。Ⅰ類は同一窯の製品のみの可能性が高いと考えられたため、中分類は行なわずａ類のみとした。一方、Ⅱ類の中には２種類の登録商標と見られるマークを有するものがあり、別窯である可能性が考えられたため、ａ・ｂ類を設けた。Ⅱａ類は 14 弁の菊花文を有し、「谷川」または「辻」の文字を伴う一群とした。Ⅱｂ類は丸の中に「三」で外周に２本の矢が廻る一群であり、「泉□（州か）」以外の文字は不明である。

	燻瓦									赤瓦										
	桟	平	軒平	平他	丸	軒丸	丸他	飾瓦	不明	桟	平	軒平	平他	丸	軒丸	丸他	飾瓦	不明	現代	
A区遺構内	0	3	0	10	0	0	0	0	0	8	10	2	1	0	0	0	0	0	0	
	0%	9%	0%	29%	0%	0%	0%	0%	0%	24%	29%	6%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	34
	13				0			0	0	21				0			0	0	0	
	38%				0%			0%	0%	62%				0%			0%	0%	0%	
	13									21										100%
	38%									62%										
A区遺構外	10	55	5	45	18	1	1	1	8	69	180	12	47	8	0	0	0	11	17	
	2%	11%	1%	9%	4%	0%	0%	0%	2%	14%	37%	2%	10%	2%	0%	0%	0%	2%	3%	488
	115				20			1	8	308				8			0	11	17	
	24%				4%			0%	2%	63%				2%			0%	2%	3%	
	144									344										100%
	30%									70%										
A区　計	10	58	5	55	18	1	1	1	8	77	190	14	48	8	0	0	0	11	17	
	2%	11%	1%	11%	3%	0%	0%	0%	2%	15%	36%	3%	9%	2%	0%	0%	0%	2%	3%	522
	128				20			1	8	329				8			0	11	17	
	25%				4%			0%	2%	63%				2%			0%	2%	3%	
	157									365										100%
	30%									70%										
B区遺構内	0	2	0	1	41	0	0	0	0	1	5	1	3	0	0	1	0	0	0	
	0%	4%	0%	2%	75%	0%	0%	0%	0%	2%	9%	2%	5%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	55
	3				41			0	0	10				1			0	0	0	
	5%				75%			0%	0%	18%				2%			0%	0%	0%	
	44									11										100%
	80%									20%										
B区遺構外	1	14	1	2	73	1	0	0	10	23	97	10	5	5	0	2	0	7	39	
	0%	5%	0%	1%	25%	0%	0%	0%	3%	8%	33%	3%	2%	2%	0%	1%	0%	2%	13%	290
	18				74			0	10	135				7			0	7	39	
	6%				26%			0%	3%	47%				2%			0%	2%	13%	
	102									188										100%
	35%									65%										
B区　計	1	16	1	3	114	1	0	0	10	24	102	11	8	5	0	3	0	7	39	
	0%	5%	0%	1%	33%	0%	0%	0%	3%	7%	30%	3%	2%	1%	0%	1%	0%	2%	11%	345
	21				115			0	10	145				8			0	7	39	
	6%				33%			0%	3%	42%				2%			0%	2%	11%	
	146									199										100%
	42%									58%										
A･B区周辺表採	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
	0%	0%	0%	0%	50%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	50%	0%	0%	100%
総計	11	74	6	58	133	2	1	1	18	101	292	25	56	13	0	3	1	18	56	
	1%	9%	1%	7%	15%	0%	0%	0%	2%	12%	34%	3%	6%	1%	0%	0%	0%	2%	6%	869
	149				136			1	18	474				16			1	18	56	
	17%				16%			0%	2%	55%				2%			0%	2%	6%	
	304									565										100%
	35%									65%										

（上段）破片数。ただしB区SD4等の遺構内遺物については割れ方の個体差が大きいため、1個体1点とした。
（下段）割合

「平」には桟瓦・軒平瓦等の破片が含まれている場合もある。
「丸」には軒丸瓦等の破片が含まれている場合もある。
「平他」は熨斗瓦、海鼠瓦等とした。「丸他」は雁振瓦等とした。
「現代」は来待釉のかかる赤瓦のうち、光沢のある橙色の瓦とした。

第４表　燻瓦・赤瓦集計表

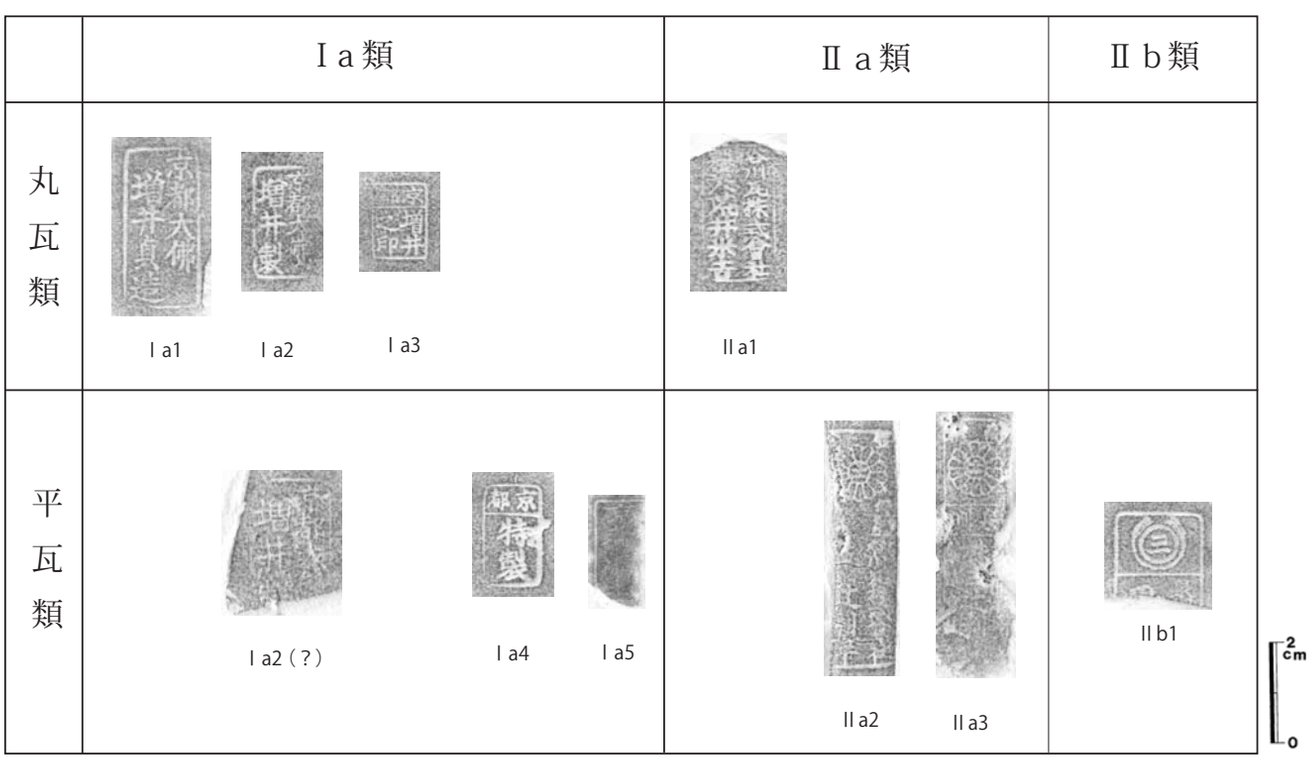
最後に小分類として、文字の組み合わせ・方向、刻印の大きさなど刻印そのものの違いによって細分し、アラビア数字を最後に付した。

これにより、大分類はⅠ・Ⅱ類の２種類、中分類はⅠａ類、Ⅱａ・ｂの３種類、小分類はⅠａ１～５類、Ⅱａ１～３類、Ⅱｂ１類の計９種類となった。（第５表）

刻印瓦の出土点数は第６～ 10 表のとおりである。Ｂ区ＳＤ４は、Ⅰ類のみで構成されており、その大半はⅠ a3 類である。Ｂ区ＳＤ４以外の丸瓦類はⅡ類が１点のみで、その他はⅠ類が 10 点、不明が１点である。Ｂ区ＳＤ４の出土状況がまとまっていることもあるが、丸瓦全体としてはⅠ類がほとんどであった。平瓦類ではⅠ類３点、Ⅱａ類２点、Ⅱｂ類１点であり、丸瓦類に比較するとⅡ類の比率が高い傾向にあった。刻印瓦全体ではⅠ類 88％、Ⅱ類８％となり、京都産が多く、泉州産が少ない結果となったが、これはＢ区ＳＤ４の出土数が影響を与えていると考えられる。

ところで、燻瓦は「旧堀氏庭園」の客殿「楽山荘」とその庭園周辺、および「下の蔵」などに葺かれている。今回、目視できる範囲で確認をおこなったところ、「楽山荘」庭園周囲の土塀にⅠ a1 類・Ⅱ a2 類の刻印が押された雁振瓦が用いられていることが明らかとなった。また、「下の蔵」の北側に接する「楽山荘」裏門の軒瓦にも菊花文のある刻印が確認でき、Ⅱａ類の可能性が高いと推定される。「楽山荘」や「下の蔵」といった屋根に葺かれている瓦の刻印の有無は不明であるものの、少なくとも今回の発掘調査で出土した刻印と同様の刻印が「楽山荘」庭園周辺の瓦で確認されたことになる。「楽山荘」は明治 30 年上棟、同 33 年竣工であり、この時期に「楽山荘」庭園周辺で使用する燻瓦が大量に搬入されたことが想定される。

今回の本発掘調査、およびそれに先立つ試掘確認調査で、堀氏本家の「楽山荘」庭園周辺以外の場所で関西地方産の燻瓦が出土したこととなった。聞き取り調査による限りでは、調査地に存在していた米蔵・営繕場・家作は、大正時代末以降には少なくとも建て替えられておらず、赤瓦であったとのことであることから、燻瓦はこれらの建物の屋根瓦としては利用されていないと考



拓本スケール（2/3）

第５表　燻瓦刻印分類表

えられる。発掘調査では、池庭への導水施設（Ｂ区ＳＤ４）として利用されており、土管によって排水施設が設けられる前の状況を示していると考えられる。Ａ区は米蔵・営繕場といった堀氏本家の経営に関わる施設であり、Ｂ区は堀氏本家の家作跡で「楽山荘」以前にあったとされる「盤楽亭」を移築した場所であるとも言われている。家作に住んでいた人物の一人である堀千代子氏は堀家第 15 代藤十郎の娘で、ここに晩年隠居していたという。Ａ・Ｂ区いずれとも堀氏本家とは無縁の場所ではなかったことが、「楽山荘」庭園付近で多用された燻瓦と同様の瓦が出土した背景にあると思われるが、当時の使用状況等は不明な点が多い。

その他の遺物として、Ａ区ＳＤ１から出土した陶器製の蓋がある。これは「小野田皿山」（現在の山口県山陽小野田市）の硫酸瓶の蓋と推定され、明治 26 年～昭和 30 年前後まで生産された器種である。この遺物が営繕場地下の集石列（ＳＤ１）から出土したこと、および聞き取り調査から大正末年には既に営繕場が存在していたということから、営繕場の造成年代は少なくとも明治 26 年を遡らず、大正末年以前の年代、すなわち明治後半から大正年間のいずれかの年代ということになると思われる。なお、「小野田皿山」では島根県の来待石の粉を使用して来待釉のかかった製品を生産し、船便で大量に販売していることから、来待釉製品が全て石見焼とはならないことを再認識しておきたい。

分類	刻印方向	瓦種	刻印場所	点数	出土場所	備考
Ⅰa1	上	丸瓦	凸面	1	B区SG1	楽山荘庭園土塀に同様の刻印の雁振瓦あり
Ⅰa2	上	丸瓦	凸面	1	B区包含層	熨斗瓦にも同様の刻印あり
Ⅰa3	上	丸瓦	凸面	4	B区包含層	
Ⅰa3	上または下	丸瓦	凸面	4	B区包含層	
Ⅱa1	上または下	丸瓦	凸面	1	A区包含層	
刻印分類不明	不明	丸瓦	凸面	1	B区包含層	
計				12		

※刻印方向は、丸瓦の玉縁部を上にした場合に、刻印文字の頭文字を読み始める位置を記したものである。（以下同じ）

第６表　刻印瓦集計表（丸瓦類（Ｂ区ＳＤ４を除く））

Ｂ区ＳＤ４（上半）

分類	刻印方向	瓦種	刻印場所	点数			備考
Ⅰa2	上	丸瓦	凸面	1	1	1	
Ⅰa3	上	丸瓦	凸面	8	11	13	
Ⅰa3？		丸瓦	凸面	3			
Ⅰa3	下	丸瓦	凸面	1	2		
Ⅰa3？		丸瓦	凸面	1			
刻印分類不明	上	丸瓦	凸面	1	1	1	他に欠損のため刻印有無不明の丸瓦が1点あり
計				15			

Ｂ区ＳＤ４（下半）

分類	刻印方向	瓦種	刻印場所	点数		備考
Ⅰa2	上	丸瓦	凸面	1	1	
Ⅰa3	上	丸瓦	凸面	17	20	
	右	丸瓦	凸面	1		
	下	丸瓦	凸面	2		
計				21		

Ｂ区ＳＤ４（合計）

分類	刻印方向	瓦種	刻印場所	点数			備考
Ⅰa2	上	丸瓦	凸面	2	2	2	
Ⅰa3	上	丸瓦	凸面	25	28	33	
Ⅰa3？		丸瓦	凸面	3			
Ⅰa3	右	丸瓦	凸面	1	1		
Ⅰa3	下	丸瓦	凸面	3	4		
Ⅰa3？		丸瓦	凸面	1			
刻印分類不明	上	丸瓦	凸面	1	1	1	他に欠損のため刻印有無不明の丸瓦が1点あり
計				36			

第７表　刻印瓦集計表（丸瓦類（Ｂ区ＳＤ４））

このほかに、明らかな他産地の製品としてはA区西側拡張区出土の耐火煉瓦（88）がある。この煉瓦には「三石耐火加藤合資会社」の刻印があり、現在の岡山県備前市三石の製品であることが分かる。この煉瓦は、米蔵跡の床に敷かれている土師質のいわゆる赤煉瓦とは異なり、荒い粒状をした磁質のいわゆる白煉瓦である。名称からも明らかなように耐火に優れた製品であり、営繕場の鍛冶屋等で利用された製品であったかと思われる。

（参考文献）
1．津和野町教育委員会 2005『旧堀氏庭園調査報告書』
2．澄川正爾「畑迫堀家略史」（内藤正中・森澄泰文編 1988『津和野郷土誌』松江文庫８に再々掲）
3．畑迫公民館 1953『畑迫』
4．沖本常吉 1968『堀家史料目録一』
5．岩谷建三 1978『近代の津和野』
6．坪井利弘 1976『日本の瓦屋根』
7．小野田市歴史民俗資料館 1994『小野田の窯業　皿山・その変遷』
8．竹内清和 1990『耐火煉瓦の歴史―セラミックス史の一断面―』

分類	刻印方向	瓦種	刻印場所	点数			割合（%）	備考
Ⅰa1	上	丸瓦	凸面	1			2%	
Ⅰa2	上	丸瓦	凸面	3			6%	
Ⅰa3	上	丸瓦	凸面	29	32	41	86%	
Ⅰa3？		丸瓦	凸面	3				
Ⅰa3	右	丸瓦	凸面	1	1			
Ⅰa3	下	丸瓦	凸面	3	4			
Ⅰa3？		丸瓦	凸面	1				
Ⅰa3	上または下	丸瓦	凸面	4	4			
Ⅱa1	上または下	丸瓦	凸面	1			2%	
刻印分類不明	不明	丸瓦	凸面	2			4%	
計				48			100%	

第８表　刻印瓦集計表（丸瓦類合計）

分類	瓦種	刻印場所	点数	出土場所	備考
Ⅰa2	熨斗瓦	小口	1	米蔵跡北西隅の撹乱土中	丸瓦にも同様の刻印あり
Ⅰa4	軒平瓦	裏	1	R21グリッド3層	
Ⅰa5	熨斗瓦	小口	1	R21グリッド3層	
Ⅱa2	熨斗瓦	小口	1	R22グリッド2層	試掘確認調査で1点出土 楽山荘庭園土塀に同様の刻印の雁振瓦あり
Ⅱa3	熨斗瓦	小口	1	R21グリッド3層	
Ⅱb1	桟瓦？	裏？	1	A区東半表土除去工事時採取	
計			6		

第９表　刻印瓦集計表（平瓦類合計）

分類			刻印方向	瓦種	刻印場所	点数			割合（%）			備考
Ⅰ	Ⅰa	Ⅰa1	上	丸瓦	凸面	1			2%	88%	88%	楽山荘庭園土塀に同様の刻印の雁振瓦あり
		Ⅰa2	上	丸瓦	凸面	3			7%			
			－	熨斗瓦	小口	1						
		Ⅰa3	上	丸瓦	凸面	29	32	41	75%			
				丸瓦	凸面	3						
			右	丸瓦	凸面	1	1					
			下	丸瓦	凸面	3	4					
				丸瓦	凸面	1						
			上または下	丸瓦	凸面	4	4					
		Ⅰa4	－	軒平瓦	裏	1			2%			
		Ⅰa5	－	熨斗瓦	小口	1			2%			
Ⅱ	Ⅱa	Ⅱa1	上または下	丸瓦	凸面	1			2%	6%	8%	
		Ⅱa2	－	熨斗瓦	小口	1			2%			楽山荘庭園土塀に同様の刻印の雁振瓦あり
		Ⅱa3	－	熨斗瓦	小口	1			2%			
	Ⅱb	Ⅱb1	－	桟瓦？	裏？	1			2%	2%		
刻印分類不明			不明	丸瓦	凸面	2			4%	4%	4%	
計						54			100%			

第 10 表　刻印瓦集計表（総計）

図　版　1

調査地航空写真

発掘調査地航空写真

図　版　2

米蔵跡全景

米蔵跡土層断面

米蔵跡西辺基礎石上の黒色付着物

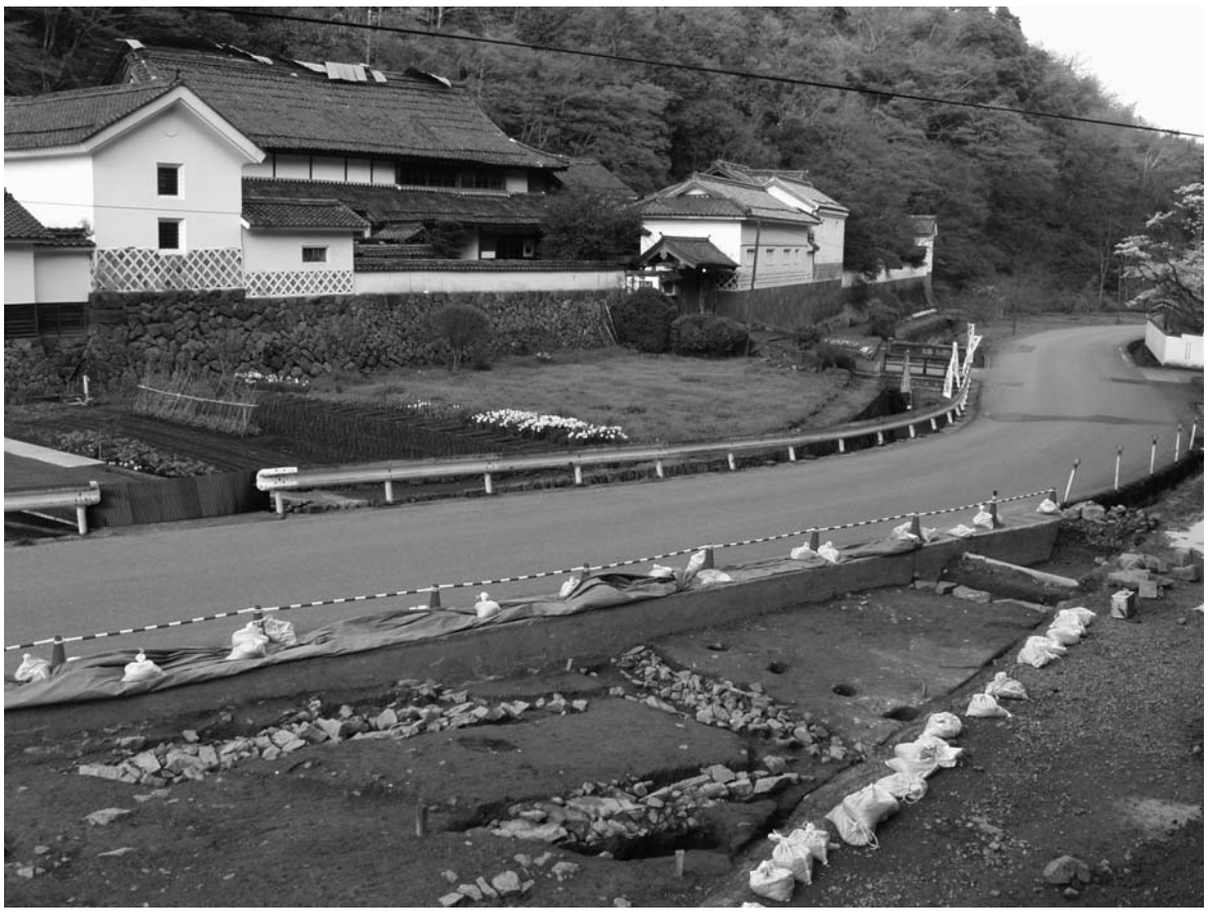
米蔵跡南北ライン北端部の土層断面

米蔵跡北西隅の復元工事状況

米蔵跡北西隅の復元工事状況

復元工事終了後の米蔵跡

図　版　4



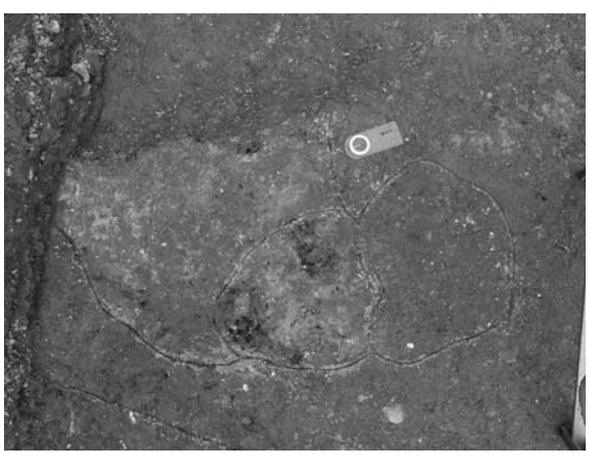
A区東半遺構と堀氏本家

A区東半検出遺構

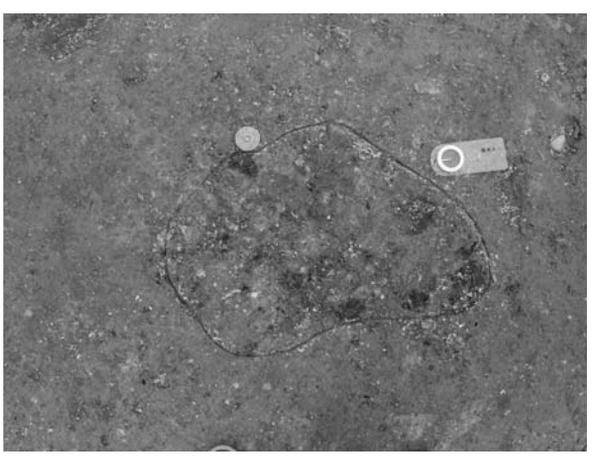
A区ＳＤ７(土管)とＳＶ１(石列)

A区ＳＶ１ドリル痕のある石①

A区ＳＤ８土蔵断面



A区ＳＸ１検出状況

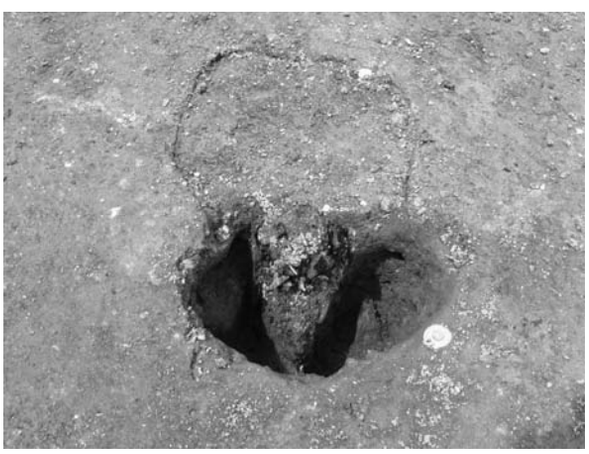


A区ＳＸ２検出状況

図　版　6

タタキとＳＡ１（柱穴列）

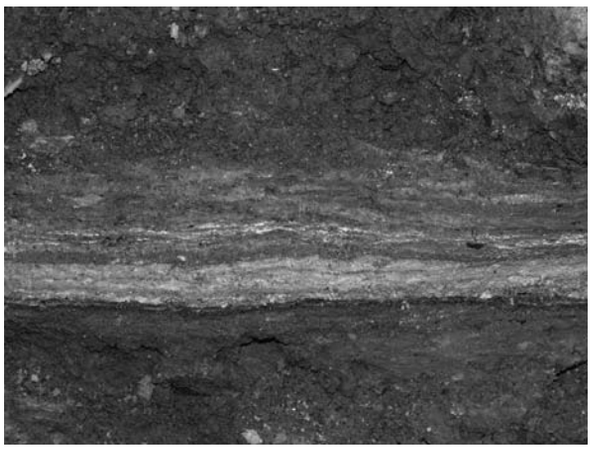
Ａ区ＳＰ１半掘状況



Ａ区ＳＰ２半掘状況

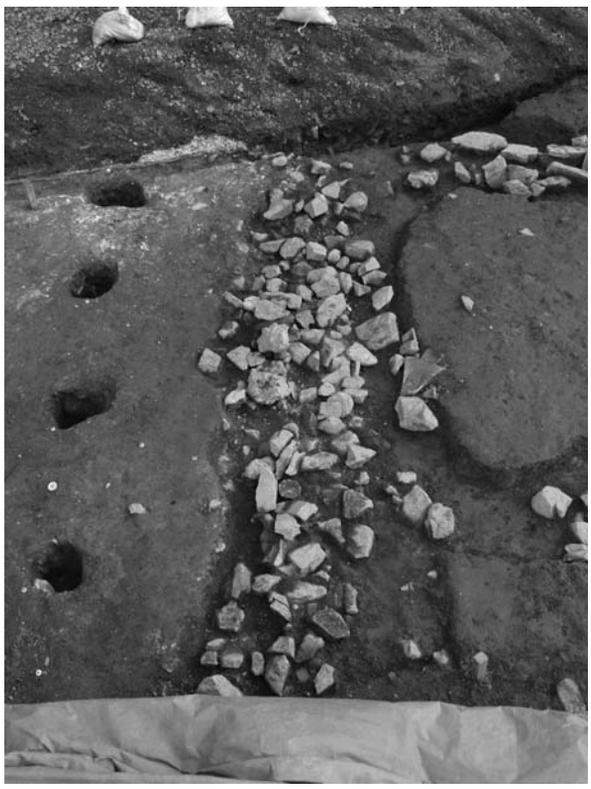
Ａ区ＳＰ３半掘状況

Ａ区ＳＰ４半掘状況



タタキ・漆喰の断面

漆喰の断面



Ａ区ＳＤ１発掘状況

Ａ区ＳＤ２発掘状況

Ａ区ＳＤ３発掘状況

図　版　8

ＳＤ１硫酸瓶蓋出土状況

ＳＤ２暗渠部分

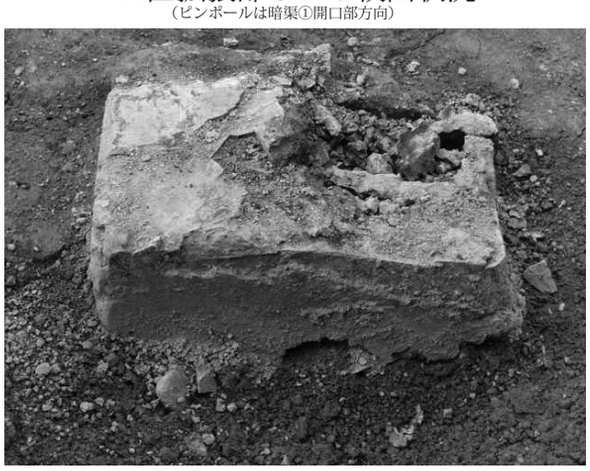
ＳＤ３暗渠部分

Ａ区ＴＲ１内ＳＤ３(?) 検出状況

Ａ区ＴＲ１内ＳＤ 10 検出状況

Ａ区拡張部ＳＤ９検出状況
（ピンポールは暗渠①開口部方向）

Ａ区ＳＰ５・埋石ほか検出状況



ＳＰ５検出の鍛煉瓦

B区ＳＧ１・ＳＤ４発掘状況

図　版　10

B区ＳＧ１発掘状況

B区ＳＧ１・ＳＤ４発掘状況

B区ＳＤ４内部の堆積状況

B区ＳＤ４西端

B区ＳＧ１モルタル下から検出のＳＤ４

B区ＳＤ４新(左)・旧(右)接合状況

B区ＳＧ１下から検出されたB区ＳＤ４

図　版　12

Ｂ区ＳＧ１赤瓦使用状況

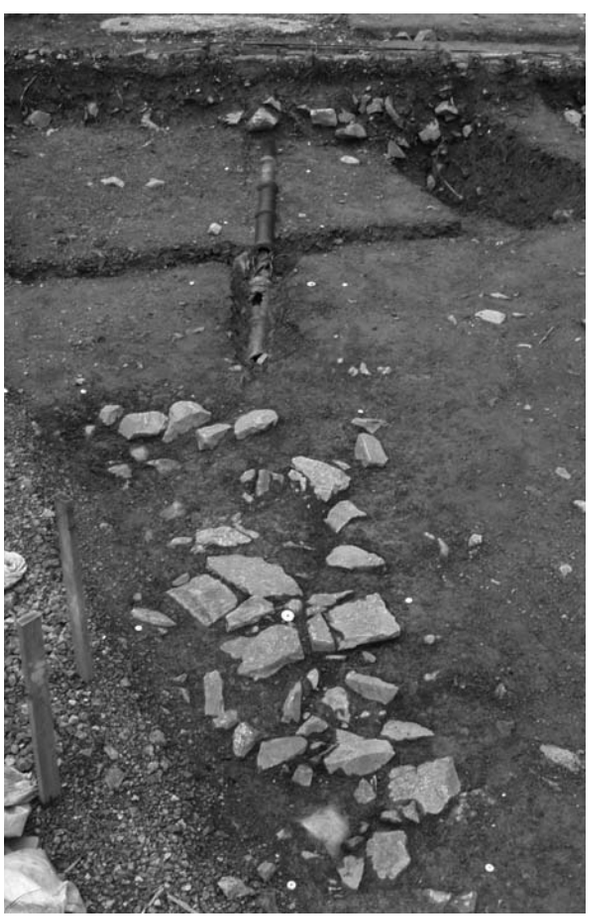
Ｂ区ＳＸ 25 土層断面

池庭遺構移築復元工事状況

移築復元工事後の池庭遺構

Ｂ区トレンチ全景

B区ＳＤ５と石積Ｂ面中の排水口②



B区石敷遺構とＳＤ５

B区ＳＤ５部分

B区ＳＤ６検出状況

図　版　14

石組水路A面全景

A面暗渠①（SD9）付近

A面暗渠②（SD10）付近

A面開渠①左付近

A面開渠①右付近

石組水路Ｂ面全景

Ｂ面左端隅角部付近

Ｂ面排水口①（ＳＤ４）付近の現況

Ｂ面排水口②（ＳＤ５）付近

Ｂ面排水口①（ＳＤ４）詰石除去後

図　版　16

燻瓦が多用された楽山荘庭園

楽山荘庭園裏門

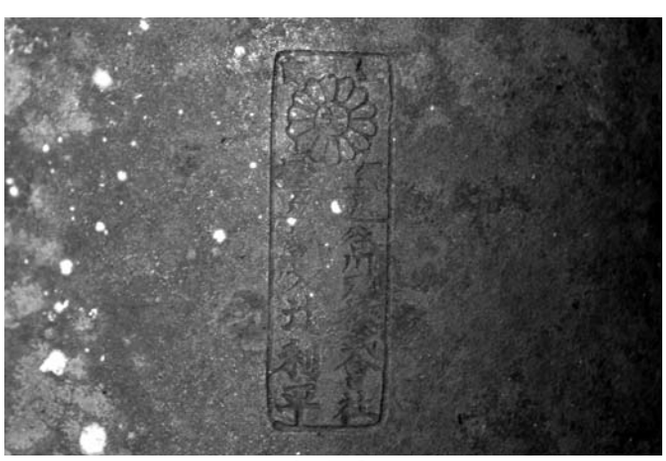
楽山荘庭園裏の土塀

裏門の刻印瓦

土塀の刻印瓦①

土塀の刻印瓦②

刻印①



刻印②

報 告 書 抄 録

ふりがな	はたがさこいせき
書名	畑ヶ迫遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	津和野町埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	
編著者名	宮田健一
編集機関	津和野町教育委員会
所在地	〒699-5605　島根県鹿足郡津和野町後田ロ 64-6　℡ 0856-72-1854
発行年月日	2009（平成 21）年 8 月 28 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
畑ヶ迫（はたがさこ）遺跡	島根県（しまねけん）鹿足郡（かのあしぐん）津和野町邑輝（つわのちょうむらき）	W	74	34 度 29 分 46 秒	131 度 43 分 21 秒	20050315 ～ 20050325 20051118 ～ 20060324	350㎡ 122㎡（うち名勝指定地内 42 ㎡、名勝指定地外 80㎡）	県道拡幅工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑ヶ迫遺跡	集落跡	近代	池、暗渠、石列、土坑、柱穴、タタキ、焼土遺構、敷石遺構、煉瓦敷き遺構	陶磁器、瓦、石製品、金属製品、ガラス製品、煉瓦	

（要約）

畑ヶ迫遺跡は近世～近代の銅山師であった堀家関連の遺跡である。A区東端では、米蔵跡と伝えられる煉瓦敷きの床面を検出し、一部でその断面を確認した。A区西半では、営繕場跡と伝えられる遺構面を検出した。敷地を区画する石列と柱穴列の間にタタキが検出され、左官の仕事場があったと伝えられる部分から漆喰が検出された。トレンチ調査の結果、遺構面の地下には石組み暗渠が巡っていることも明らかとなった。また、笹ヶ谷銅山の副産物で「鍛煉瓦（からみれんが）」と呼ばれる煉瓦状の遺物も出土した。B区では、堀氏家作跡の池庭と導水施設等が検出された。導水施設は、燻瓦の丸瓦をあわせ口にして繋いでおり、刻印から京都産であることが明らかとなった。この他に泉州産の燻瓦も出土した。同様の燻瓦は旧堀氏庭園「楽山荘」付近でも使用されており、関連性が注目される。

津和野町埋蔵文化財報告書

畑ヶ迫遺跡

2009 年 8 月 28 日

編集　津和野町教育委員会
　　島根県鹿足郡津和野町後田ロ 64-6
印刷　株式会社ミヤザキ
　　山口県山口市大字朝田 747-4